

エ、90-6/

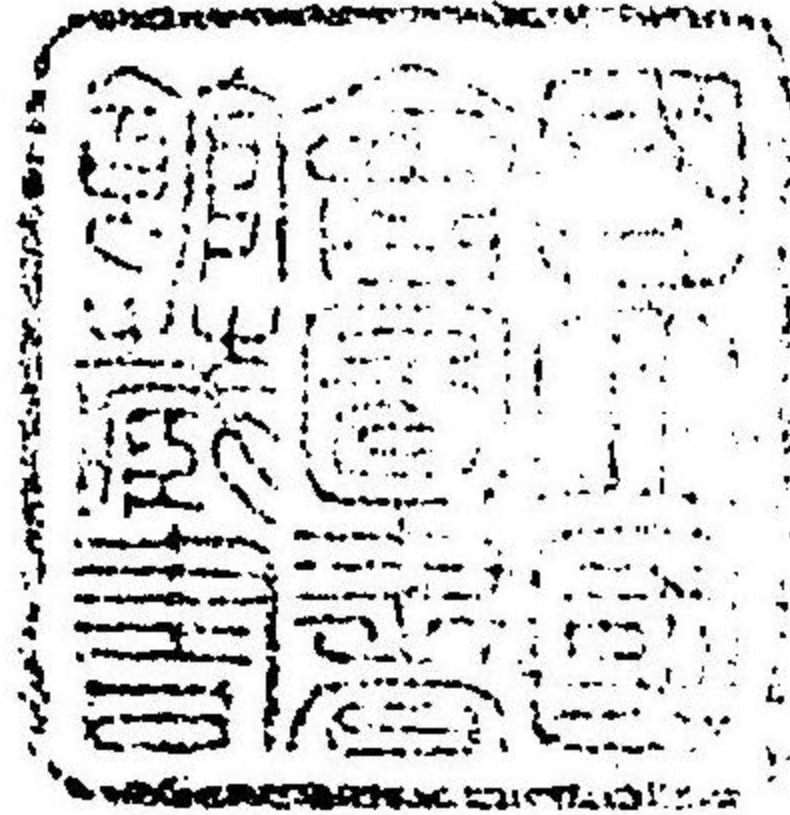
文學士 高橋 亨著

朝鮮の物語集 附 俚諺

日韓書房藏版



929.13  
Ta 289t



221927

### 序

韓國の現状を調査して、我が中古史の半面と比較せんが爲に、昨年の冬、韓國に出張しつる時、多くの人に會見して、様々の事どもを見聞しけるが、其國の俗間に傳はれる説話又は俚諺に關しては、文學士高橋亨君に益を得たる所多かりき。

高橋君は、我が東京帝國大學文科大學漢學科の出身にして、久しく韓京に在り、彼地の高等學校の學監として、數多の韓人子弟を教育し、善く韓語に通じ、其國情に熟せり。其監理せる學校の子弟は、諸方より來り學ぶものなるが故に、従つて廣く各地の俗話俚諺を調査するの便あり、此を以て多年採訪蒐輯せるもの頗衆く、これ此編著ある所以なり。

抑日韓は同邦にして、其古傳説には同型なるが多かりしに、

政教共に分れ、年代又遷りて、各自變化したる所に、其國民性を露はせり。今此書について其一二の例を言はゞ、鬼に瘤取らるゝ話の如きは、殆ど宇治拾遺物語の傳説と同一なれども、羽衣傳説の如きは、彼我によりて其國民性の異同を表白したり、即ち我はこれを海濱の事となしつるに、彼は山間の事となし、彼は天女の昇天を追跡して雲に入らんとせるに、我にはさる執着なく、澹泊なる所に國民性は窺ひ知らるべし。

韓國は大陸に接して利病ともに支那影響を受くること一方ならず、中にも科擧の制の如き最其弊習を存せり、日本にも科擧に類すること、中古にはありつれども、早く廢したるに、韓國には近年まで行はれて、士人は皆科擧に及第して高官に昇り、美人を得て配偶となし、福祿身に餘るといふが唯一の理想

なりき、さればこれに關する俗話は極めて多し、此に收めたる春香傳の如き最よく此意味を表明し、殆ど支那小説を讀むの面影あるも、亦韓國が日本に似たると共に支那にも似たる所あるを證するものなり。此兩國の影響以外に、韓國の眞面目の存する所果して幾何なるかは、亦興味ある調査ならずや。其諺語に於けるも亦同し。

本書はこれらの俗傳諺語を蒐輯せるのみならず、又其事實の解し難きものには解説をも付し、批評をも加へたれば、讀者をして善く民情を知り、國俗を辨へしむるに便なり、書中に挿める上中流の紳士の家屋の挿圖の如きは、高橋君が余の囑を納れて特に調査せられしものなり。凡かくの如き類は、高橋君の如き、韓語に通じ其國情に熟したる人にして、始めて能

くする所ならん。

されば余は本書によりて、歴史上より日韓古今の比較を爲すに便利を得たるを感謝するのみならず、更に廣く一般の文學に携はる人士に薦めて、諸方面より日韓文野の異同を比較すべき材料にも備へたらんには必幾多の發明あるべきを信ず、豈たゞ一部の御伽譚として娛樂的の讀本に供すべきものならんや。

明治四十三年八月

萩野由之識す

### 自序

鴨綠、豆滿の兩江源を長白山頭の靈湖に發し、谿を縫ひ谷を穿ち東西に分流するや。河床の級をなす處に到りて輒ち急下して激潭を成し、渦を捲き、輪を作し、洄瀦するもの無數、或は淺く或は深く、或は小に或は大なり。聞く嘗て人あり、其の一潭を浚ひしに拳大の金塊燦として現はれたり。蓋し長白山は東亞の大金山にして、其の密林深壑金氣翳勃たり。されば鴨綠豆滿の水急瀨矢の如く走る中、何時か兩岸河床の金を奪ひ去り、其の墮ちて潭を成すや、流波停回して其の抱ける所の金を放つ。金と金相率き相合して何時か團塊をなして沈澱したるものあり。

予は各種の民族の構成せる社會が、間斷なく源々發達の大生

二  
活を營みつゝある間に於て、時に其特色と精神とを沈澱せしむること、猶長白山の金氣鴨綠豆滿の激潭々底の金塊となる如き者あるを信ずるものなり。若し吾人能くこの社會生活の洗練せる沈澱物を浚ひ擧ぐるを得ば、即ち其社會生活の精神の眞を獲たるものなり。即ち其國の文學美術が、幾百千年間斷續的に出現せる天才に依りて情操化され具象化されたる社會精神と社會理想とを傳ふる。歴史傳記が過去を語りて而して其の中に隠さるる時代精神と理想の音響を傳ふる。其他舊習慣好尚の其々其時代に於ける重要な意味を教ふる等、皆何れも其の中に社會生活の流れの停留して作成せる沈澱物を含有するものなり。彼の物語及俚諺の研究が社會學的價值あるは亦た實に此に在りて存す。蓋し俚諺は社會

的常識の結晶にして、いつの世にか或人之を創稱して萬人之に和し、遂に社會に風行し、其の或るものは今日猶用ひられて千萬無量の意味を一句半語に寓し。物語は社會生活の精髓的縮圖にして、或は極めて上代に、或は下りて中世に若くは近き過去の人の手に成り、善く社會の興味を刺戟して口々相承けて長く傳はり來れるものなり。社會を唯だありの儘に看過すれば一枚の寫眞を見るが如し、何等の意義をも斟む能はず。社會觀察者はありの儘の生活の中に動かぬ風俗習慣の特色あるを認識せざるべからず。風俗習慣を究むるは猶不充分なり。更に其の風俗習慣を一貫する所の精神を看取し、而して其の社會を統制する所の理想に歸納して、始めて社會研究の能事畢れりとなすべし。是

の社會精神と理想とを完全に發見し得たらんには、これ網の大綱を提げたるにて、爲政者社會政策者の經營施設にも多大の貢献を與ふ。直ちに民衆の心泉を斟みて此に陶冶の工夫を着くるを得せしむればなり。

予客歲以來如上の目的を以て朝鮮の物語と俚諺とを蒐集し、積むて本書を成せり。され共未た以て朝鮮社會の精神と理想との眞音を傳へ得たりといふ能はざるは勿論なり。更に研究を各方面に推擴して、正史、野史、法律、文學、及現在生活狀態等をも究めて漸次此に及ばんとするものなり。されども本書の中に既に其の社會眞相の微露すること、金龍の鱗甲黒雲間に閃くが如きものなきにしもあらざるは蓋し亦た讀者の首肯する所なるべし。

若し其れ朝鮮の物語と我の其れと及び支那の其れとの間に氣脈の通るべきある。俚諺の同工異曲なるものあるを知りて。更に進むで日韓風俗好尚の比較をなさんは讀者の自ら默契する所に任す。

庚戌梅雨節

於京城 著者 識

# 朝鮮の物語集附俚諺目次

一、瘤取	一
一、城隍堂	五
一、貧郡守得錢	一〇
一、嗑較べ	一七
一、風水先生	二一
一、巳時下棺午時發福	三四
一、得對句半死	三六
一、解語龜	四〇
一、鬼失金銀棒	四五
一、賈名人	四九

一、興夫傳……………五六

一、淫僧食生豆四升……………六三

一、片身奴……………六七

一、無法者……………七五

一、明者欺盲者……………八二

一、盲者逐妖魔……………八五

一、妓生烈女……………九四

一、癬疥病童知雨……………一〇五

一、双童十度……………一〇七

一、韓様松山鏡……………一一四

一、仙女の羽衣……………一一七

一、富貴有命榮達有運……………一二四

一、人と虎との争ひ……………一三八

一、神 虎……………一四三

一、長花紅蓮傳……………一四六

一、再生縁……………一六四

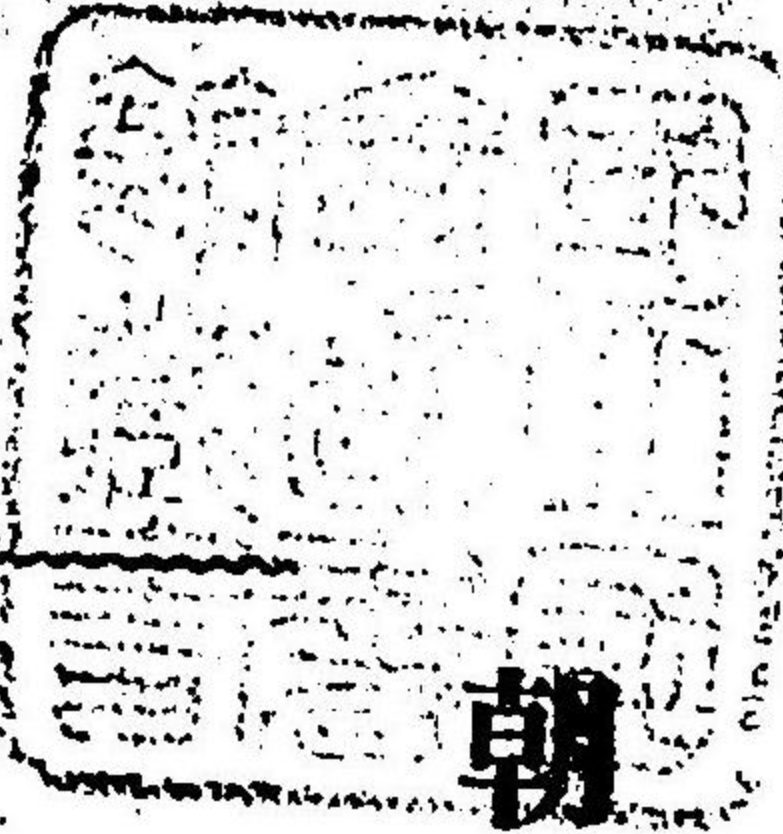
一、春香傳……………一八三

一、毒 婦……………二〇二

一、朝鮮俚諺……………五百四十七……………二〇九

朝鮮の物語集附俚諺目次終





# 朝鮮の物語集附俚諺

文學士 高橋亨 著

## 朝鮮の物語

### 癩取

今は昔、と或る田舎にいと大けき癩(二)を頬に下げたる老爺ありけり。勿論其の頃のこととして、之を切取らんの醫術もなく、幾十年の間徒にブラ／＼と邪魔氣に打振りながら困じ果てありき。一日の事なり、山に採薪に往き日影を見忘れて、未だ吾家に歸着かざるに日はドブリと暮れ、月の光も朧なるに、辿り往かんと例の朝鮮一流の惡道の心元なれば、エ、儘よと道傍の一軒の荒屋に薪打ち卸して、今夜は此處にと覺悟したり。見渡す限り人里離れし一ツ家の、夜更くるに従ひ何となく荒涼寂寞に堪へて眠るべくもあらず。

層起きて過さばやとて、日頃自慢の咽喉を惜し氣もなく張擧げて、おもしろしと云ふ歌共歌ふに、實に梁塵も漂ふ許りなり。

かゝる寂しき境には、必ず色々の妖怪共住みなすを法とすれば。夜としなれば、彼等は皆盛に活動を始め往さ來るさいと頻繁なり。忽ちこの老爺の歌に驚かされ、通り懸りの妖怪共我もくくと詰めかけ來り、餘りの歌ひ上手に皆恍惚と聽きとれぬ。

異種異形の妖怪共の何時ともなく現れ來りて、別に我を害せんとはせされ共、取巻きて居列びたるには老人頗る吃驚したれ。かゝる所に妖怪の住むべきは勿論の事なれば、逃げも隠れもせんとは思はず。却て弱味を見せまじとて、矢張聲高に更におもしろき歌共數を盡して歌ひたり。餘りの上手に滿場寂として音なく、妖怪共も感に堪へざる様子なり。

かくて歌ひ明して、夜も漸く東雲ならんとすれば、老爺はホッと安心し、妖怪共は今夜のいとも短さを打眩きつゝ各歸途に着かんとす。其の内一番頭と見ゆる妖怪、流石に怪しき愛嬌を満えながら。老爺よ君は如何にしてかゝ

る美しき聲をば出すかと問へり。老爺はもはや氣丈夫なれば、さればとよ大王の見らるゝ通り、我は此處に大きやかなる瘤を持って、これこそ我が聲の溜め所よと答へたれば。妖怪さらばいかてその瘤をば我に賣り玉へとて、種々の寶共を持ち出て交換してけり。

日影刺しぬれば妖怪共は野末の露と諸共に消えて迹なし。老爺は獨りほくそ笑み、昨宵はしてやつたり、年來の悪疾は癒る、難病中の難病なる貧の病さへ癒えたりと。薪も何も打捨てゝ急ぎ足にて我家へ歸りぬ。此に老爺と同じく頬に瘤持てる一人其の町内に住みてけり。一日老爺の瘤なくなりたるを認め、怪しみ其の譯を糺して、さらば己れも其の妖怪共を騙しくれんと。一夜かの野中の一軒屋に往きて、これも自慢の下手にはあらぬ歌を歌ひながら、妖怪今かくと待ち居たり。妖怪共は忽ち聽き着け今夜も先夜の嘘吐き老人來居るとて、打誘ひて來合ひ、色々の歌共注文して歌はせ、終りに如何てかくもおもしろく歌をば歌ふぞと問ふからに。瘤爺は待ちたりと許りに眞面目顔して、見らるゝ通りこの大けき瘤よりぞといふ。妖怪の大將カラくと聲

高に打笑ひ。さてもこの嘘付き爺め、先日我れ一人間に欺かれ、高金出して肉瘤を買取り、之を頬に附けて、さて歌はむとすれ共、美聲はあるか、却りて聲出悪くき様なりき。もはやこの瘤我には用なし。汝の聲の出處ならば、これも序に汝に遺らんとて元の瘤の傍に又一つ附けてやり、人間の愚さを見よきて一同聲高に囃し立哄笑しつゝ出行けりとぞ。

(一) 瘤……韓人には瘤持てる者中々多きが如く、韓人間には之を福とも云ひ習はせり、其のこの瘤取りの話しより出しか否やは定かならず。

(二) 朝鮮の悪道……鴨綠江を超えて滿洲に入れば道路といふもの定形なく、一望萬里の何邊にてもあれ、行人の隨意に跡を附けて歩きまはり乗り交はるなれ共。朝鮮は其より少しは道路らしき道路ありて、自ら一條行人の軌を成せり。され共別に道路の修繕監理等なければ、凸凹上下天然の儘にして、石塊磊々溜水流れず。市街以外一步を出れば到底夜道など出来べからず。まして一朝霖雨至る時は橋梁もなければ堤坊もなく、人馬何れもザンブ／＼と處々の溪流小溝を徒涉せざるべからず。

(三) 妖怪……朝鮮には妖怪を「トッケビ」と呼び、鬼神と妖魔を皆此中に包含す。「トッケビ」は何處にも何物にも在らざる所なし。例へば老木には老木の「トッケビ」あり。厨房にも厨房の神あり。疾病には疾病の神あり。其他山岳江川「トッケビ」の無き所なし。禍福の權あり。靈魅の術あり。愚夫愚婦は尊敬大方ならず。

### 城隍堂

昔し周の太公望呂尚は、其壽一百六十歳、八十年間窮し八十年間富み且つ貴かりしとかや。されば其老妻餘りの長き困窮に堪へて、我から暇を乞ひて出行き。後太公富貴を極むるや再來りて妻たらんと哀願したるに、太公盆水を庭に捨て、これ見よ覆水再び盆に返らずとたしなめ。汝の様なる輕薄女には永遠に用なしとて唾を吐きかけたり。彼女憤りと耻とにて家に歸りて直ちに死し、死して遂に鬼神となれり。朝鮮も之を祭りて城隍堂と云ふ。村の

入口街道の傍森の中にさゝやかなる祠の京都所々に見ゆるは是即城隍堂なり。往きかふ人は其の罪を滅しやらんとてか、之に唾を吐き掛け、小石一つ投げたり。年既に三十を超えぬれども、誰ありて荆妻半個も世話せんといふものもなく。總角徒に長く垂れてチョンガ／＼と呼捨にされ何の因果かと嘆息し居たり。此奴天性の將棋好にて、常住空々たる無一物なれ共、將棋盤と駒丈は肌身を離さず。一日例の如く棋を肩にして浮き雲の的もなく彷徨ひて、端なく城隍堂の前を過ぎて不圖心留まり腰を卸して烟草を喫みながら、いざと將棋盤を取出して堂に向て、城隍堂様一番棋を闘はさんと云ひて、又自ら應と答へ。さらば此方が城隍堂様、此方が我。併し神様只指しても面白くはあらず、一番賭けましよう。我が負けなば神様に酒一壺、明太魚一尾を上げましよう。若し神様負けましたら我にみめよき女房一人授け玉はれと。又自ら城隍堂の代りに應と答へ。さて指す程に、初めの一番は彼負けたり。それ

ては賭を出しましよとて村に出て如何にしてか酒と明太とを調へ來り。さて神様我が負けましたれば此に賭物を差上げませうと、自ら應と答へて手酌にして飲み終り。然らばもう一番とて指す程に、今度は見事に城隍堂の負けなりぬ。さて神様お負になりたり、我に必ずみめよき妻を授け玉へとて、笑ひ乍ら棋具を收めて出立てば、日もはや斜陽半山に残る頃となりぬ。

彼一杯元氣に足に任して村へと下るに、道傍に爪外れ尋常なる一婦人、井戸水を斟み了りて水瓶を頭に載せて徐々歩き出さんとしたりしが、彼の來るを認め驚喜せる態して、やよ何某よ、我が夫よ、今歸り來れるか。妾は數日前より今日か今日かと待ち明し居たり。さるにても彼の一件如何になり行けるかと問ひ掛けたり。風來人たる彼は氣輕にはづを合して。さればとよ、急ぎに急ぎしがやう／＼今歸りぬ。又彼の一件は全く失敗に歸したりと答ふ。彼女然るか其も詮方なし、併し我夫さへ歸來りたれば事は安心といふもの、いづれ一處に往きませとて手を引かん許りにいそ／＼と前に立ちて導き、とある相當なる一軒の村屋に入り。母よ我夫歸來ませりと高聲に母を呼べば、母

もいそ／＼出来り賢に何某歸來れり、彼の一件如何に成行けるかと問ふに。彼奴は白々しく一件は全く失敗せりと答へ、母もそは寔に角をなだの案外に早く歸れるが何よりなり。さあ早く入りませとて、色々晩餐を調理してもてなし大方ならず。やがて食も了りて女房と共に内房に入りぬ。

かくて彼は數日間は生來始めての樂天地に起臥したるに、一日女は不圖彼が己の夫と違へるを見付けて仰天し、密と母にも耳打し如何にせば可ならんと相談す。母も彼日は既に黄昏なり、殊に老眼の確とは物の見え分ねば、汝のいふ儘に我子と許り思ひしに、成程よく見れば少し違ふ様なり。され共出来しことはもはや詮なし。よく譯を云つて出て行て貰ふより外なけんとして、彼奴を呼びておとなしく出行さくれよと談せしに。此奴は頑として動かばこそ、御身等の方から遣行く人を強いて呼び入れておき乍ら、人迷ひなるから出て行けよとは聞えず。誰が來ようとの儘に出ては行かずといふ。二婦人ほと／＼困し果て、其の中に眞夫の歸來る日も次第に近付く、仕様事無しに家中の錢を集めて別に一軒の家を購ひ少しの土地迄も添へ、知り合より新婦

を迎ひやり。かくて彼は俄かに總角を切りて髪を結ひ上げて一軒の主入となり、若き妻と睦しく暮したりとぞ。

(一)總角……朝鮮は長幼の差別甚だしく、長者は幼者を待すること主人の奴婢を待すると同じ。幼者とは年齢の多少をいふにあらで、未婚者をいふなり。未婚の男女は總角トウカクと稱して髪を編みて長く背に垂る、婚約成りて始めて之を上げ結髪す。一度結髪すれば如何に乳臭の少年なりとも最早僕視婢呼せらるることなく、一室を占領し、年長者に對しても畧ぼ對等に交際するを得。されば資産あるか門閥ある家は十歳になるやならず早く童女に婚約せしめ、男には成人らしく笠冠を戴かしむ。され共餘りなる少童には是國人の尊ふ黒毛の冠笠は似合はねば、草笠とて藁もて編みたる黄色の笠を戴かしむ。されば年壯にして猶總角を垂るゝは是上なき甲斐性なしにて、我子の様なる少童に婢僕遇されて怒ること能はざるなり。

## 貧郡守得錢

京城の日本人町泥岬ヌカガキと云ふは、今こそ京城の京橋區日本橋區さては神田區となりて、京城第一、恐らく朝鮮第一の繁華の巷となりたり共。李朝の始めより甲午前迄は、北村に對する南村とて、夏暑く冬寒く、雨に泥濘となり、風に砂塵となり、仕様事なしの惡地にて、勢力なき貧兩班ニョウバン共の住處なりけり。されば何れも何れも一貧徹骨の兩班共、上邊には食はねど高楊子の古風こそあれ、内心は鶉の目鷹の目にて如何ニョウて郡守ニョウの一つもありつきたしと、これ許りを終生の希望とこそするなりけれ。

これも同じく南村の貧兩班の一人、年が年中粥腹の先生、如何なる運の廻り合せか、思ひも掛けず祈願叶ひて首尾よく瘠郡の郡守となりたりけり。然るに天道何の惡戯にや、着任して虎の皮に宴坐して、郡守様々と仰がれたかと思ふと間もなく免官の辭令天降り、又々遙々と京城指して落歸るべき身と

なりぬ。赴任の旅費さへ漸々郡の官屬に依頼して作り來たりし貧兩班の、解任となりては旅費さへ出處なし、實に浮木に離れし盲龜の境遇。され共新來間もなき新顔の誰に意中を明して相談すべくもあらず。事情を見抜きしニョウしニョウ郡の官屬の一人私かに郡守に向ひて、我に打任し玉はゞ決して悪しくは謀らうまじと云へば、願ふてもなき幸と萬事よろしくと手を擦らん許りなり。さらば來ませとて其の夕郡守引連れ往く先は日頃金持の名高き郡の酒屋の酒庫なり。かねて案内知れりとおぼしく、巧みに酒庫に忍入り。遠慮もなく酒瓶より酒斟出してニョウ翻る。郡守も一切夢中なれ共、幾分焼け氣味に、彼のする儘にせよといふ儘に盛に翻る。一杯一杯又一杯。今は苦樂一切忘果て鼾聲々々酒瓶に添寝の夢にぞ入りたりける。これを見濟まし彼吏員は酒庫を飛出し、大聲に泥棒ありと叫立て雲を霞と逃失せたり。

酒屋の者共泥棒ありといふ聲に驚きて、手にく得物打ち振り聲せる方なる酒庫に入見れば、こはいかに身形賤しからざる盜賊が悠々と前後も知らず酒瓶の傍に酔倒し、今や甘夢の眞最中なり。己れ太き奴とて繩にて固く縛し

ぬて酒庫の前なる柿の木に吊り下げ、今夜は遅し明朝こそ郡守に訴へんと皆々打ち散じてけり。

折を見済まし以前の吏員、首尾上々吉と柿の木より郡守を救ひ卸して逃げ歸らしめ、其の代りに酒屋の離れ座敷より八十に餘れる主人の老母を攫來り、高々と柿の木に吊上げたり。

かくとも知らぬ酒屋の主人、翌朝早々郡衙に出頭し、昨夜盜賊酒庫に入りたるを運よく捕へて今裏の柿の木に吊りおきたりと訴へたり。郡守吏員はさあらぬ顔して、其は出来したり、手柄なり。直様捕盜手を遣して引立てさせんとて、やがて捕盜手の縛り來れるを見れば、こはそも如何に八十に餘れる老婆、餘りのことゝ堅き縛りに聲も得立てず普然として立ちにたり。

仰天せるは酒屋の主人。こは何事と走寄り介抱せんとすれば、郡守はハツタと睨睨まひ。己れ不孝無道の鬼子、我母を縛めて木に吊り上げ、剩さへ盜賊と訴ふるとは何事ぞ、獄丁早々は奴を引立てよと云ひ訖りて、傲然と席を立ちたり。

酒家一家は大騒動、何が何やら一切夢中なれ共、覺むべくもあらぬは主人の禁獄一件なれば、この妙薬はこれ許りと、産を傾けて賄賂を使ひ、漸々赦されて主人は出獄し。郡守はかくて十二分の財貨を得旅裝萬端美々しく、跡を濁さず立ちてけり。但し彼の吏員が郡守以上の利得をせしめしは勿論なり。

(一) 兩班……兩班とは是國の貴族若くは士族の階級に屬する所謂名門の總稱にして、文班武班兩班の意味なり。即ち其の家門文臣にして宰相大臣に迄至り得る者、及び武班に屬して大將に至り得る者は是なり。但し後代に至りては文臣にして武職を兼ね武班にして文臣に轉ずる者亦頗る多く。孔明ならねども所謂入相出將たり。

此に序を以て朝鮮の社會組織の大概を説明せん。朝鮮は常民の階級組織を大概三級に分ち、第一階級は即ち兩班、第二階級は中人、第三階級は常漢即平民なり。兩班は上述の如し。大凡名門といふ名門は皆之に屬し、又從來名門ならずとも一人大臣宰相に上りて重臣たるに至れば、其の子孫よりは兩班に列して社會的特權を獲得す。中人とは多く前朝の重

臣の家にして李朝に至りては大臣たること能はず。され共平民とは同一視する能はざる所の一階級なり、重に司譯院、典醫監、觀象監、寫字監、圖書署、計事、律官に出仕し、役徳最多し。されば中人は家計豊にして家柄こそ劣れ兩班を白眼に看、常に我階級内に於て結婚し、至りて傲岸の癖性あり。され共其内人才頗る多く、社會的地位低きに拘らず判書即ち大臣に至れるもあり。今の度支部大臣高永喜は實に現時中人の蹇楚なり。第三級の常漢にも亦分類あり、鐘路以西に住する宮内府掖庭は宮裏の走隸にして之を世襲し、他の奴僕に比すれば衣食最も饒にて、常漢中の優等者なり。又東大門内に住する軍屬は兵卒及下士官を世襲する常漢にして、立身すれば將軍たるを得ざるに非ずと雖、多方は是れ賤卒を以て終身するものなり。され共猶官吏の端たるは脱せず。次に農、次に商、最下を工民となす。就中農は國の本なれば賤業とは認められず。されば兩班にして京城に勢力を失ひ、若くは中央政界の奔走を厭ひ、高踏したる輩の田園に隱居すれば、破笠短蓑躬ら農夫に伍して耕耘し少しも耻辱

とせず。兩班は依然兩班にして、尋常農夫に向ては尊嚴を維持し、同じ田畝に下立ちて均しく農事に勤め乍ら、少しく兩班に禮を失するあらば之に私刑を課して構へなし。商民となりては階級頗る下り、工民に至りては更に下り殆ど奴隸に近し。中人常民は科擧に應ずる能はず、常漢の次に又奴隸及穢多の階級あれ共是は常民とは云ふを得ず。

(二)郡守……郡守の人民に對するや廣大無限の權柄あり。行政司法盡く其の專擅に委し、宛ら我が昔の小大名の如し。されば人民は之に對しては猫前鼠の如く敢て仰見ること能はず。一人郡守を三年すれば、一族一生豊かなりとは是國の俗諺なり。郡守の上に監司あり。監司は殆んど大名の如し。され共近代に至りては郡守の交迭走馬燈の如く速かなり。一郡にして一年中六回の郡守を送迎すること珍らしからず。されば人民其の都度惜別歡迎に是日も足らず。財を糜すること言外なり。太抵新郡守任命され其の人名郡下に知るゝや。郡の官屬は代表者を撰定して上京せしめ、初見の禮をなし何日下向するかを尋ね、多くは支度料旅費を進



呈す。かくて下郷して歓迎の準備に忙し。郡守愈々來任すれば、邑外一里より三里に近接し、儀仗兵左右に整列し軍樂を奏し、警蹕して郡衙に入る。此に大宴を張り郡妓をして唱歌舞踏せしめ、連日の酒池肉林の興を盡す。其の去るや亦免官にあらずば相應に惜別の宴、惜別の贈、紀功の建碑あり。民財の浪費一々名状すべからず。

(三)郡の官屬……郡の官屬は之を衙前アヘンと云ひ。多く地方の土豪之を世々にす。されば郡守は傀儡にして實は郡治の一切は彼等の方寸より出づ。誅求も彼が爲す所にして、收税も彼等の爲す所なり。衙前は別に彼等のみの郡内秘密反別帖を有し、郡守には之を示さず。衙前には更に彼等の反別帖のみを提示す。されば衙前は收税には己の帖符に照して收め、上納には郡守の帖符に照して上納し、差額は私腹を肥す。李朝數百年の悪政の過半は彼等の罪なり。

### 嘘較

今は昔勢道兩班ありけり。日々夜々の獵官連にて門前市を成し、青蠅きなど云ふ許りなし。されば一日兩班一計を案出し、獵官の狼迹に宣告していふ様、爾今君等の運動には如何なる方法にても一切耳を貸すまじ。但し巧妙なる嘘言にて我を欺き了せし者あらば、其人には必ず官職を與へんと。かゝる布告を聞きたる彼等は、嘘説と飯とは我等の専門なり。我も我もと毎日考へに考へて、これでもかゝと詰め掛け、上手の嘘を話せども、此方は勿論彼等の上の上行く豪の者、嘘の戰場の大勇士として幾多の難戦に首尾よく勝利を占めて、勢道と迄經上りたる老兩班なり、いかて狼迹の嘘説に乗るべき。一言の許に嘘だゝと喝破し、誰れも見事に失敗してけり。

此にこれも狼迹の一人なる某。既に氣節寒冬に入りたる陰曆十一月の一日。老兩班に參見して、某事一昨日親友の誕生日の宴會に招かれたるに、如何にも富貴を極めし勢家の事とて、萬事萬端整備して山海の珍珠内外の料理、實

に近來稀なる盛宴なりき。中にもとりわけ衆客を駭絶驚絶せしめしは、一大盆に盛りたる鐘路の巨鐘。大の櫻桃の實なりきと云へば。老兩班大喝して、臙奴世に人鐘大の櫻桃あらんや、嘘言よと云へば。彼平氣に、さらば永道寺の鐘。程の櫻桃と云へば如何ならん。老兩班又大喝して、嘘言何處に寺鐘大の櫻桃あらんと云ふ。彼猶平氣に、さらば大盛の酒庫の酒瓶大と云へば如何ならんと。彼老又大喝して臙奴、何處にさる途方もなき櫻桃あらんと。彼愈々平氣に、さらば貧家の酒瓶大と云へば、エ、阿呆嘘言付と喝す。さらば茶碗大と云へば、これも大嘘言、下手嘘言と喝す。さらば栗實大と云へば、エ、嘘言。さらば大なる棗實大と云へば、それも嘘言。さらば小さき棗實大と云へば、之を聞きて兩班實に小さき棗實位の櫻桃はあらんと點頭したり。かくて彼は意氣揚々と辭し去りぬ。

辭し去りて彼盛に今番こそ巧みに老兩班を欺き了せたりと揚言すれば、狂連皆打寄りて、如何にして欺きたるかと問ふに、彼前の櫻桃の問答を繰述して、即ち最初話頭に於て一昨日の宴會に櫻桃を見たりと云へるに、老兩班之

を怪まざりき。今は寒冬なり、争て櫻桃實のある理あらん、老兩班櫻桃の鐘大といふに心を奪はれ、今の嚴冬なるに心付かず、終に一昨日棗實大の櫻桃を見たりと云ふを承引せりと。聞きたる衆人實にもと感じ入りたり。後老兩班これを傳聞きて一本参りたりとて、彼を某官に補せりとぞ。

(一) 勢道……一時權勢第一なる官人を云ふ。何事の奏上にて必ず彼を通じて始めて達するを得、勢の道とは善く名を付けたり。

(二) 鐘路の大鐘……鐘路の大鐘は京城の時の鐘なり。今猶午時と半夜とに打つ。音響餘り清爽ならず。一名又人鐘とも云ふ。人鐘とは人を鑄込みたる鐘の意なり。之には又俗説あり。其の昔この大鐘を鑄造せんとして、發起の僧侶諸方に寄附を募り歩きしが。ある田舎の一軒に寄進を請ひしに、主人なく母と一童とのみありて、いと幽かなる住居なり。母なる人いふ様見らるゝ通りの食しき暮しにて、寄進すべき一物もなし、如何にせば可ならん。已むなくばこの童にても寄進し参らせんかとして打笑ひぬ。僧侶も詮方なく出行けるに、鐘の鬼神この話をきいて痛く不快に思ひた

後勸募の事果て、鑄造を始め、やうく出来上り、さて撞き初めとて盛式を擧げて撞き試みたるに、些の音響も出ず。皆々不思議に思ひて色々と研究すれ共原因不明なり。然るに一發起者の其の夜の夢に、鐘の神ありくと現はれて、先きに某村の一婦人其の童を寄進せんと云ひしを未だ其寄進を受けざるが故に完成せざるなりと物語れり。終に事實を糺して官許を得、再鑄造の際其の童をも投じて今の鐘を作れりと。但し固より此俗説は荒誕にして、再鑄造の事蹟に牽強附會せる野人の造り事ならん。

(三) 永道寺……：京城東大門外の一小寺なり、今は唯だ京城兩班共の遊宴境たるのみ。

(四) 大監……とは正三品以上の位階を有する兩班を呼ぶに用ふる尊稱なり。従二品以下正三品迄は令監、従三品以下九品迄苟も官位を有する者は之をナリと呼稱し、以て一般平民と區別す、官尊民卑知るべし。

### 風水先生

今は昔京城に一人の風水(一)の大家ありけり。眉雪の齡を重ねて相墓の術愈々精しく、是道の名匠として天下に其名を馳せたり。翁に三子あり。仔細ありてか風水の術は學はせぬ共、家道豊なる儘に名ある師に就けて聖人の道を修めしめ、臨池の業も拙からず、老翁夫婦も何れ恐はあらずいとく愛てけり。翁の齡も漸々傾きぬれば、何時如何なる事のあらんも測難ければとて、三人の子供は折にふれ時に臨みて、家嚴百年の後には何處に奥ウツつ城を撰定せば吉祥なるべき、此處ぞとだに教へ玉ひなば、如何なる深山の奥わたり海の奥にても、必ず志を果し申さんと云へども、何故か老翁は其は既に我胸中相し定めたり、され共未だ教ゆべき時にあらず、少しく待てといふのみ。其後一年二年経て愈々翁の壽命心細くなり行くにつけ、屢々之を尋ぬれ共矢張待てくと答ふる許り。其の内翁健康益々衰へて、哀れ晩秋の露の蟋蟀の如く曉

方の燈の如く、もはや到底此冬は六かしく見えなれば。兄弟三人相談して、あして奥の城處を問ひたるに、こは我が口よりは云はじ、我が死後に友人某の許に赴きて教へを乞へとぞ答へつる。かくて幾許ならざるに返らぬ旅へと上りぬ。

哀みに極りなし、其より急なるは墓所の撰定なりとて。三人相連れ先人の親友にて此も風水の巨匠たる某許赴きて遺言の程を打明けて謹て教へを乞ひたり。某は暫し沈吟して、實にも汝等先人の奥の城所は彼も我も善く知れり。され共今我其の所を教へなば汝等は果して其處に葬るべきやと問へば。三人共聲を揃えて云ふにや及ぶべき。先人の遺言とあるものを争て従はであるべき。如何なる虎住む窟にてもあれ、蛟龍の潜む淵にてもあれ、我等三人心力を協せて志を果しなんと答ふ。某重ねてされ共若し其處に墓を定めなば、汝等三人中長兄は初處に(葬式の翌日命を預し、仲兄は卒哭(先人死後百日目に命を預し、季弟は小祥(先人死後一年目に命を預さん。斯くても猶必ず我言に従ふやと念を推すに。三人共餘りの事に打駭さしが、長兄更に反問する様我等

三人先人歿後一年ならざるに同じく命を失ふならば、其處に墓所を定むること何の福田とかなるべきと。此の時某翁莞爾として曰く。さすれば將來汝家より宰相三人を出さんと。之を聞きたる三人兄弟一層驚駭の念を深めながら、心密かに思ふ様、我等三人既に先人の歿後一年ならざるに皆命を失ふものとせば、我家より争て三人の宰相を出さん。畢竟翁がかゝる戯言を出して我等の誠心の程を試むるものなりとて。末弟まづ如何なる運命が我が身に落來るとも必ず貴翁の教へに従て墓所を定めむと誓ひ。仲兄長兄も異議なし。某翁乃ち詳細に其の場所を示教して、やがて盛大なる葬儀を以て無事棺をぞ下しける。

不思議なるかな某翁の豫言は神の如し。葬儀終りて一族集まり位牌の前に圓座して哀號くくと哭しつゝ、夜を明したる其の朝、今迄何ともなかりし長兄俄かに眩の一聲を此の世の暇乞としてあはれ坏土未だ築き了らざる先人の迹を追ひて昇天せり。一家の嘆聲ふるに物なし。老翁の婦は猶存命したれば我身こそ彼に代るべきにと打嘆さく、長兄の婦は又夢に夢見る心地して泣か

んにも涙の乾き果て、打臥すのみ。是に至りて二人兄弟は老翁の讖言ひしひしと思ひ當り、嘆き乍らも各我が運命を覺悟せる心の中こそ哀なれ。

かくてあるべきに非れば、又々新しき葬式を出して、打濕りたる家一層濕りて五月雨頃の空にも似たり。白き駒の寸隙を過ぐるより早き光陰は悲しき家をも別け隔てず。今日はもはや老父の死後百日目となれば親族打集ひて天地も動けと慟哭しつゝあるに、あはれ仲兄も俄かに何の病とも知らず、はや絆切れて、呼べども、動かせ共、靈魂既に幽冥界に離去りて蒼婆扁鵲も手も着くるに法なし。老母の哀彼の少婦の悲實に腸寸断の絶境なり。今迄我が母には何とも打明かさざりし季弟は、餘りの母等の哀を見兼ねて、乃ち敢へて相墓の砌りの一下りの話を物語りぬ。老母の驚きと悲哀は僅に其の命緒を取留め得たるばかり。兄弟三人の無謀の承諾を恨みて涙迸らして打怨す。されども既にかく定まりたる運命と聞きては今は悲むも詮なしとて野邊の送りを済し、新に所天を失ひたる三寡婦と九ヶ月後には同じく死ねべき一男子と哀愁の裏に月日を送り居たり。

百年の壽を希ふ人間には、五十六十の一生も味氣なき極みとて出家得道するもありとかや。これはそれとは事變り、僅か二百餘日を壽命として、日々夜々に死地に近く最愛の獨子を見る老母親と、其の獨り子なる季弟とが、集り成せるこの一家に、何の笑ひ何の慰みのあるべきぞ。一日季弟は熟々我が身世の凶險なるを感じ、我母の悲みをも思ひやり、寧ろ遠遊して何處の山にても川にても屍を曝して、死際を母なる人に見せまじと決心し。此の由母にも物語り。先人小祥の日こそ已れが命を隕す其日ならぬ。何處にて如何に死すとも心にな掛け給ひぞ。若し萬が一其日に死なてあらば我が命更に何年迄と限りあらざるべければ、急ぎ歸り來るべしとて。多額の旅費を腰にして、涙に暮るゝ母親を後にし、的を定めぬこの世の旅ならぬ死出の旅へと出立ちぬ。酒は憂の玉箒、歌舞の巷には苦勞はなきものと極りたる人生なれ共、彼の如き悲惨なる運命を負へる者にはそれも強ちさにはあらずめり。金のあるに任せて酒に親み山水に放浪し、今日あるを今日の命と覺悟して、もはや畧ぼ定めの日數も費したり。され共身體は益々健全にて死すべき身とも露思ひ

得ず。一日少し道を無理して山懐にて日を暮し、知らぬ土地とて一步も叶はず、今夜はこの山麓に野宿せんかと少し高きに上りて見渡せば、程遠からぬ山下に住む人ありと見ゆる灯の影窓に映りて明るきに、やれ安心と急き着きてほとくと門を叩けば、通れと答へて五十の上を少し越えたる親切らしき老嫗一人、寂然と温煖口に坐し外に人影なし。彼行暮れたる旅人なればとて一夜の宿を頼みしに、老嫗快く承諾して、夜食に酒など添へて甲斐なくしく待接し、實は妻は妻が娘明日婚姻すとて用事繁きに、君の來玉ひしこそ幸ひ、村迄下りて今夜はそこに泊すべければ、君は迷惑ながら留守居役をし玉はれ。誰も外にあらぬ一ツ家の、寢具は彼處に調ひたりとて、一切の支度を成し與へて、急ぎ足に出て行けり。

漸々夜になり行けば、旅の疲も出來て、やをら老嫗の寢房に上りて夜具引冠り眠らんとせるに。突然門を開け窓を開けて、蜜の如き甘き語にて、母よ抱かれ仕舞に今夜は一夜添寝し玉はれとて、手早く衣服を脱ぎ捨て、我が寢る蒲團に入來れるものあり。ほの暗き灯火にすかし見れば、こは如何に水も

滴らん許りの妙齡の美少女なる。既に断崖に手を撒して飛込まれたる今となりては、男も彼此問答する勇氣もなし。况んや美人の驚きをや。玉の如き腕香雪の如き膚一度若き男に見られては今更逃げむも逃げられず。況して夏の蟲ならねど、我から飛來りしものと。實に恥しき恐しさに身體の打顛ふ許りなり。され共幽かに相手の容貌を眺むれば、流石に都の富者の三男とて何處となく打上りたる風采瀟洒として、長の旅に面少しく黒みたれ共男らしさは猶優れり。男といふものは生れて以來我が父我が兄弟の外には面さへ知らず、其儘に知らぬ男に嫁して後生大事とかしづく朝鮮の婦人は、又始めて逢ふ美しき男に如何て嬉しき情の起らざらん。男も之と情は變らず、生れて此に廿年、未だ陰陽の情を解せず、不思議の運命に囚はれて、直きに死すべき身の上なれ共、まだ靈魂四大を去らぬからには、暖き血肉の我知らず美人の香に溶けんとするも理なり。誰からともなく此に儚なき假寢の夢は結はれて一夜を千代とぞ契りける。この美人と云ふはこの村の一兩班の愛娘にてこの家の老嫗の乳子なりけり。されば矢張母と呼びて始終添寝を習慣とせり。其

の内娘漸々長じ天成の美貌隠れなく、良縁ありて明日は愈々婚儀を擧げんと定まり、今夜を仕舞に乳母に抱かれて寝むとて來れるなり。男も身の上細々と打もの語り、世にも儂き運命を嘆きければ。女は既に我命を捧げし男の、かゝる憐れなる身の上とさしては一層情は熟して最早此人の外に男は持たじと堅く心に誓ひけり。男はしめくと物語りながら、指折り數ふれば、正に今夜ぞ先人小祥の日に當れる。今更ながら驚きつ、さては逢ふを終として此儘我は死ぬべきか、儂き運命やと熟々と嘆息し乍らも、やがて二人は一睡せるが、女は朝目覺むればこは如何に、男は既に四大冷を渡りてこの世の人にはあらざりき。

女はかねて覺悟したれば、惡ぶれず。嚴しき父に昨夜の始末を明しつ。父は己れ淫婦不孝の女、系圖正しき我家に拭ふべからざる汚點を與へし畜生女とて折檻烈しき云ふ許なし。されど娘は我身既に彼人に委しつれば二度と男は持つを許さず。今生の願には、かゝる因果と諦め玉ひて我身を彼人にやり給ひ、彼人の亡き骸を護して京城なる彼人の家に遺して寡婦として一生を送

らしめ玉へと涙ながらも決然と申出れば、父も殺すより外なき娘なれば殺すよりはと詮方なく許しつ。女の三人の兄に向て、誰かこの不孝の女を護して京城に送届けんかと尋ぬるに、長兄も仲兄も厭なり、厭に候ふ、兄弟にして兄弟にあらぬかゝる女のお伴はとて承引せず。季氏は流石に心優しく、さらば我護り行かんとして尸骸を先きに新寡婦を次に、日に歩き夜に宿りて京城へこそ旅立ちたれ。

母なる人は雨につけ風につけ、生残りたる櫛の實の一人の我子の事は忘るゝことなし。もはや日月も過ぎて先人小祥の日となりたれば、あはれ今夜は我子が死なん日なる。何處の果にて如何にしてか死なんと。降るは涙の雨、轉輾反側し一夜を泣明し。其より今日は訃告來るか、明日は訃告來るかと思れながらも待ち居るに、十日過ぎても終に訃告の來らねば。或は不思議に運命を免れて其儘に存らへて遠からず無事歸來る事かと空頼みして、毎日門に立ちて其らしきものゝ通るを打眺め居たり。幾日か過ぎたる一日、我門より一直線なる街道を輿物二個が靜々とこなたに向て進來れり。あの輿物は

何處に往くかと思守り居るに、漸々我家へ近き來て終に我家の大門にて卸したり。あはれ我子が無事に歸來りしかと飛出したるに、思ひも掛けず喪服を着けたる絶世の一美人涙痕未だ乾かず、輿物押開き現はれて深々と禮をなす。次いで美人の兄弟らしき若者馬より下りていと丁寧に禮をなす。母は仔細は分らねども内に導き對面して、さて一部始終を聞き取り、覺悟の上とは云へ胸迫りて腸寸斷。

され共貞節にして絶麗なる美人が婦と名のりて我を母と呼くるゝに少からず慰まれ。野邊の送りも鄭重に済まして、今度は老若四人の寡婦一ツ家に暮して亡夫の冥福を乞祈りける。

前世の契りや深かりけむ。一夜の情は實を成して少婦は其月より身重になりぬ。優曇華の花咲くにも似たる一家の喜び何と譬へん方もなし。母は固より二人の姉は心を籠めて介抱して、身重と知れたる其の夜より三人は必ず代るゝ、妊婦の添臥、母は我命を縮めても安産させ玉はれと神々に祈禱を懸く。十月は無事に過去りて、一夜祥雲屋を繞り此に産聲勇ましく一男兒生れぬ。

もはや産了れるかと思ふに暫して又一人の男兒、暫くして更に又一人の男兒、世に珍らしき男兒の三ツ子を産みたりける。愈々老相墓家の豫言思ひ當りて、急ぎ田舎なる少婦の家に告げやり、父も急ぎ上り來、靜に三兒を觀相すれば、實に堂々たる富貴の靈相活躍たり。是兒等果して尋常の者に非ず。女許りの此家にて養育せんは心元なし。我引取りて教育し天晴れ名士に仕立てんと。これより手元にて教養す。三兒共に鋭敏無比一を聞きて十を悟る。終に龍門に登りて高官を歴仕し、相踵いて宰相となれりと云ふ。

風水……墓所を相する術にして韓語にては之を地術と云ふ。蓋し支那より輸入せるものならん。筆苑雜記には後漢青烏子に始まるとあり。其の迷信の昌なるや、苟も地術家の撰定せし所なれば禁葬地以外なるときは何處に墓を築くも國法之を禁ぜず。道の中央にてもあれ他人の田畠の内にもあれ、誰も之を拒む能はず。京城附近及開城等の墳墓に就て之を檢するに、風水家が相定する善墓處には大抵一定の形式あるが如し。即ち總て山腹を稍平坦にして之を築き、必ず南面せしめ、最善の場所に



至りては水其山を挟みて前方に流れ、東南に會して更に東流する者あらざるべからず。東麓の水を主水、西水を客水と謂ふ。されば風水家は常に山水を跋渉してかゝる墓地を調査して其の帖籍に記入しよき。人の依頼に應じて之を教示するなり。先年服部博士の支那の風水説に關する記事を看たるに其形式の略相似たるを知り、必ず朝鮮の支那に原くを確かめ得たり。然れ共近來は漸次是の迷信極みつゝあるが如し。

古來朝鮮の男女間の道徳は女の貞操を責むること極酷にして男の貞操は問ふ所なし。されば女は一旦結髪して他人に約婚すれば、既に其の人の婦たりと烙印せられて、約婚者不幸夭折するも直ちに寡婦となり、終生堅き貞操を強いらる。若し之を汚す時は同時に我身を泥濘に投ずる者にして、娼婦となるか奴となる外なし。されば古へ兩班の家の女子の教育は嚴格を極め、頗る女徳を淬勵せしが如し。

夫官遊して故郷を離ぬる場合には、婦は夫の代りに家事を見及び姑舅に孝事するの義務ありて、夫と同行する能はず。されば當然の要求は諸方

に妓生なる妾の候補者を生ぜしめ男子の旅情を慰するとなれり。各監司府は勿論各郡邑にも亦官妓ありて、其の地の高官の自由に玩遊するに任すは勿論、來賓を待遇するに缺くべからざる具となれり。されば京官の有力者地方を巡遊する時は、到處に其地の名妓を自由に弄し、意氣相投ずる者に至ては別離の苦しさこと指又を斷離するより苦しく、戀々として之を馬背に抱き乗せ二日程三日程を旅行し、甚しきは終に活荷物として京城に携へ歸り終生の妾となし、女をして一躍玉輿に乘しむることあり。爲に京官の地方巡回の政務を荒廢せしめ及地方官吏を遊惰に流らしむる流弊少からず。されば李朝世宗の朝かと覺ゆ、州邑の娼妓を罷革せんの議起れり。時の名宰相許文敬公稠獨り之に反對して曰く。誰か是愚論をなす。男女は人の大欲にして禁ずべからざるものなり。州邑娼妓は皆公家の物之を取るも妨なし。若し之を嚴禁すれば年少奉使の朝士皆非議を以て私家の女を奪取りて英雄俊傑多く罪に陥らんとて議終に浸みたり。就中平壤は京城に次ぐの大府にして富力亦地方に冠たり。されば

此處に官遊する京紳は其の收入殊に多く、從て妓生に要求する所も高くして才貌双全を期す。是れ平壤の妓生を以て鳴りし所以なり。

巳時下棺午時發福

今は昔。これも貧しき老總角、新に老母に死なれ、葬らんにも錢はあらず、又風水先生に相墓を頼むの資もなし。思案に餘りてフラ／＼と家を出て一酒幕に眠り夢中寢語に頻りに我が身世の拙を歎し、三十まだ家を成す能はず、家を成さざるに母既に死し、母死して之を葬むるに處を知らずと嘆つ。室を隔て、一老翁是の寢言を聴き心大に憐みつ。彼覺めたる後汝昨夜かく／＼の嘆息をなしたり、其は誰が身上なりやと問ふに。彼頭を掻き乍ら、思案に餘りて眠りたれば睡夢中にも不思議せしものならんとて、我が不運を打明けたり。老翁は之を聴きてそはいと哀れなる話なり。我は風水先生なり。汝に發祥の墓所を教へんとて處を教示して曰く、汝彼處に亡母の墓所を定めなば、

巳時に棺を下して午時には必ず福祥を發せん。大地を打つ槌は外るとも、是言決して外れじ、夢疑ふこと勿れと戒めたり。

彼教へを受けて夢の覺めたるが如く、三拜九拜して恩を謝し。急に親族友人間を頼み廻はりて、漸々葬式の錢を集め、正巳の刻に無事に棺を下しける。やがて午の刻とならん頃、彼方より容色いと勝れたる一婦人、小腕に緞紗包を挟みて呼吸せき切りて顔色青さめ蒼黄とし走り來、彼に縋りて、後より我が敵追來れば何處へなりと隠し玉はれと頼む。彼此問ふ暇もなく、亡き母を容れ來れる棺輿の中に隠れさせけり。幾許もあらず一人の壯夫駿馬に跨り白刃を提げて面色蒼白大に激するが如く、彼に近きて今し此にしか々の婦人來らさりしかと尋ぬ。彼實に來れりしが彼方を指して一目散に走りぬと歎きぬ。壯士難有しと禮して、一鞭空に躍らせて驅け去りたり。影早や見えぬなりたる頃、婦人は輿中より出來りて謹んで再生の恩を謝して云ふ機、妾は元と彼男子の妻なり。同棲既に多年、彼性質殘忍酷薄正業に従事せず、日夜酒に浸り、醉來れば妾を打擲す。幾度か虎口を逃れんとせしかど又捕へられ、今度

こそは恩人の手に救はれたり。妾は今や三界に家亡きもの、願くば恩人妾を納れて婢妾となし玉へ、此處に携へ來れる包は皆實にして價無數、優に君の一生を樂送するに足れりと云ふ。彼此に端なく天授の洪福を得て一生を花の如き婦人と無憂愁裡に送斷せしとぞ。

得對句半死

今は昔、生物知りなる兩班ありけり。良媒を得て才貌雙絶の聞え高さ一淑女と約婚し、結納の式とも事無く濟みて愈々新郎豹皮の輿に乗じて新夫人の家へと乗込み、儀式の酒宴も果て、内房籠の一段となりしに、新夫人は背を向けて打解けむとせず。却りて曰く、貴郎この一句に對を聯ねたらば始めて我が夫として契りを結び申さむとて、薄墨の迹麗しく書出したるを見れば、白鷗飛々、波萬頃、砂十里とあり。新郎意想の外の難題にグツと詰りて急に對句など聯ぬべくもあらず。寶の山に入りながら手を空うして歸る口惜しさ

はあれども、動かぬ手引の岩轉がすべくもあらねば、猶一層専心に學問して美事に是句の對を探り得て其上にて再び君に面會せんとて、此に發奮して山寺に入りて勉學せり。

勉學漸々月日積りて研鑽の効空しからず。終に我乍ら巧みなる對句を案じ出せり。其の句に曰く、杜鵑啼々、月三更、花一枝、と。案出したる餘りの嬉しさに、あたりと不覺我と我が膝を敲き喜色面に溢れぬ。時に同じ山寺に彼と机を併べて勉學せる彼の外従兄弟ありけり。彼が驚喜堪へ難き様子を認めて其の仔細を尋ぬるに、彼は云ふも耻しければ何の彼とて打紛らせんとすれ共、いと執拗く問糾され、終に根負して其の譯を打明けたり。このものいと腹黒き惡漢にて、日頃世の噂にも彼の新夫人の容色絶美なるを聞き居たれば、不圖奸計を案出し、棍棒持て不意に彼を亂打して半死となしめ、床を剝いて此に蹴込み。其夜直ちに新夫人の門を叩いて、今夜こそ對句を案出したれば此の門開けよと呼びぬ。新夫人内房にて聽くに時分は更けたる夜にて我夫の來るには時刻も訝し、聲音さへも少し似ぬ節ありとて、まづ内より

さらば如何に聯ね玉へると問返すに、彼明々と杜鵑啼々、月三更、花一枝、と打吟じたり。之を聽得たる彼女は打案ずるに、是句の氣象頗る悲哀凄凉なり。杜鵑啼は是れ死別を怨むに非ずば生別を悲むが爲なり。月三更なれば夜既に運し、夜は陰なり、夜更くれば陰氣極まるなり。かゝる句を作る人は陰氣盛にして陽氣空し。生命のほど覺束なし。されども結尾花一枝とあり、花是陽氣の發する所、結末猶陽氣の存するあれば、未だ全く死せじ。恐らく半死の境に在らん。何れにもせよ今來れる男は我が夫の君にはあらずとて、下男に命じて裏門より廻らしめ正門に佇立して開くを待てる惡漢を捕へしむ。實にも我夫の君には非ざりけり。烈しく拷問して漸く實を得使を山寺に走らして夫の君を救ひ出しぬ。

(一) 良媒……朝鮮の結婚は男女互の見合ひ杯あるべき筈なし。さらば如何にして出雲の神の架橋を得るかと云へば、多くは媒婆なる口入屋の力に倚るなり。この婆は常に良家の内房に出入して其の子女を熟知し、何處には年頃の女あり、貌是の如く才藝是の如しと一々記臆し、折に觸れ

機に臨みて語り出し。さらばその女我子の嫁に欲しく、其の男に我娘をやりたしと、大抵門閥似合ひの家柄にて委細を媒婆に打明ければ、婆は之を引受けて此に兩方よろしく交渉の任に當り、多少の上手も交へつゝ、兎に角圓く結ぶを手柄となす。されば媒婆の媒酌は屢々痘痕を笑渦に云ひ做すことあり。上流社界にては却て之を賤しみ、多くは春林に梅花あればその香自然に現はるゝが如く、内外の制如何に嚴重なりとも、自然に何處の誰は才藻かくく容貌かくくと云ふ評判の世に洩るれば、之を本に子女の兩親直接に先方の子女に逢ひ、氣に叶へば更に其の兩親に交渉して此に約婚するを常法とす。この國の風習結婚ありて離婚なし。されば婦如何に逆待せらるゝとも再親家に太歸するの法なく。泣きて泣きて自盡するとも掻はることなし。されば婦家の氣兼も大方ならず。婚後も常に衣類を貢ぎ物を送り汲々として夫家の哀を買はんことを之れ努む。憐むべきは朝鮮婦人の位置なり。今や漸次新空氣の朝鮮の家庭にも吹入りつゝあれば。久しからずして舊慣に對する破壊の機運至りて家庭

の革命起らんか。

(二) 山寺……朝鮮の早婚の弊あるは前に既に述べたり。衛生思想の發達せざる未開社會の年少者が親が許して結婚したるなれば、勢ひ濫に流れて學業を荒廢するは免れざる所なり。之を防ぐの手段にとてか、この國には古來兩班の子弟は結婚するや否や山寺に往いて獨居生活を始め、松風に耳を洗ひ溪水に嗽ぎ、性慾を一時忘却し一意専心學業に勉勵するの風習あり。長きは數年短きも暮年。學業畧成り科擧に應ずるを得べしと思はるゝ時に至て、出山して此に始めて家庭の人となる。され共山寺に亦稚童あり龍陽の道頗る昌なりとかや。

解語龜

今は昔、父には既に死別れたる二人兄弟ありけり。兄者人は性質いとく  
慾張りて、父の遺産は盡く獨り占領して弟には米糠一合も與へんとはせず。

加之に母を始め弟妹迄遺族は總べて弟に推し付け、心合へる妻と水入らずの勝手なる暮しをなして、我弟は馬鹿だと自慢し居たり。されば弟の貧窮なることは云ふ許あらず。晝は終日落葉掻、夜はすがらに索を縛ひ、身を碎きて稼ぐとすれど、中々に貧に追はれて年中腹ふくるゝことも稀なりけり。されとも流石に心優しくて我は食はねど母には食はせ、弟妹には與へてこれも拙き我が運命なりと諒めて、少しも兄をば恨まんとせず。

一日秋閑にして落葉頻なる頃、古熊手搔込みて山道踏分け落葉を搔くに。偶然櫓の實一つ落ち來れり。溢くはあれど食へば食ふべしと拾ひ取り。こは我が母にと獨言すれば不思議や、櫓の木の根にいと小さやかなる龜跡あり居て、同じくこは我が母にと口擬す。一つ拾へば又一つ落ち來。こは我が姉にと拾ひ上げば、龜も同じくこは我姉にとものいふ。又一つ落來。こは我弟にと拾へば、龜も同じく我弟にと擬す。又一つ。これは我が妹にと拾ふ。又一つ。こは我が妻にと。又一つ。我が兒にと。又一つ。こは我食はんと云ひて拾ひ上げば。其都度龜も同じくまねてものいふ。都合七つの櫓の實を拾ひて袖に

收め。かの龜もいとちもしろき奴なり、持往きて人にも見せんと懐にして山路を下りて里に出て、聲高にもいふ龜を見まさずや、もの云ふ龜を見まさずやと呼はる。大勢の里人世にもあかしきこと云ふ哉と集ひ來れば、彼やがて龜を取出して、こは我が母にと云へば、龜も矢張口開けてこは我が母にともの擬す。こは我が妹にと云へば、龜も同じく我が妹にといふ。鸚鵡のものまねすると露異る所あらず。珍らしきもの好むは朝鮮人の特色、時間(二)を關はず遊ぶもこの國の民性なれば。何かある、何かあると打群れ來て、皆あな珍らしく、ちもしろきものを見る日かな。某も貧乏人なり、この料に少しなりとも錢出さばやとて、誰始むともなく錢を投出し、やがて少からぬ(三)をなし。今日は吉日ぞとて龜を大事に抱きつゝ、我が家へこそ歸りたれ。

これより、折々は人の請ふ儘に龜にも云はせて見せ物にし、少しは米鹽の資にも貯せすなりにけり。こを聞きたる意地悪き兄者人、一日弟に、其許はこの比中々工面よしときく、何の徳付きて急にしかく富みたるかと問へば。弟は正直に、ものいふ龜を拾ひ得たりと出して見すれば、さらば其の龜我に

貸せ、我も少しく徳付かむと。龜を借りて、里の中をものいふ龜見ませ、ものいふ龜見ませと呼ひ歩けば。誰彼、この頃久しく聞かざりき。呼止めていざ聞かむとするに。こはいかに、兄が如何許り高き聲にてこは母にこは弟にと鳴立れ共龜は更に聞えぬ風して、首を引籠めて眠れる如し。集來れる人々、この嘘付奴も蔭て飛んだ時をば潰したり。え、強腹なとて、手を舉げて撲り、足を舉げて蹴り、唾を吐懸けなどし。彼は這ふ／＼の態にて逃げ歸りぬ。

我が強慾は棚に上げ、憎き龜めと石にて打ち碎きたり。弟は兄が一向大事の龜を返さねば、如何にしつると取りに來るに。兄の怒猶烈しくて手も着けられず、泣く／＼龜の亡骸拾ひ集めて、庭の隅に埋めて龜塚とし、朝夕花水を手向くるに、不圖塚の真ん中より一莖の木生ひ出て、烈しき勢にて日に日に生長し。延びに延びて際限なく、終に其の頂雲霄に入りたるに、恰も天國の國庫の地盤を突抜きたりと見え、日々夜々幹を傳ひて降り來る金貨銀貨の小止なく、庭に盈ち、家に盈ち、庫を建つれば庫に盈ち、泉の水と同じく掛めとも盡さず、使へども減せず。忽ち國內第一の大長者とこそはなりにけれ。

ねぢけし兄は弟の日夜の繁昌に大かたならず心悶えて、一日弟の庭の實の木  
の太やかなる一枝貰ひ来て我が庭に挿したり。この枝旨く根着きて、見る見  
る内に天空を摩す。してやつたり、あすあたりより實の雨や降り來ん。妻も  
來れ、子供も來よと。三日三晩睡りもやらす打ち守るに。この木も天國にこ  
そは達したれども。天國の共同便所の溜桶へと突抜けたりと覺しく。色こそ  
黄けれ。降りに降るは黄糞の雨、黄糞の雪。庭を埋め、家を埋め、尺寸の坐  
所たになし。家族泣くはうくの態にて弟の家に逃行けば、弟は優しく  
も之を憐みて、新に家を造り與へて住はせたりとぞ。

(一)時間構はぬ韓人……西洋人は東洋人の時間の觀念に乏しく、呑氣な  
るには常に喫驚するとかや。東洋中の文明國と信ずる我々日本人も是の  
點に於ては確に紅毛種に一籌を輸せざるべからず。況して東洋の古風を  
二千年に亘りて維持したるこの國の人民は、親の死目を控えても酒杯は  
手より捨てんとはせず。緩々として生活し、悠々として日を送る。長烟  
管の長く、顔の長さと、氣の長きとは正に相比例せり。されば都鄙を問

はず、苟も新奇なる見物ある時は、往來の人々は勿論、耕作したる農夫、  
賣買したる商人乃至仕事中の工人、主用を持てる奴僕迄、雲合霧集して  
是上なき興味を以て見物し、快然として日の暮るゝを愛惜す。氣の長き  
こと長橋の長さより長く、新奇を好むこと蒼蠅の飯粒に群るより盛なり。  
これや日曆なき人民達とこそ云ふべけれ。

### 鬼失金銀棒

今は昔、ある山里にいと貧しけれども正直なる爺ありけり。或る日山に薪  
採りに往きて、樫の實一つ落來れるを、こは我母にと獨言して拾ひ取り。又  
一つ落來れるを我弟にとて拾ひ。又一つ落ちたるをば、我妻にとて拾ひ。又  
一つ落ち來れるをば我子に、又一つ落ち來れるをば、これは我にとて拾ひ上  
げ。折柄既に日は西山に没したれば、薪屑にし家路に向へるに、道にして日  
は全く暮れたり。野宿やせんかと困じ居たりしに、不圖道傍に傾きかけし大

なる門ある家を見付け、これ幸ひと内に入り見るに、荒草庭裡に盈ちて、虫の音高く、住む人絶えて既に久し。家に上りたるに、奥まりたる所に更に一層の樓あり。こゝぞよからんとて樓に上りて寝ねんとす。

夜露漸く冷かならんとする頃より、下の廣間俄かに騒々しく。耳を傾くればこのわたりの鬼共夥多集まりて、重き棒もておのがしと床を打撲きて、金出よ銀出よと聲高くのしりわめくなりけり。餘りの騒々しさに爺は眠るべくもあらず。殊に又かゝる境にて鬼共と一つ家に在ればいつ何事の起らんも知れずと恐ろしさ妻さいふ許りなし。覺えずいつか膝頭ひ出す。爺一計を案して、先きに拾ひ取りし櫛の實一つ取出して、力を極めて嚼み潰したるに、靜かなる夜にカチンと聲高く響き渡れり。鬼共驚き騒ぎ、あゝ古びたるこの高樓の崩れおつるなめりとて、我先きにと逃げ行けり。爺してやつたりと静々と下り來見れば、暗にも知るき銀棒金棒いと數多取り残されたり。爺は仕合せよしと皆拾ひとりて、薪の代りに之を負ひ。今日は木こりにあらで銀こり金こりなりと喜びつゝ、市にひさぎて巨額の富を得たりけり。隣家の慾張

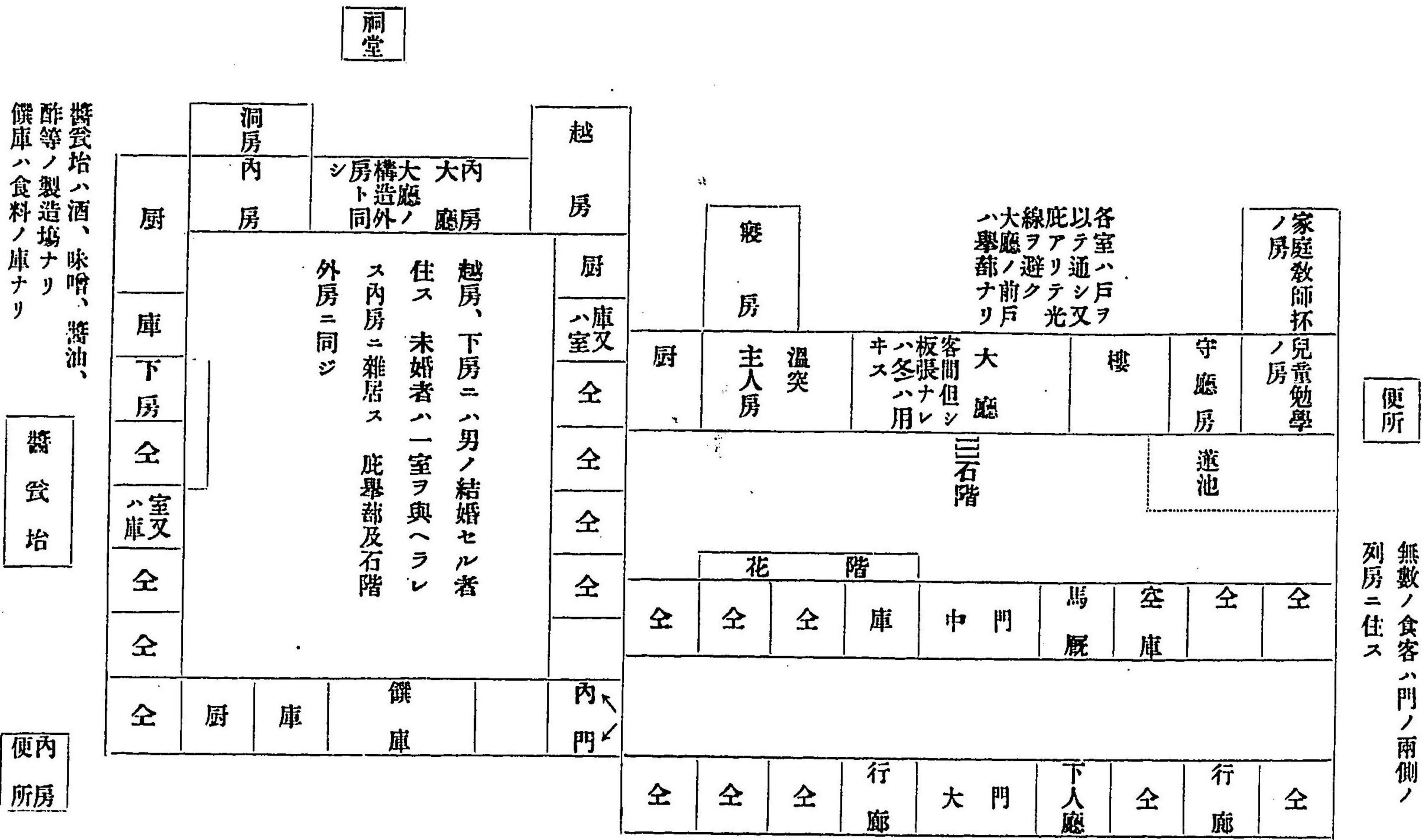
り爺之を聽きて、おのれも儲けしてやらんと、矢張其の山に往きて彼の櫛の木の下にて櫛の實今や落ち來ると待ち居たりしに、果して一つ落ちたり。手早く拾ひて之は我にと獨言す。次に又一つ落ちたるをば、これは我子にと拾ひ。又一つ落ちたるをば、これは我が妻にと拾ひ。又一つ落ちたるをば、これは我弟にと拾ひ。又一つ落ち來れるをば、これは母にと拾ひとり。態と日を暮して徐々歩み、日影は猶少し早けれど彼の荒屋の高樓に上りて、鬼共今やと待ち居たり。果して夜半にも及びたらん頃、例の鬼共重き棒にて床を打撲きて騒々しく金よ銀よとのしりわめく。時分はよしとことに大けき櫛の實をカチンと許りかみ潰せり。鬼共さゝつけ逃げると思ひしに、其の中の一個があゝ怪し、今夜も先夜の怪しきこゑすなりといふに。他の一つが人臭し人臭し、必定人間あると見えたり。又々我等を欺きて金棒銀棒を奪ひ去らんとする奸計なるらし。此度は捕へやらんと家中隈なく探し廻り、高樓にうろつく爺を引捉らへ、金棒銀棒にて處嫌はず打据ゑたれば、骨もひしけむ痛さになと哀號するのみなり。其の内に夜明近くなりぬれば、鬼共も二度と來るな



しれものよと罵りつゝ、かき消えたり。爺やうく命許りは死なてありて、  
痛き腰延して立上れば、いかにひどく打たれたりけむ、身丈延びに延びてせ  
いの高さ昨日の倍にも餘り、門低くして容易く出づべからず。やうく人里  
近く來れるに、見まじとすれど人の家々周囲の牆を見越して内房（うちむろ）の様迄手に  
取る如く見下さるれば。家々の主人共あら憎し、何處の背高盜賊や人の家の  
牆を見越すや、目にも見せんと。名々棍棒持來りていやといふ程打ちたり  
けり。二度の痛手に息もたえくになりつゝも情なき事情共打明して、やう  
く許して貰ひたりとぞ。

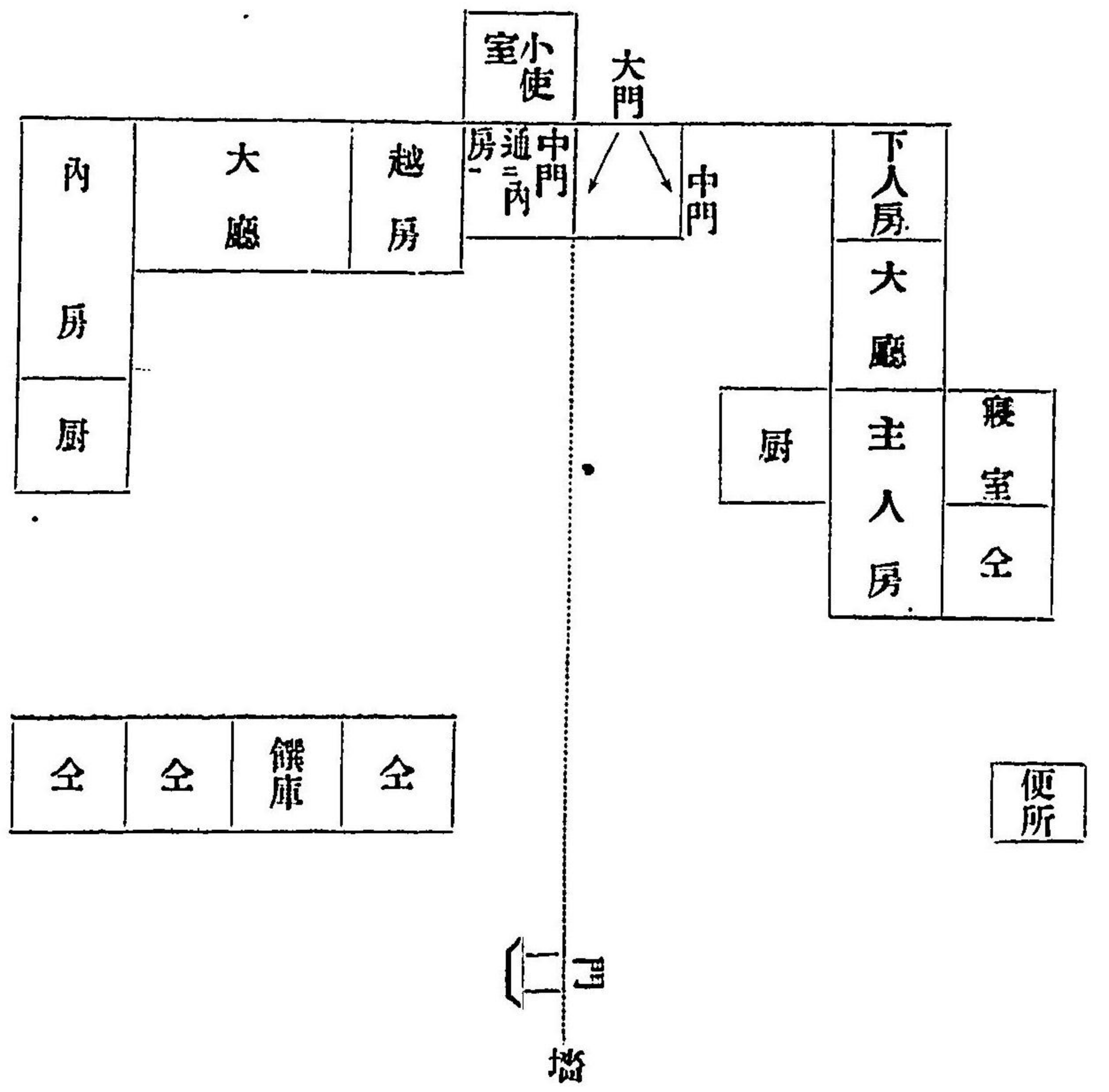
(一) 内房……男女の區別嚴重なる朝鮮にては、極端に表面には男の女を  
犯すに近き行ひをば禁ぜり。例へば便所の如きも内房専用の便所と男房  
専用のもとのありて、物心なき小供の外は男は決して内房の便所に入る  
べからず。若し故意又は過失にて入りたらんには實に廉恥を沒せる行爲  
にして、社會の秩序を紊亂せるなり。されば、男子は内房全體をば不可  
窺の世界と定めて、忘れても見むとはすべきものにあらず。又男房と内

(一) 上流韓屋ノ圖 但シ五分ヲ七尺トス即五分四方ハ七尺四方所謂一間ナリ

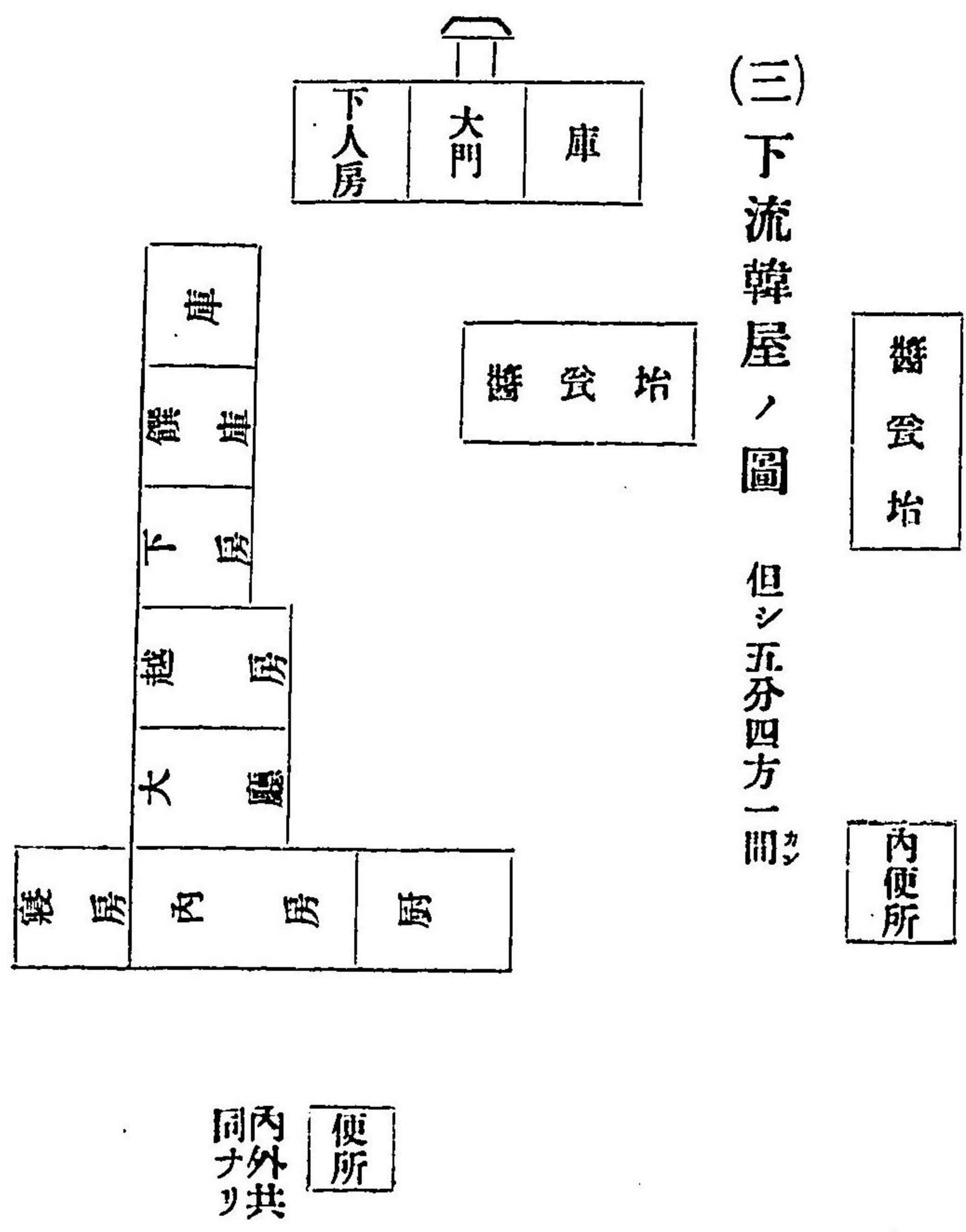


便所 無數ノ食客ハ門ノ兩側ノ列房ニ住ス

(二) 中流韓屋ノ圖 五分四方ヲ一間トス



(三) 下流韓屋ノ圖 但シ五分四方一間



房との間には土牆ありて隔て、中々容易く窺ふべからず。されば屋根に上り木に攀ぢ、若くは高所に登り坏して、他家の内房を見下す者ある時は、之を盜賊となすとも國法之を許可し、盜の證據の有無に關せず之處罰せり。然るに日本人の無遠慮なる、好むて内房の様子を窺はんとする輩あり。韓人は之を怒れ共同國人の如く明ら様に打することもえならず。憤激して倭奴禮儀を知らずと慨す。是は日本人の方曲にして、かゝる小事の爲に日韓人の融和を害すること多きは嘆すべし。

### 廢名人

今は昔、都なる一兩班の家庭教師に下第の生學者ありけり。日夜一室蕭然として形影相吊する寂しき境遇なるから、不圖兩班の下婢の一人のいとみ目好きに思ひ付。先生の身をも打忘れ、時折はそれとなく誘ふ水の誘ひ見れども、先方は水草の往なんとはせず。殊更隔てある様に打振舞ひて、膳を運ぶ

にも無言の儘にて窓を開け、無言の儘にて膳を据ゑ、笑み一ツ洩さず立返るに、先生頗る技癢の感に堪へず。女に迄も運拙きかと流石に打ちつけに袖曳く譯にも行かて月日経にけり。或時弟子なる兩班の子息、何か不屈の事ありて先生懲し目に太き鞭もて撲たまくせるに、彼子息天性陳平の才あり。振擧げたる鞭の下にてやよ待ち玉へ師の君、師の君此度一度撲つことを容赦し給はば、弟子彼の下婢を先生に取持ち申さん。隠し玉ふな師の君、思ひ内に在れば色に現はるものと云はれ。先生俄に鞭も落つる許りに恥ぢたれ共、さらば汝は如何なる手段にて彼のもの堅き女をば靡かせんとするかと問ふに。弟子今日密かに我が父の膳の上なる銀匙をば某處に埋め申さん、されば彼女必ず慌て、探し廻りて得ざるべし。其の時先生をば占筮の名人と告げて、彼女をして先生に銀匙のありかを問しむべし。これより上は師の君の心の儘と云ひて、巧に鞭を免れ行きぬ。

やがて夕飯の膳の支度をする時分、彼女は俄かに主人老兩班の銀匙を見失ひ、何處を探せどかいくれ見えず。あはれ殿しき我が主人は如何なる罰をか

與ふべきと、身も世もあらず慌て出し。此方にウロウロ、彼方にウロウロ、半狂亂の姿なり。悠然と入來る彼の子息、莞爾として、汝何故にしかく慌て居るかと尋ねやり。ウン汝知らざるか。彼の離れに座す我が師の君は、國中に聞えし占筮の名人なるぞや。急ぎ誠を打明けて頼めよと教へやれば、國中腹は代られず。今日は愛嬌タップリ、如何て先生の神筮にて銀匙のありかを見定め下されと泣かん許りに頼めば、先生縷々と烟を吹き、緩々と長髯を撫し、易しとも易き願事なり。され共人の願ひを聽きてこそ我が願事も人は聴けとて、引寄せたり。

銀匙も芽出度下婢の手に戻り、先生も日頃の思ひを達し、弟子も先生に恩を賣り、四方八方圓滿に治りたるに、其より口軽き下婢の口より先生の神筮の名世間に喧傳し始め、聞えくして終に中原支那の都に迄達したり。

時に中原の大皇帝には、何者にか玉璽を盗まれ玉ひて、國內の神易者といふ限を集めて筮せしめたれ共終に見現はされず。困屯する内、測らずも、屬邦朝鮮に神易の名人ありといふ事天聽に達し。其者召せと上意ありて、星使

を飛ばして厚く先生を聘す。朝鮮國王も實に國の譽れと喜びて、獎勵の御<sub>二</sub>教<sub>一</sub>共ありて儀式堂々と中原に旅立つ。先生は虛名の喧傳のかく迄なりぬと知りては空恐しけれ共。我が如き微運者、假令三十日四十日の間なりとも、かゝる得意の境遇に居ることこそ夢の様なる満足なれと、少しも憂を色に現はさず、參謀官には彼の伶俐虫兩班の子息を伴ひて、程なく帝京に着きにけり。

やがて謁見となりて、果して汝に見現はされんやと敎言あれば。不肖なれ共、向ふ一ヶ月の時日を賜はらば、誓ひて玉璽を見出し申すべしと誓ひて、麗しき龍顔を拜して客舎に引下り、日夜の厚遇を受けながら恬としてはや二十九日をぞ過しける。流石に先生も弟子も氣が氣に非ず。今度こそは年貢の納め時と覺悟したりけり。頃しも冬天寒風峭稜、窓障子の合せ目より洩れ來る風は、風紙(支那朝鮮の特有なる風を防がん爲に窓の障子の合せ目に切り殘したる紙の端)を振うてピウ／＼と異様の音をぞ出しける。靜に布團の上に坐したる先生は、明日は期限といふ今日になりても考へるにも考へ様なく、茫然とこの風紙を眺めつゝありしが、我知らず風紙(風紙)と二聲呟きたり。聲終

らぬに窓を排して入來れる一漢子、轉ける如く室内に入來り、平身低頭して先生何卒許し玉へと伏し拜みていふ様。某こそは「フウシ」と申し玉璽の盜人に候へ先つ頃より日夜此窓外に立盡して、先生の動靜を伺ひつるに。今日は既に先生に見現はされて「フウシ」「フウシ」と宣ふを聞けり。實に神筮の妙力潛伏しまつりぬ。あはれ一生の願に命許りは助け玉はれと。先生は夢に首を斬られて覺めて首あるに驚喜するが如く喜びたれども、そこは韓人一流の泰然たる面持して、神妙なり汝「フウシ」、明日は大皇帝に言上せんところを思ひ定つれ。されど汝が切なる嘆願にめて、隠し處をさへ申さば賊名言上は赦しくれむといふ。「フウシ」三拜九拜し、玉璽は正しく御園の池に投げ入れたりと白狀すれば、よし／＼さらば汝は今日只今身を躲せよとて遠國へ逃しやり、早く明日になれとぞ待ちにける。

愈期限盡きたる翌日、意氣揚々と參内し、玉璽は正しく安全に御苑の池の底に在りと占ひたり、急ぎ水をかへさせて取出し給ふべしと奏上し。大國の威勢立所に水をかへ乾せしに、果して玉璽見付かりたれば、實に御威斜なら

ず、卿は我大國の寶なりとて、官位を加へ厚贈をなし、暇を給ひて歸らしめ玉ふ。出立の日參謀官伶俐虫は歎きて先生の舌を出さしめ、手早く其の尖きを銜み切りたり。されば爾今先生物いふこと能はず。歸る途中を擁して色々占ひを頼まんと心組せる數々の人々も仕様事なしに思ひ止まり、歸國の上も誰一人又占筮を頼む人もなく、所謂淵默は吉祥の集る所、先生一生富貴に終れりとぞ。

(一) 家庭教師……兩班の子弟は家庭教師を別に聘して學問するを習ひとす。この先生は多く下弟の秀才にして、復た科擧に應ずるの勇氣もなく勢力ある兩班に寄食して其の子弟に教授し、長年の間に自然に主人の眷顧をも博し。終には冷官一窠にてもあり付かんと巧む位が關の山なり。されば主人の兩班に向ひては勿論單に御相手たるに過ぎざる低き身分なれ共、我が弟子たる子弟に對して流石に長幼の序師弟の禮嚴しきこの國とて、中々權力あり。鞭を揮て打するも何の咎なく、却りて打す位の先生にてこそ善く教授すると思はるゝ位なり。

(二) 教……朝鮮は新羅以來常に支那の屬國なりき。されば國王の言も決して勅とか詔とか云はず、教と云ふ耳。詔勅といふは日清戰爭以後の事なり。

(三) 明の朝鮮を御するは明としては實に巧妙を極めたり。明は既に四百餘州を領土とすれば、別に又衣服の褌襜の如き小なるこの國をも領土として、其の内政の糸毫の末迄干涉するの必要なし。其の要する所は單に臣服のみ、屬國としての禮儀のみ。是は即ち大明皇帝の威嚴を増す所以の者となればなり。されば朝鮮が臣禮を盡すに對しては嚴重なる要求をなし、苟も不恭なる所あれば逆隣天譴赫として降り毫も假借する所なし。之を史に觀るに、朝鮮よりの年一回の朝貢使朝鮮方にて所謂冬至使齋す所の奏文は、この國學者文章家の最も苦心し焦慮する處にして、一字一句苟もせず。少しく禮を失し、少しく妥穩を缺く文字あれば、輒ち或は却下されて訂正せしめられ、或甚しきは是の罪を以て刑科を負ふことあり。李朝の太祖の上れる明高皇帝二十九年賀正の表牘は、清城君鄭摺撰

表し、光山君金若恒撰箋し、西原君鄭徳、吉昌君權近之を潤色せり。然るに高皇帝其の表箋の語大國を戲侮するに涉れりとして、金若恒、鄭徳、權近を召上せて詰責し。權近獨り宥されて還るを得たりしも、金若恒と鄭徳とは逆鱗解くに由なく俱に遠謫され、終に講地に没せり。又高麗朝の崔甫淳の撰べる金帝の登極を賀する表も、亦少しく不諱の文字ありきとて譴を得たり。是の二例は亦如何に支那が大國の威嚴を勵行して、雷霆の威能くこの國を懼伏せしめしかを知るに足り。又之に甘服したるこの國の國民性も亦識者の着眼を惹くに足るべし。

### 興夫傳

今は昔、心素直なる弟と、慾心のみ深き兄とありけり。弟を興夫といひ、兄をノル夫と云ふ。父親死してありとある其の遺産は盡く兄一人にて横領し、弟は草葺の家にさへ住むこと叶はず、黍の稈を壁にし、黍の葉もて葺きたる

堀立小屋に起臥し。貧乏人の子澤山とて、犬か猫などの様に年々に生れ出れば、唯さへ狭き小屋に溢れて、折々は主人の脚も家に餘りて壁を貫き、往來迄はみ出て、道往く人はやれ興夫、脚を引込ませ、應と答へて引入ることもありき。餘りの苦しさは一日錢持てる罪人の代りに笞を受けんと引受け、其夜は妻と、明日は必ず幾許の錢取れん、其を以て久々にて子供等に米の粥を啜らせんと話して樂みぬ。しかるに其の翌日俄に其罪人無罪放免となり、これも奮ける餅の空しくなれり。或時は粉米些かを兄の許に貰ひに往けば、兄は慳貪に、我が下人に食はすべき粉米をいかで汝に與へられんといふ。さらば酒の糠なりと、と云へば、我が豚にやるべき酒の粕を汝に與へらるるものかはと毒突くのみ。

或年の春なり。一羽の燕何思ひてかえりに撰りて、かゝる貧家に飛去り飛來りて離れむとせず。終に怪しき軒に巢を構へんとす。彼はかゝる子供澤山の我家に何の燕の巢やとて、頻りに逐ひ出さんとすれ共、又しても飛入りて、はや其の内に巢も大方出来上らんとす。仕方なしとて打捨ておけるに、主人

に似てか、この燕も大變の子福者にて、巢にも溢れひ許りなり。或時其中の一羽の雛、巢より零れ落ちて脚を折り、立ちもえやらてちよくと啼き居たるを憐みて、薬を脚に塗り糸にて巻き、懇ろに介抱して又巢に戻しやりぬ。

秋もはや遠近山に立ち初めて、冷風吹き初めし頃、燕は恙なく育ち上りし數多の子供率ゐて江南の國へと歸り去りぬ。燕は江南の國に歸れる時は、必ず其の國王に見参して、北の國にてありし色々之事共を報告するを授とすれば。かの貧家の燕も見参の禮を濟して、さてことしはいともく情深き主人の家に巢を作りて、殆んど失ひたる雛をば無事に育て、來たりたりと委しく奏上するに。國王も其はいと殊勝なる人間かな。來年は報謝の禮物を持ち行くべしと詔あり。翌春蜚々たる燕打群れて、舊の古巢を求めて渡り來れるに。彼の貧家の燕は瓢箪の種子一順啄み來りて、謝するが如く興夫の眼前におきて去れり。主人はこは珍らしきかな、燕の贈物とは未だ聞かざることなりとて、庭の隅に植えたるに、よく成長して大瓢四個實りたり。珍らしき大きな瓢かな、中實は子供に食はせ我も食ひ、瓢は乾かして市に鬻かんとて秋一

日振りて割きたるに。第一のよりは仙童と覺しき靈相清らなる一人の童子出來て、恭しく五個の瓶を興へたり。一の瓶には仙家の重寶死人を甦らす靈藥入り。第二の瓶には盲目を癒やす藥入り。第三の瓶には啞聲を治す神藥入り。第四の瓶には不老草なる妙草入り。第五の瓶よりは不死の神藥出てたり。第二の瓢を割くに、大木巨材石材其他丹碧彫刻の建築材山の如く堆く出て。第三瓢よりは大工十數人勇ましき姿にて現はれ出て、誰令するともなくいと勤勉に件の材料以て建築を始め出し、はや見るが内に突兀たる大厦礎の上に立たんとす。同じ瓢の中より更に又穀類湧き出ること泉の如く、絹綾金銀數を盡して現はれ出てたり。されば彼夫婦は夢にあらずやと喜びつゝ更に第四の瓢を割かんとす。此の時妻は暫しと止め、既に此にて我等の入用は皆足れるに非ずや。一つは殘して又他日にこそ割き見ましといふに、彼は聽かて是非とて割きたるに。中より唐繪の様なる美人楚々として現はれ出て、けふよりは君の婢妾と耻し氣に額付きけり。流石に妻は面白からず、止めさるることか止めしものを、無理に割いてこの様なる入らざるものを出したりとてい



と夫を怨したり。

亞刺比亞の夜話にあるアラデンの宮殿ならねども、我が弟が住居のあたり、一夜の中に突兀と雲に聳ゆる大厦現はれたれば、何人の住家にかと怪みて走り來れば、昨日に變る貧弟の榮華、實に見ぬ世の陶朱猗頓も之には過ぎじと思はるれば。吃驚仰天肝膽皆潰えて、恐る／＼弟に向ひ事の由を尋ね、こは善き事を聽出したなり。我もせばやと俄に軒に住よげなる燕の巢を作り、長き竿に木の葉を結付け、そこらを過る燕共を無理に我が家へ逐込まんとするに、燕は皆弟の家に逃込みて一羽として入りて巢を構えんとせず。猶屈せず頻りに逐込めば、一眼めくらの一羽終に逐込まれてドゥヤラ巢の中へと入りにけり。いと／＼懶惰なる燕なりけむ。其の儘こゝを住居として妻なる燕をも呼來りて、はや三ツ四ツの雛さへ産み落したり。兄者人は思ふ通りと喜びて、雛燕の今日や落つる、明日や落ち來と待てども、元來雛の數共少ければ絶えて落ち來らず。待ち疲れて一日梯子に攀ぢて中なる雛を一羽攫み出し、床の上へと投げ落したり。憐れ雛は血の出る許脚を打ちて折りくぢき、悲鳴を舉

げて親を呼ぶ。彼急ぎ之を取上げて藥を塗りて糸を纏ひやり水や米粒を啣ませてやう／＼治しやり、又々巢へと返しやりぬ。

やがて冷秋九月、燕共江南の國へと立歸りて其の國王に見參せる時。彼の家に巢ひし燕は一部始終を奏上したれば、國王も逆鱗ましく／＼て、己れ無情の人間奴いてて復讐せてあるべきと、翌年春にこれも瓢の實一顆與へてやりぬ。ノル夫は瓢の種を拾ひ上げ、おれも長者になりたりと近處近隣に迄吹聴して、頻りに瓢の蔓の生長を樂みしに、はや十一個の大きやかなる瓢篋ブラ／＼と生り出てぬ。弟より七個多し、一層仕合多からんと熟すを待ち遠に賃金出して百姓を備ひ、梯子を架け振らせ、先づ一つザクリと割けば、こは如何に伽耶琴を弾く奴出來て、頼みもせぬに騒々しく琴弾き聽かせて果ては多額の賃銀を強請して去れり。第二の瓢を割くに僧出來て、怪しき經共打誦してこの悪人ノル夫に災禍を下し玉へと佛に祈禱し、果ては又祈禱料を強奪して去れり。第三の瓢よりは喪服を着けし者出來、我が主人逝かれたれ共葬るに錢なし、是非にとて多額の葬資を強奪して去れり。第四の瓢よりは巫女

の一隊ゾロ／＼と現はれ出て、驚く彼を取圍みて怪しき經を讀み始め、八百萬の神々の御名を呼びてこの悪性男に禍を降し玉へと祈禱す、驚き逃げむとする彼を引捕へ、人に祈禱さして只逃げるとは何事かとて、多額の祈禱料を強奪して去れり。第五の瓢よりは瑤池鏡なる覗き鏡現はれ來り、ノル夫が何かと覗き見たるに、不法の覗料を食り去り。この次こそは金あらん米あらんと、更に第六の瓢を割きたるに、思ひも寄らぬ大男ニヨツと許りに現れ出て、小鳥を攫むが如く彼を引捕へ、あのれ我が臂の癢さを踏めとて寝そべりて彼に臂を踏ますに、臂の堅きこと石の如し。如何に力を入れて踏めばとてこたへることか叱り付けられ、力無し意氣地無しもつと一生懸命に踏みやれと思圖くすれば殴らん景色、血の汗出して踏むほどに力盡きて目眩み倒落つれば。あのれやれもうやめるか、然らばあやまり金を出せとて多額の金をとりに去りぬ。かくて十迄割くに従ひ總て皆悪魔外道のもの許り現出し、死なん許りに苛め抜かれ猶怨心は已まず。最後の十一番目の一個残れるをこれこそは福の瓢と刀を入れて恐わ／＼ながら少し割けば、少しく黄金色見えたりさ

てこそ黄金ありとザクリと割れば、山吹色の養の泉養の川流れ出て／＼止まんとせず。果ては屋敷を浸し我屋も浮かめば、家財道具も打棄て、一家五口命から／＼弟の家へと逃げ入りぬ。流石に弟は憐みて新に家を建てやり、生涯樂に暮させたりとぞ。

### 淫僧食生豆四升

今は昔、残りの色香失せやらぬ一寡婦ありけり。されど守操の念いと強くして浮きたる心露ほどもなく、この儘我は谷間の朽木と行ひすましてぞゐたりける。彼女の甥なる少年一人ありしが、村の寺に通ひて其和尚に師事し、四書や五經の素讀を學び、親達は何れ後には科擧にも應ぜしめんの心組なり。師なる坊は峯に分れし白雲の、浮世の諸相を覺りすまして、葷酒さへも遠けりあるべき出家の身ながら、まだ煩惱の繫縛を絶ちやらず、好心中々に強かりけり。されど主ある女未婚の處女に云ひ寄るべくもあらざれば、誰かよき

相手もやと永き年月心懸けたるに、丁度よし、弟子の一人の彼の少年の伯母、先きの年夫に後れて寂しく暮すと聞きければ。或日彼少年をば少し用あればとて外の弟子より後に残して聲密め、汝今夜歸りて伯母君一人の時を窺ひ、師の君が伯母君と同棲したしと申されたりと告げくれや、さらば我自ら汝によき事してやらんと囁きたり。少年はまだ物心もなき子供にして、世の中に恐しきは父の外は師の君許りと恐れ居るなれば。畏まりて其の夜ありの儘に伯母に告げたり。伯母は人もあろうに僧ともある人に耻しきことを云はれ、憤心腎臆に盈ちたれ共、明ら様に刎ね付けては甥が身に悪しかりなんと、さあらぬ態にて、汝明日師の君に我が今宵忍び來ませと云へりと告げねと言ひ付けぬ。

師の坊は今宵忍べと聞きて、もう願ひ叶ひたりといそくしく、稽古も早く仕舞ひ、清きころもに着更へて夜這星の流るゝ朧夜に首尾よく内房へと忍び入りけり。女は一燈寂寞と坐し居たりしが、打解けたる態して、數ならぬ我身を思ひ玉はるは身に代へていと嬉し。されど唯だ御言葉のみにては真心

のほども猶疑はし。妾が願事唯一つ叶ひさせ玉ひてこそ仰に従ひまつらんと云へば。坊は早や海蔘の如くぐにや〜となりて目を細くし、一つはあろか百にても君の頼を聴かてやは、早や云ひませと急ぎ立つれば、其は外ならず。生豆四升今此にて喫べて見せ給へとて、兼て用意しつる生豆盆に溢るゝ許り持出せり。坊は何のこれしきと目を塞ぎて手に握りては口に投げ込むに、大方一升も食ひたらんとおぼしき頃より、腹俄かに雷鳴し出し、便意頻りに催して堪ふへくもあらざれば、急ぎ飛出し廁まではえ持たず、僅かに門を出ると其の儘そにて立ちながら放出するに、前代未聞の馬ならぬ人間が生豆一升食ひしなれば、糞は宛ら虹の如く、潑躍として宙に上れば、隣の土墻を飛越えて丁度薪を割り居たる其屋の主人の頭より糞灌頂。あな堪へ難や、あな臭や、何者の悪戯ぞ我に糞をば掛けるとて、急ぎ門より出見れば、誰かは知らず、夜にもしる白き脛を捲り出して伝々云ひながら虹の如く糞を走らす。あのれやれ、何處のたわけ、何の怨みて我に糞を浴せるとて、太き薪の木を捉け來て處構はず滅多打ち、坊は痛くはあれど明ら襟に我なりと云ふべくも

あらゆる場合なれば、存分に打たれて逃出し、足を空に寺へと逃返れるに。早や時刻過ぎぬれば寺男は大門固く閉ぢて入るべからず。已むを得ず犬の出入口なる扉の下の小さき穴より首差入れておい／＼と寺男を呼ぶに、寺男は来て見れば、何物か犬くゞりよりおう／＼と聲出す。おのれ何處かの野良犬が、我が牝犬誘出しに來たりしそとて棒振り上げて、眼玉の飛出すほど打ち据ゑたり。され共坊は無理に差込みし首なれば、急に引込ます譯には行かず、しつかり打たれて寺男の少し疲れて打止めし頃、漸々名乗りて門を明けて貰ひ、命許りは助かりしとぞ。

こはこの國の口傳へをば有りの儘に綴りしなり。慵齊叢話には少し違ひて書けり。されど大同小異なれば改めずに留めたり。

一)この國の僧侶と云ふものは甚だ可憐の位置に在りて平民以下に待遇さる。されば農夫が耕作する前をば騎馬にては乗り過ぎ得ざる掟てなり。京城の官吏共寺に來ることあれば大門外に出迎ひて蹲踞し深禮し、寺に入れば酒を出し清菜を出し款待極まりなし。之を高麗朝歴代僧侶を優待

し、國師號さへ賜はりたるに較ぶれば、實に霄壤の差異あり。されば迎待さるれば自然に自らも心性墮落せりと見え、今の僧侶共の道心なく精心を失ひしこと言語道斷なり。太抵は皆私婦を蓄へて淫樂を肆にし、料理屋の如く客を宿泊せしめ、酒肴を備へて價を貪り、甚しきは祈禱に托して宮女を引入れ、醜聲を外に洩し、實に平民以下の性行なり。殊に京城附近の僧侶を甚しとなす。流石に朝鮮第一の道場金剛山には尙僧侶らしき僧侶共も少なからず、葷酒を絶し淨行を修し寂寞として世外の行者たるものありとか。され共是の如きは曉星の數のみ。されば佛教は全然宗教としては死滅に歸し、或は侍天教、天道教、其他淫祠邪教が民信を集め、朝鮮の宗教たる位置を占めつゝあり。惟ふに李朝が佛教を迫害せるは、角を矯めて牛を殺せるの愚を免ること能はざるべし。

### 片身奴

今は昔、或田舎の兩班に仕へたる片身の下男ありけり。顔も半分、胴も半分、足も一本の片輪者にて、心許りは人並優れて悪賢く、人を倒して我身許得せんと屢々善からぬ振舞多かりけり。

一年主人兩班、科擧に應じて都へ旅立ちの供して、驢馬の口取り幾泊かしてやうく京近く迄來りけり。一日の午時、主人彼に命じて我はあすこに見ゆる酒幕にて午飯認むべければ、汝は驢を引いて山に赴き充分若草を喫ませよとて酒幕に入りたり。彼は主人許り酒幕に入りて我に何も食へと云はぬは心悪しと悪計を案して、驢を市に引き行きて價よく賣り飛ばし、其金にて鰯腹酒飯を飲食し、鬪と手綱丈け外づして彼の山にと駈登り、手綱を確かり握持ちて、心持善げに午睡の夢を食りたり。主人なる兩班は餘り彼奴が遅ければ午睡やしつると山迄探ね來見れば、彼奴は若草を藁にグウくと天地皆忘れて午睡し、驢馬はなくして手綱許り確かり握り居たりぬ。主人吃驚して強く蹴て彼を覺まし、おのれ不届奴驢馬は何處にやりつると詰責すれば、俄に驚さし面持して忽ち哀號くと泣出し、驢馬奴小人が暫し午睡せし隙に鬪

外づして逃げ失せたりと覺ゆ。大變な事を仕出來したり、日暮れば暮れよ。山中廻りて探し來べきに命許りは助け玉はれと、はや足早にかけ登らんとすれば。謀とは知らず主人兩班は、待て、廢せ、この馬鹿者、遠くの昔しに逃げ行きし驢馬が、今時分何處に見付るべきぞ。無駄骨折るより仕出來したることは詮方なし。別に又此處で一匹買ひ求め早く都へ登着くが上分別、實にや馬鹿に付ける薬はなしと。悄然と山を下り、新に驢を買て京へこそ登りけれ。京に着きて下宿を定め、日夜試験の用意に苦みつゝある一日、彼奴に命じて粥一椀を買ひ來らしむ。彼奴不圖この粥食ひたくなり、又一計を案じ、青鼻一滴椀に落してしくくと泣きながら入來れり。主人は何泣くかと尋ぬるに、昨晚から風を引き居りて、粥を持ち來る途中不覺にも一滴椀中に落したりと云へば、おのれ汚き奴、其粥食はるべきや、貴様にやらうと、忽ち粥に有付きたり。

かゝる悪しき事共續けば、主人は不吉の神に付かれてか首尾わろく落第しけり。おのれ憎き片輪奴、おのれの爲に我が運なくなれり。いかで彼奴に復

響してやらんと、一日彼奴を呼びて、其の脊に墨黒々と此奴の爲に落第し、途中費ひも夥しかりき、この儘生かしおくべき奴に非ず、即時葛籠に詰めて河に沈めよと書き付けて、我は京に少し残りの用あれば、汝は先きに郷に歸へれ、歸らば直ちに汝の背を家の人に示せよ、其は緊要秘密の用事なりと堅く吩咐て立したり。

彼奴は途中一人旅の氣樂さは、したい放題に狂ひまはりて、おもしろおかしく往け共、唯心に懸るは背なる主人の筆の跡なり。必ずこは我に利なき事共なるべし、如何で知りたやと思ひたり。一日急に蜜欲しくなり來たれば、麥の粉十文許り買ひ調べて、蜜商人を呼止めて、麥の粉の入物を出しこの粉の上に蜜十文くれと云ふに、商人いふが儘に少し注ぎやりぬ。彼奴は高し高し法外の高價なり、猶注げといふに、商人も不得已又聊か注ぎやりぬ。彼は猶高しとて入物を引込まさず、商人も仕方なく又少し注ぎやりつるに、猶高しかゝる高き蜜は都にも無しとて已まず。終に商人怒りて無法の人かな、そんなら賣らずといふ。彼奴カラ／＼と打笑ひ我もかゝる高き蜜買はず。いふ

持ち歸れと入物突き付くれども、蜜既に麥粉に浸みたれば取出すべくもあらず。其儘商人は只取られ口汚く罵るのみにて過去れり。かくて蜜の混りたる麥の粉を練りて佛の像を造りてそれを噛みつゝ往くほどに、途にて旅僧一人に行逢ひたり。旅僧は彼奴が佛像をばさも甘相に噛むを見ていと不思議に思ひ。佛像旨きかと問ふに、彼奴笑ひながら甘しとも、我は毎日かく佛像を食ひて腹ふくらかすを、僧なる汝がまだ佛像食ふこと知らぬとはおかしといふ。僧はさらば我にも少し噛らせよとて一噛みかめば實に／＼いと甘し。猶食はせよといふに、彼奴然らば汝我が背に書き付けある文字を讀みくれんかとして、彼に見せられたれはいと危き言ぞ書かれたる。即ち彼奴又僧に向ひて、汝にこの佛像を與へんに、背中の文を消して、この奴の爲に幸福數多得たれば、其の賞に即時娘を以て配せよと書き直しくれとて、書き直さし、此に心あちついで意氣揚々と主人の家に着にけり。

主人の妻は彼奴の出す背を見て、さても不思議なる夫の命かな。人もあらんに此奴の如き片輪者に花の襟なる我娘を妻はせとは何事か。此には仔細そ

あらん。主人歸宅の上らせんとて、言葉上手に延したり。二三日後に主人悄然と返來りて、いち早く彼奴の姿を認め、いとく不興面に、何故に今猶彼奴を生かしおくぞと叱り付ければ、家の人々益々怪み、譯云々と答ふるに、激怒忽ち爆發して、おのれ又しても奸計もて人を救けり。いてくとして下人に命じて、手取り足取り、葛籠に込めさせ引擔いで、江に差出たる柳の木に枝に括り付けさせ。あすこそ主人自ら繩を切りて河に落さんと盟ひたり。此に通懸りし村内有名なる目腐れ婆某女、柳の枝に葛籠ブラリと吊られて中に入あるを見て、田舎人の氣易く其處に何して御座ると聲高に問ひかけたり。後奴も前は誰かと反問して、打笑みながら、我此頃主人の伴して京に往きて來、途中にて眼を病み、色々藥を付けても治らねば、こゝにかうして吊して貰ひ、眼病第一の呪ひなる河の流水を眺めつゝありと。賊しやかに告げられば、老婆は忽ち其手に乗り、そは初めて聞く呪なり。果して汝の目は工合よき様かと問へば、よしともく、昨日迄の摸那はかき消す如くとれて、深き水底の小石の數迄數へらると答へたり。婆堪へられなくなり、いかて妻も少

し其處に吊りて河の流れを眺めさせくれまじきかと願ふにぞ、然らば一寸の間なるぞとて葛籠を婆に卸させ、手早く婆を詰め換へて、明日早く來へければと捨言葉して雲を霞と逃亡せり。

哀れなるは目腐婆、前世の罪や深かりけむ、翌早朝兩班の成敗の身代りして、アツとも云はず早潮に推流されて了ひたり。

主人なる兩班は、まづ厄介拂ひをしたりとて家人の皆々と喜び居たるに、其の二日目に片輪の彼奴は莞爾とさも得意氣に入來れるに、こは何ことかと一同開いた口塞がらず。彼奴は悠然と騒く皆々を押解め、怪み玉ふな、奴は計らず主人のお蔭にて龍宮城へ赴きて、男欲しやの乙姫の婿となり、富貴榮華を極め居れとも、これも我主の恩恵とおもへば少時も我が主人を忘られず、昨夜の寐物語に妻なる乙姫に打明けて、主人一家を悉く龍宮城へ引取ることの許可を得たれば、急ぎお迎へに推参したりと眞實らしく打語るに。これもしも信ぜずむば何をか信ずべき。主人はさても不思議なる幸運男よ。此度は必定嘘にてはあるまじ。科擧に落第したる田舎秀才なる我は、又この世にて

芽を出さんも何時の事とも期すべからず。寧ろ龍宮に赴きて一生無憂の境に暮すこそ上策なれとて、然らば汝に従ひ我も龍宮へ赴かん。妻よ御身も、忤娘も來たれと、家中の下女下男と別れの盃を斟みて其々のかたみを取らし、家財共は大方取集めて葛籠幾つかに收め、其の日の黄昏頃に彼奴に従ひて、ゾロ／＼と河邊へと往きにけり。彼奴は教ふる様、主人よこの柳の木の下こそ、千歳未願の龍宮への通ひ路なりけれ。疑はずして主人よりして早く入り給へ、入り玉ふには大きな笠を冠り四方を見ずに入るを法とすとて。頭を埋むる笠を冠らせ、推しやる如く河へと導けば、主人は云ふが儘に大河の中流へと歩み行く。追々水深くなるに従ひ、水笠の縁を浸せば笠をば手に差上げて猶深みへと進む。笠は大なり河風は強し、煽られ／＼籠々と宛ら人を招くが如し。それ主人が招き玉ふ、夫人早く往き玉へ、夫人は笠は似合はず、箕こそ似合め、箕を冠りて往き玉へとてこれも河へと推し進め、箕の煽るを指示し、母君招き玉ふ早く往き玉へとて悴を急立て、これも其の儘深みへはまりて死してけり。最後に残りし娘君、何も知らねば己も父母の後に従はん

と歩み出すをば、これ待ち玉へ、御身は龍宮へ赴かるゝ要なし、この世に於て此我が可愛がつて上げましようとお抱き止めて、無理に家へと引返させ、數多の家財も運び返し、遂に娘の婿となりたりとぞ。

### 無法者

今は昔、これは都に頓才ある極の貧乏人ありけり。一日都大路を漫歩さして、果物店に柿の刺き實推く出しおけるを見て、食ひたくも錢なければ、田舎辯にて店の主人にこれは何かと問ひかけたり。主人は、喫べなさいと答へたり(韓語の柿の實はチャシなり)。彼は應と答へて手に掬いてむさ／＼と腹脹るゝ迄喫ひ了り。有難うと一禮して立去らんとすれば、主人は驚きて無法者よ、店の品物を唯喫ひて禮一言にて立去る法やある。錢出せといふ。彼あく迄田舎ものらしき面持してこは不思議なるかな、何故先程喫へなさいと云はれしぞや、如何に都なりとて喫よといひて食ひたるに錢を取る法やあるとて、呆



る、主人を見返りもせず無理を通して立去れり。

柏の實は油多くして生豆と同じく下痢性なれば、あく迄食へる彼は、幾許も歩まぬに腹痛み出し便意頻りなり。され共今とは違ひ共同便所のある譯ならず、よわり切りつゝも一計を案じ、構ひ廣き一軒の雜貨屋に面色蒼黄と飛込みて、今亂暴者に逐掛けられたれば暫し此に躲まひくれよと、蓆一枚出して貰ひ之を立廻して其の陰に蹲まり、心行く迄糞したり。紙杯持歩くこの國の風ならねば、糞し了れど拭ふにものなし。又一計を案じて主人を呼掛け、追手は既に往過しかと問へば。主人は長烟管を啣へながら打笑ひ、汝が誰なるかさへ知らぬ我が、まして汝を追ひ來る者の誰なるか分るべき筈あらんといふ。彼然らば我に細き短き棒を與へよ、蓆に穴を開けて我自ら眺めんにとて、其棒を以て甘く唇を拭ひ。やがてもはや追手行過ぎたり、お蔭にて命助かりたりとて言葉巧みに謝禮を云うて、行衛も知らず逃亡せり。

かゝる無法者なれば、誰とて又彼の爲に周旋しくるゝ者もなし。無職徒食すれば一貧實に甚しく、冬になれども薪買ふべき術もなし。此に又一計を案

じ、町に出て、田舎の松葉商人共が牛に附けて賣り歩く松葉の中に、殊に勝れてよく乾きて大把なるを撰みて價を定め、我家迄連來り。こゝそよとて指圖して卸して門内に運入れさすに。いと狭き低き門なれば、大束の松葉は中々直ぐに通るべくもあらず。力強き田舎人一生懸命に松葉を撓め縮めて漸々内に入れたり。されば松の小枝は雪降る如くハラ／＼とちり落ちぬ。猶外の把も同じく無理に撓めて門内に入るゝに、商人はもはや賣りたる積りなれば、あゝ重たし／＼とて打ち付くる如く地に投げ卸し、こゝにも少からぬ松葉落ち零れぬ。やうやくにして三把共皆入れ終れば、彼は煙草を吹かし乍ら、熟々松葉を打視やり、先刻はまだ大把を思ひて價よく定めしが、今よく／＼視るにさのみ大把にはあらざりけり。あの價に買ひては大きな損、いて改めて價の相談せんとて、方外なる安き價に負けよと云ひ出す。田舎人の心真直なる松葉商人は計畧とは知るよしなく、怒るまいことかぶん／＼怒り出し、今更又價切るとは無法至極、先刻の價より一文安くても決して賣らず。買はずば買ふな持ち行く許りと、頭より湯氣立て、打罵る。彼は益々悠然と持ち行

かれたりとして詮方なし。見す／＼多額の損することは都の人はせぬものと空嘯く。田舎人は仕方なく又々やつと擔ひ上げ激したるからに猶一しほがたんとたんと門に打付け、松葉を雨と降らし雪と散亂せしめつゝ、牛に積みて大聲あげて罵りながら市の方へと引き往きにけり。彼は仕合よしと舌を吐き、落ちたる松葉を拾ひ集むれば、半把に餘りて僅に貧家の三日の代を支へけり。貧しき彼は中々魚肉など容易に口に入るべくもあらず。この國の禿山にも流石に綠色濃き期節となれば、門のあたりを盛に鯛商人が鯛買ひませ／＼と呼歩く、我も鯛食ひたや食ひたや、とて家中の錢を掻き集むれ共、十文には足らざりけり。されどこれあれば大丈夫と、忽ち一計を案出し。通りかゝれる魚屋を呼込み、長らくの押問答にて、やうやく一番小さき四寸斗りの小鯛一尾とばある限りの錢にて買ひとれり。之を臺所に藏ひ置きて更に魚商や來ると待ち居るに、程なく又一人呼通るを呼入れて、これ彼と鯛の價共きゝて、先刻よりやゝ少し大きな鯛をば一匹買はんと定めて、其を提げて臺所に行き、先刻の鯛とすり更へて又提げて出來り、買はんとおもひしが妻にきけば

要なしと云ふに、まづ／＼返すとそを押返したり。又程なく呼通る他の魚商を呼込みて、同じ風によゝ大けき鯛とすりかへかくすること五六遍終には一尺餘りの大鯛とすり代へて家中皆々餓腹を癒しけり。

色々と悪計許りして時には不法の食にあり就け共長くは續かず。終に止むなく盗みして運惡く捕手に捉まり、捕盜大將の許に引かれ行きたり。引かれ行く其の道にて捕手共の烟草を吹かす油斷を見て、其頃京に夥しかりし乞食に貴様達錢を興るべければ皆々我後に慕ひ附きて父よ／＼と呼ばれよと云ふ。錢ときゝては一議に及ばず。二三十人の乞食共大聲揚げて悲し氣に、父よ父よ我父よと彼の後に慕ひ來りやがて捕盜大將の廳に引込まれ、大將の吟味を受く。大將は聲いかめしく、何者なれば大膽にも天下の大法を破りて他人の物を盗むぞと詰問するに、彼は哀れ氣なる聲にて、盜は御法とは知りてあれ共如何せん見らるゝ通りの子澤山にて、到底貧乏人の瘦腕一ツにては養ひ切れず。父よひもじい飯くれよ、父よ寒い衣をたべととり縫られては、思はずも目に付くものも取りたりきと、誠しやかに述べ。門の外には無數の乞食共

一層大聲張揚げて、父よ父よ我父よと呼はる此光景を見て捕盜大將も漫ろに側隠の情を起し、實に氣の毒なる身上なるよ、汝の盜むも悪心にてはあるまじ、此一度は赦してやらむ、重ねては赦すまじ早々下れとて放免せりとぞ。

(一)細き棒もて唇を拭きたりといふは、日本人よりしては頗る怪しき事のやうなれども、この國にてはたゞ普通なることなり。予の屢々見たる所にては、朝鮮の中等社界の小兒等は脱糞して後拭ふこと寧ろ稀なる様なり。立派なる髯ある成人達も、我々日本人の如く厠に上るとて紙等用意するものあらず、大抵はそこらに落ち散る糞屑を一握み握み持て行き、如何にかして巧みに拭ひ了るなり、さればまして洗手杯は夢にも思はぬことなり。朝鮮の學校杯にて便所を新式に作りて此に洗手所を附屬せしむるも、僅少なる日本人が之を使用するの法を知る耳、韓人は何故にかゝる入らざる者ありやと訝りて而して已む。元來韓人と日本人とは清潔に對する標準を異にするは皆人の云ふことなれ共、殊に大小便に於て然るを見る。井戸の傍に垂れ流しの便所あるはこの國の普通、京城萬軒の

一大共同便所たる城内の溝渠に毎朝嗽盥する者幾百人なるを知らず。乃至小兒の小便を妙薬となして宮中に妙薬製造元なる小兒を飼ひ置き、之を便童と名け國王不豫の時には、牛乳を搾るが如く之を放出せしめてきこしめすが如き、蓋し到底日本人の考へ及ばざる所。予の經驗に依ればこの國の學校に於て便所を一週間、清潔と迄なくとも不潔ならず保持せんことは極至難の事業にして、予は幾度試みて終に失敗せり。密かに以爲ふに、韓人は清潔なる便所より清潔ならざる便所に入り易く用便し易く感ずるが如し。先年予が家に二三人の韓人を宿泊せしめし際、彼等如何に上便所に行くべきことを云ふに拘らず、彼等は皆揃うて下便所の不潔なる方を探びて之に往けり。彼を思ひ之を思へば、韓人と雜居する日本人の困難、及終に困難に打克ちて今日の居留地の基礎を置きたる先鋒渡韓者の効を偉とせざるべからず。

明者欺盲者

今は昔、これもこの國の都に暇人の無法者一人ありけり。常に盲人共の俱樂部なる都家といふに入込みて、盲人の擬して彼等の會食の度毎に其席に難りて飽く迄餓腹を肥しつゝありけり。一日盲人共合議して今日から一人宛代り／＼に皆を招きて馳走することにせんとて、籤抽きて順序を定め、當れる者より順番に毎日／＼響應をそしたりける。其の内に順番は目明きなる彼へと廻り來て、明日は愈々我家にて盲人共を招き饗すべき破目となりぬ。

無法者の常とて家は年中空々虚々、一家四人の糊口さへ思はしからねばこそ、不徳と知りつゝ盲人共を欺きて其の餘粒を食み、其の餘瀝を吸るもの、かゝる大勢のお客には濁酒一杯さへ出すこと叶はず。如何にせまじと妻にも色々相談して、賸餘終に一妙計を案出し、ハタと手をうちもう心配なしとて打笑み。都家に赴きて明日は我皆々を招して粗酒一献差上ぐべければとて、

いと丁寧に請しけり。やがて明日ともなれば、朝とく妻を走らせ、そここの繩暖籠より捨てたる牛骨を數多貰ひ來、瀬戸物屋に往きて瀬戸物素焼の壞れを貰ひ來らしめ。盲人共の來んといふ時刻より頻りに彼の牛骨をば炙る。やがて入來る盲人共目こそ見えぬ、犬の様な鋭き鼻もて頻りに甘き臭ひを嗅ぎながら、實に今日は大變な御馳走をするなめりと打歡びて物語り居る。はやお客皆居並びたるを見て、彼は棒の先に新らしき糞を一なすりなすり付けて、一人の盲人の鼻尖にさし付ける。忽ち其奴は鼻息荒く、さても臭き屁もあるものかな某氏放屁せしよなと云ふ。又其の次の盲人の鼻尖にさし付け、其もおなじく色を變へ、あな堪へ難き屁や、さては某氏放屁せしよなと罵る。又次なる盲人の鼻尖にさし付け、かくして皆の鼻尖にさし付けたれば中の氣早の一人が某氏に向ひて、自分で放屁しながら我か目が見えぬと侮りて我がかゝる臭き屁したりといひ懸るは怪しからん。其の儘にては置かれじといきまけば、我名を呼ばれし某は何といふ、我この臭き屁をたれたりや、何を證據に我といふ。畢竟自分てたれながら我に塗付けん魂膽ならんと、見えぬ

目見張りて臂さへ張る。彼方にも亦同様の活劇、其方にも亦同様の活劇、時分はよしと主人の奴は妻に目くばせして、彼の瀬戸物素焼の壊れ共をそと盲人共の前に列べちきぬ。やがて言葉の争ひのみにて飽き足らて、血氣の一人の盲人が、鐵拳奮て相手を殴る、殴られたる盲人はちのれ罪なき我に濡衣着せ又殴るとは古今未聞の無法者よとて殴り返す。闇夜の近眼の喧嘩鼻の眞晝の争ひよりも猶無茶苦茶なる盲人共の殴り合なれば、聲をしるべに鐵拳を飛ばせ共當る奴は飛んだ外の者なり。やがて喧嘩は八方に漫延し、一座の盲人總立ちにて、相手構はず殴り合ふに、前に据えたる瀬戸物素焼物は足に蹴られ手に飛ばされ、カラヲチリンザクリと亂調に響きて、宛ら今壊るゝに似たり。其内盲人共は果しなき喧嘩に力も盡きて、主人夫婦が慌てし如く出来て仲裁せしを機会に、皆々ぐにやりと腰を卸して、馬鹿を見たりと息を付く。主人夫婦は頻りに瀬戸物の壊れを拾ひ集めて、やがて哀號と泣き出し、折角皆々の出を當てに色々馳走も用意したるに、思はぬ喧嘩に花が咲き、さかれし通り茶碗皿鉢一切壊れて了ひ、馳走を出すべくも盛るべき器物なし。如

何にすべきと愁嘆す。盲人共は自分達が年にも恥ぢず小供の様なる喧嘩を仕出し、現在器を壊したれば一言も出ず。挨拶さへもそこゝに實に主人に面目なしと云ひく出て往きけり。其翌日盲人共都家に集り、昨日は實に某氏に濟まぬとしたりけり。我々此處に金を出し合ひて、切めて壊れし器の代なり共償ひやらては人情に缺けなんとて、少からざる錢をば彼に贈れりとぞ。

### 盲者逐妖魔

一度足を京城の韓人町に入れたる人は、前に後に怪しき聲を振立て、細き杖を方に、何か呼ひ歩く盲人共を見るなるべし。日本流に考ふれば按摩上下十錢とか云ふなめりと合點せらるれども、實は彼等は皆占卜者なり。目こそ見えぬ人の生年月日を聞いて其の人の運數の禍福吉凶より、兼ねて差當りの事件の成否等迄問ふに従ひ占ひ教ふるなり。されば彼等には又彼等の技術ありて、之を修めて其妙に達すれば亦一名人として世人の尊敬も大方ならず。

曩きに故閔妃存命の頃、京城の李氏なる一盲人不圖したることが旨く適中して、閔妃の厚き信仰を博して、これより宮中に入りし、高位の兩班共にも招かれ、一時財貨山を成し。其の男なる人は盲者の賤しき階級なれども、特に韓王のお聲掛りを以て、武官學校に入學を許され、士官に任用せられたりき。されば今こそ盲人共も社會の進歩に連れて閑暇になり行き、生計難甚しけれ共、昔の彼等は中々飽食暖衣妾造蓄へたるも少なからざりしとぞ。今は昔、京城に其の道の名手の譽高かりし一盲人ありけり。既に術奥蘊を極めて技神妙に入り。靈覺洞然明者を凌ぎ、眼は盲ながらも歩行の自由常人と擇はず。殊に幽界なる。鬼神妖魔の姿は亮然として觀照し、捕鬼逐魔の大威力を得たり。

ある一日彼京城の大路を往けるに、何處かの宴會に持行くとおぼしき飾り菓子菓子の盆の上に、綠衣紅裳の妖魔が舞踏するを認識し、あはれこの妖魔の憑きたる菓子菓子を容るゝ家の人は妖魔の爲に害傷せられん。罪なくして貴重の命を妖魔に奪るゝ人こそ憫むべけれ救はざるべからずと、其の飾菓子菓子の後に蹤

きて往きけるに、一富者の邸内に入りたり。盲者はかの妖魔こゝの誰にか憑くべきと、暫し門前に立留まりて内の様子を覗ふに、忽ち邸内大騒ぎを起し、内の令嬢今頓死せられたりといふ聲其處此處より洩れきこゆ。盲人はつと門内に入りて、我こそ令嬢を甦らせ救ひ參らせん、急き此由主人に告げよと云ひ入れぬ。主人も既に息絶へたる娘にしあれば、甦らぬとも元々なり。萬一盲者の云ふ如く甦りなば萬金に換へ難き家の寶を取り返へすなりとて、急き出來ていと忝しく施術を乞ひたり。彼靜に云ふ様、我に法あれば案じ給ふに及はず。此度こそ彼の惡鬼を退治してくれめ。令嬢をば一室に運入れ我も其の室に籠りて施法すべし。但し窓の破れは勿論、些やかなる隙までも皆紙もて貼り塞ぎて針の穴も漏らし給ふなとて、やがて用意悉皆調へたる一小室に籠りて、妙法の經を誦して一心に妖魔を調伏せんとす。妖魔は調伏されじとて、死したる如き娘の體はムツクと立上りて盲人と打相撲ひ、一起一仆其の聲室の外迄洩る。されど追々に妖魔は法の力に敵はて負けんとする形勢となり來れり。是の時娘の侍婢の一人あまり久しく盲人が出來らず、唯だ伝々とうめ

くおそろしのことと、仆れつ起きつする相撲の音もの凄く聞ゆるのみなれば、主人の身のういと、氣に懸りて拔足して室外に來り、そと小指に唾して些やかなる孔を障子に開け、一目を着けて内を覗き見たりしに、此に逸去の寸隙を得たる妖魔は、彈丸の如くこの孔より走り出て、走り出たる勢にて恰も内を覗ける婢の一目は打潰されて眇となりぬ。同時に憑きたる妖魔の逃去りたれば、娘は宛ら深き眠の醒めたる如く、ウロ／＼と四面見まはし驚く許りなり。盲人はこの様子を感じ知りて大聲擧げて主人を呼び、甦りたる令嬢を引渡し。主人が千禮萬謝の言葉をば耳にも止めず、長太息して云ふ様は、あゝ我が命長くはえ保たじ。今度こそは彼の妖魔を調伏なしくれむと妙法力を勵み行じたるに、誰か彼が爲に逃去る間隙を作り與へて、終に虚空に逸去せしめたり。無念なりき、残念なりき。妖魔は必ず我に仇を酬いん、我が生命も長くはあるまじと。悵然として一物も受けて出行けり。

彼が妙術既に神に通せるの噂さ、漸々世間に擴まりて、時の王にも聞えけり。この王頗る英明にまし／＼容易に世評を信せんとせず。聖人は怪力亂神

を語り玉はず。野人こそ狐狸に迷はさるべけれ。近頃不思議なる彼盲人の法力の噂、恐らく俗人を誑かす猾兒が惡戯ならん。其奴我が前に引き來れ。我親しく之を試みて其化を現はしくれむとて、臣下に命じて彼盲人を呼來らしめたり。王は鼠一匹を盲人の前に据え置て汝の前に何かあると問はれたり。彼は考ふる様もなく鼠なりと答ふ。さらば何匹ありやと重ねて問ふに、三四ありと答ふ。此時王から／＼と打笑ひ、さては汝の正體現はれたり、眼明るき我等がかく此處に一匹の鼠をおくものを三匹といふのは盲目推量なり。如何に誤りを知りやと云へども、彼は少しも駭かず、猶他く迄三四なり一匹にはあらずと奏上す。王終に激怒まし／＼世を欺き人を騙るは盡賊なり、盡賊は我が國に生かしおくべからず、之に死刑を宣告すとて。即時東小門外の刑場に引連れ鹹れと嚴命あり。やがて獄吏が彼を引立て去りし後、王は更に考ふるに、彼盲人鼠と云ひしは正に當れり。鼠たることを當てたるものが其の敷を誤るとは理外の事なり。或は腹に子鼠のありもやするとて、命じて其の腹を割かしめ玉ふに、既に形をなしたる子鼠二匹微に鳴いて現はれたり。

王を始め并居る群臣皆駭然と色を失し、王は殊更讚嘆し、實に彼は神人にして我が國の至寶なり、命失はしては大事なりと。急ぎ慌て、前令を取消さんとすれ共、既に遠く引かれ行きたれば、如何なる駿足も刑施行前に追付くべからず。され共、專制政治なる此頃は又相應に應急手段の設けありて、死刑に極りし罪人が刑場に引かれて露と消えむとする其の刹那迄、猶國王は之を大赦するの權あれば、王城の東端に物見樓を建て、此にて白き旗を振りて信號をなす。右に靡けば特赦の印、左に靡けば刀を下せの印なり。王は急ぎ信號手に右に振れよと令し、信號手は大旗を捧げて力を極めて右に振れ共。不思議やな俄に妖風吹起りて旗を左に靡す、こは何事と王も信號手も慌て、又右へと振り直せども、妖風愈強くして益々左に靡く許り、策盡きて王は足らずしつゝ惜み悲めとも甲斐なし。刑場にては今や信號出るかと待構ふるに、大旗翻騰と長く左に靡けば、生路絶えたりとて紫電一閃の下に、神人の頭體は地に墜ちたり。此の時空中笑聲きこえ、妖風亦熄み、信號臺よりは大旗右に靡いて、特赦の王使汗血馬に鞭ちて百歩の内に來れり。

(一)この國の愚民の信する重なる鬼神を列擧するに、其數も頗る多し。

○玉皇上帝……天を指したるものにして諸鬼神の王なり。されば人民も直接に之に祈禱をなすは餘りに勿體なしとて、重に其以下にある諸鬼神に起願するを法とす。

○山神……所謂山の神なり。各山に一神宛鎮坐する譯なり。されば山に相墓する時は、まづ其の山神に酒肴を酌して、以て山神の機嫌を取るを法とす。

○關帝……關羽なり。關羽は昔豐太閤壬辰役靈を京城々門に顯はして日本兵を退けたりとて、以後韓帝の崇尊一方ならず、巫覡も亦之を取り收めて鬼神の一となし、荒神にして効驗頗る顯著なりと云ふ。

○五方神……東西南北及中央の神將なり。又青、白、赤、黒、黃帝とも云ふべく、從て又春、夏、秋、冬、にも配す。

○龍神……水界の王なり。鯉長年を経れば龍に化し、蛇亦龍となると傳ふ。

○城隍堂……既に前に説明せり。



- 府君堂……日本の所謂氏神なり、従て定體なし。
- 指道長承……朝鮮里數十里即ち日本の一里毎に路傍に建てる方向を示す杭なり。此に神憑けりと傳ふ。
- 乞粒……屋敷の神なり、各屋は皆之を祭る。
- 業位様……一軒の家の運氣の神なり。米と蛇、鼯、豕の如き動物を瓶又は袋の中に入れて神躰とす。移轉の際には携へ行く。
- 産神……産の神にして神躰老婆なり。
- 成主……各家の守護神なり、紙に米、錢、餅等を包みて家の棟梁に貼り付けおくなり。
- 七星堂……北斗七星を祀れるものにして、壽を祈る、神躰は佛形七人。
- 崔瑩將軍……高麗末の大將軍なり。巫覡の尤も恐れ尤もよく祈る神にして、他の神々を祈れる末にも亦この將軍をも祈るを習となす、開城の德勿山に本迹あり。
- 末命……浮行の鬼神なり。

- 老人星……南極星なり。北斗星と同じく人の壽を司る。
- 戸口別星……痘神なり。江南より來れりと稱す。痘の十四日目に此の神の見送りをなす。棒にて馬形を作り、之に飯などを盛りたる俵を積み、馬夫を傭ふて巫女舞踏して之を牽去る。馬夫後に其の飯は食ひて其の馬を捨つ。
- 厨主……厨の神なり。不潔の木を焚く時は怒ると稱す。
- 厠神……厠の神なり。厠に神あるが故に、上間の時には普通の家に入る時の如く咳拂ひをなすべく、又夜は點燈して入るべし。然らざれば厠神怒るといふ。され共是等は或は厠は隱秘の處なれば、中に既に人ある時に、知らずして又入らんとするの弊を防ぐ爲の傳説なるや知るべからず。
- 太上老君……道君皇帝にして老子ならんか。蓋し朝鮮の迷信は、道教と佛教との混合して生じたるものなり。其の道君を祭り佛を祀るも是が爲なり。

○胎主……痘にて死したる幼女の指を切りたるに憑ける神なりとか。婦人にのみ憑く。胎主を有する妖女は常に人語を梁上若くは空中に聽く。愚婦は吉凶禍福の判断を之に請うに幼女の聲にて一々教へ、鑿々として適中すとして迷信す。され共今は社會を惑亂する者として禁止したれば、公然たる胎主家はなし。唯私かに迷信女の需に應じて之を弄するの妖婦あるのみ。

是等の鬼神に事へよく人と鬼神との仲媒をなすものを魂といふ。朝鮮の傳説に依れば、彼等は最初より魂志願をなせる者に非ず。中年頃に達せる時忽然神に憑かれ此に不得已魂となる。其夫若し之を許さざれば神愈憑婦を苦め、終に魂の群に入りて始めて赦さるゝなりとぞ。

### 妓生烈女

今は昔、賤しき妓生の身を以て烈女の旌表を受け、烈女門を賜りたる貞女

ありけり。

都の兩班にはあらねど、門地賤しからぬ一士班の獨子、父早く死して母の手一つに育てられ、相當の家より妻をも迎へて何不自由なく暮し居たりけり。さるに彼の家は三代獨り子の不吉なる家筋にて、其曾祖父も其祖父も、其父も、婚姻して男子一人を設くれば直ちにそのれは死亡して、遺子は母に育てらるゝ來歴なりき。されば彼もおなし運命なるを先覺して、夫婦と云ふは名ばかりにて絶えて枕は交はさざりけり。母もよく我子の心根を知り居れば強いもえならず、一家三口家の不祥を嘆息しつゝ辭々として暮したり。母は一日我子を呼びなまじ家に居ればこそ中々に憂愁も深ひなれ。些と氣晴しに四方遊覽に往き來らすやとて、多くの旅費を與へ、一僕を引連れて旅路へとこそ立たしけれ。當時平壤の監司は彼の親類なりければ、まづ平壤を當てにして晝行夜寝し程なく着きて監司の家の賓客となれりける。監司の親類とて庶人の尊敬大方ならず日々夜々の招待宴飲に心を籠め、殊に平壤は朝鮮第一の妓生の名所とて、花の如く月の如き名妓共を侍らせて彼の手折るに任せたり。

年猶若き彼なれば、美人に心の移りて二人や三人の嬖寵は必ず出来んと皆々期待しつるに、女嫌ひの不粹漢には非ぬ様なれとも、何故か終に心を許せるさじと飽くまで堅き彼が怪しき行ひは、平壤不思議の一つとなりぬ。一日平壤の官人共打集りて名ある妓生といふ妓生を總呼びして、さて汝等も知れる監司の許なる公子は、文才風流兼備しながら、終に一度の天眞を吐露せしを聞かず。この儘こゝを歸しては、妓生名所の此の地の名折れなり。汝等の内誰か如何なる手段方法にてもあれ、彼の人をして情を許さしめ得ざるべきか。成功せし者には我等連盟して生涯厚き保護を與ふべしと相談せり。妓生等皆々近頃の難問題と打沈吟して早速答ふるものなし。暫して名妓中の名妓なる年未だ二十に満たぬ一美人恥し氣に進み出て、妾こそ其大役を引受けてこの地の爲に彼の君をこの儘にはおかじと誓ひたり。これより美人は日夜彼に接近して婢妾の役を自らし、屢々寝ぬるに室を同うして懸隔てなく親めども、薄帳一片猶懸り瑣し神秘を現はさず。美人も終に策盡きんとし、さても不思議

議に固き公子よと折々は親しき妓生にも嘆息を洩しけり。

花散り水流れ去りて歲月早く過ぎ。覺えず二年も経たれば、彼も日夜故郷戀しくなり、終に監司にも暇乞して故郷へと立歸らんとす。美人は殊に別を惜みて、君の住家は何處にてあわす、妾も必ず君を慕ふて尋ね往かん。さても我に幸き人のかくも戀しきはとて、明眸一點の露を宿していと怨じ顔に云へば。彼も妓生の常手段と心に笑へながら、慕ひ來たらば男冥加に餘りなんなど云ひつゝ、詳しく故郷への道筋迄教へたり。かくて家郷に歸りて母親と妻に旅の事共物語りて二日三日過ぎたるに、突然平壤なる彼の美人乗物美々しく入來れるに、驚きつゝも其の眞心に感じ喜びて、母親にも事情を打明け、別に房をしつらひ、妾として住はせけり。妻も十人に勝れし可憐の容色あり。まして妾は天下の名妓。月と花とを左右に並べ、春秋一時に装ひを疑して媚を呈する幸福の身となりながら、僧にもあらで僧よりも一層持戒の嚴重なるべき彼の運命こそ哀なれ。

され共彼も花の朝月の夕、獨り兀然と庭前を打眺めて熟々我身の上を考へ

ては、花も必ず散ることあり、月も一度は缺くるもの、永くはあらぬ人間の、慎むも慎まぬも畢竟今日死ぬるか明日死ぬるかの差別のみ。この儘年老い朽ちぬれば、人として人生の真味を斟まぬ後悔幾許ぞ。まゝよ今宵は戒を捨てんかと一度は決心すれども、いや／＼曾祖父、祖父、家殿、三代の先人達も、今の我の如くにして終に母に先立つ不幸の子となりたりしならん。今の一念こそ我家の魔ぞと思ひかへしては猶戒を保つ。され共持戒の念は等身の堤にして、人間の樂みは大河の洪水の如し。終には之を決裂して一夜妻と眞情を交したりけり。其の夜の夢に、髪鬚皆雪白なる老人が、威風殿しき人の前に額付きて頻りに願事するを見たり。其の問答を聴くに、雪髪の老人こそ我が父君にておはしまし、恐しき人は催命判官なりけり。父は血涙を流して我子の爲に延年を歎願す。催命判官は頑としてそは天帝の既に定むる所、今更如何ともすべからず。今年中には必ず命終らんと云ひ放つ。猶父は頭を地に打ちつけ雪髪血に染らして嘆願すれば、判官も終に至情に動かされ、子と思ふ汝の情に我も動けり、さらば汝が子の延年の法を教へん。明朝早く汝が家の

門前を刀剣商の通過することあらんに、汝が子は最鋭利なる刀を買ひ、研ぎて枕邊におきて臥せよ。半夜窓を開きて入來るものあるべし。其の誰なるかを問はず、直ちに刀を把りて其の頭を斬り、其の首を提げて家を逃出て何處迄も走れ。かくせば死を逃れて壽八十なるを得むと。父之を開きて叩頭して恩を謝しぬと見れば眠覺めたり。

翌朝彼は昨夜は不思議なる夢を見たりけりとして茫然としてありけるに、はや聲高く門前を呼過ぐる刀屋あり。餘りに夢と合しぬれば、急き呼止めて勝れて鋭き刀一振買ひ取りて研かせ、密と我が臥床の邊に藏しおけり。其の夜の半夜過ぎたる頃、何者とも知れず窓押開けて假寝せる彼を狙うて寄來れり。すはこそ夢は正夢なりけりと、物をも云はず枕刀おつとりて驚く賊の首を打落し、其首をば袖に包みて用意の金子取出して闇に紛れ何處を的とも定めず、一散に逃亡したり。翌朝主人の起出ること餘りに遅ければ、母をはじめ妻妾皆怪しみ、下人に命じて寢室の窓押開けさせれば、室一面の鮮血淋漓、主人は誰にか寝首を搔かれ紅に染みてぞ綻切れたる。母妻妾をはじめ數多の召使

其の驚駭は言語に絶し、殊に心弱き母妻は打倒れ聲を惜まざ泣號せり。されどかくてあるべきに非れば、喪を發して葬儀を營み、妻は其日より寡婦となり果なき縁を悲みたり。

一日妻は母と本妻との居並びたる折を見て、いと聲潜めて、夫人は葬りたる人をば夫と確かに思し玉ふやと問ふに。妻は固より我夫なるべし、我夫ならて誰ならんと答ふ。妻は愈々聲密めて、夫人は永年連添はれてまだ夫君の體を見知り玉はずとこそ思はるれ。妻は暫しの契りなりけれ共、左の腋にと大きやかなる黒子あるを確かに見届けたり。然るに葬りたる男の體を改めたる時に、黒子は終に見付けざりき。必ず我夫にはあらず。夫の君は彼の夜家を逃亡したまひて今は何處へか隠れ居玉ふに相違なしと辯明したり。母君は熟々聞き了りて、實に汝の云ふ如く、我が子の左の腋には生付いと大けき黒子ありき。妻は悲に心亂れて其方の様に詳しくも男の體をえ見ざりければ、終に悟らて過ぎたれ共、其方の言葉聞くからに若しやと思ふ頼みも出てたりと云ふ。妻はやをら膝を進めて、母君の仰の如く必ず夫の君には猶存命し

居玉ふに疑ひなし。其に付き妻の一生の願ひには、何卒今日より妾に永の暇を給はれ、妾は國中遍く尋ね廻りて、如何なる深山の奥に隠れ居玉ふとも、森ひ參らす一念にていつかは尋ね出し參らせて復た此處に連還り申さん。もしや不幸生ある中に尋ね出し得ざる事ありなんとも、冥界よりにても誘ひまつりて必ず母君に逢はせまつるべし。いかて許させ玉はれと、誠心見えて願ひつるに。母は浮き川竹の務めせし女に似合はぬ操正しき彼女の人格を信ずるものから、猶更深く感入りて、實に其方は我家の守り神なるか、其方ならば或は首尾よく仕了せもしつらんとて、いふが儘に許しやれば、彼女は即坐に縁の髪を剃り毀ちて、麻の法衣に脱ぎ更へ、法堂目深に被り、俄に獲る尼法師、南無陀佛のこゑも可愛ゆく、行衛定めぬ旅の空へと上りぬ。

何處を先きに尋ねべきにもあらねば、足の向ふまにく歩み行き、目に入る男といふ男には皆心して眺めつゝ、法捨の情に口を糊し、幸に病にもかゝらず、はや一年半も夢の裡に過ぎにけり。絶えて其れかと思ふ人にも逢はねば、流石に女心のかよわくて、これ迄の縁にて、我が北に往けば、君は南に

まはり、我が西にまはれば、君は東に往き玉ふて、終に廻り會ふ日もあらじかと。悲愁の念胸に迫りつゝ、丁度晝飯頃なれば、とある一軒の門に立ちて飯乞ひたり。其主人らしき人聞きつけて自ら飯を與へ、熟々彼女の顔ばせを眺め、しみじみと云ふ様には、さても羨しき尼僧かな。如何なる因果にてかは知らねどもこの儘埋るゝには惜しとも惜しき標緻なり。我先年妻を失ひて息子一人の氣樂な暮し、雨の降る程縁談あれども、今猶獨りて暮し居る身の上なり。其方にさへ心あらば天の結びの縁に任せて今日より妻と呼ばんは如何と。この時彼女は虫が知らずか妙に心動きて、何となく此處に居れば夫君に廻りあへる様に思はれ、さらば仰せに従ひまつらん。但し尼僧には堅きは又延ぶべし。其の折こそ仰せに従ひまつらめと固く約して此に旅草鞋をぬき捨て、箕箒を執りて其人にかしつきぬ。

先妻の篋なる一人息子は、近くの書堂に通ひて勉學しつゝあるが、始終師の君の噂を共を我か父にするを聴くに、其の容顏風采尋ぬる我が夫に似通ひ

たる節々あり。一日家に祭事あるを折として、夫にも相談して師の君を迎ひて饗應せんとて童子にこと傳て、明日は師の君を連れて來よとて支度共丁寧にし、己れは室の陰に隠れて覗ひ觀るに、果してまかふ方なき我が夫なり。天に歎ひ地に歎ひ假の夫の何彼と彼の君を持ってなす暇に我が房にて年比の困苦の様を細々と長がく書きつけて、明日の夕方村外の城隍堂の邊にて待つべければ、必ず約に違ひ玉ふな。一日も早く還り玉ひて母君の御心を安ませ玉へとて、これをば紙捻りにして新しき煙管の中に差込み、翌日童子を呼びて、師の君に昨日來ませし禮共云はせ、この煙管は母よりの贈物とて渡せと命じぬ。書堂の先生は童子より新しき煙管を受取り厚き心遣を謝し、やがて煙草を詰めて吸はんとするに、煙通らず。よくく中を見れば紙捻差込みあり。怪しと思ひて拔出し廣げて見れば事情盡く分明し、妻の賊心身にしみて嬉しく、やがて其の夕用意共残りなく調べて、日本ならば頬被に尻捲りといふ出立して、約束の場所へ往き見れば彼女は既に待ち居たり。手に手を取りて人目を避け、恙なく我家に歸りぬ。再生の身には天殃もなくなりて今度こ

そは兩手に花、人間の樂の限りを盡して子供數多設け、八十歳迄長壽せりとぞ。

この事終に四方にきこえ、郡守は之を掌禮院に上申し、勅を得て烈女門を彼女に賜はり、妓生の烈女として旌表せしとぞ。

後に到りて彼の夜忍入りし賊は半壞の一官人にて、妾が妓生たりし頃懸想していたく振られしが、遂に彼女を慕うて來、又も手酷く刎付けられ、怨みは主人に飛んで行き、是人なくばとて失はんと忍び入りたること分明せり。

(一) 朝鮮の古へは、北斗南斗兩星が人間の壽命を司るものと信せり。是れ或は支那古來の天文家が星と人の運命を連關せしめたるに基きたる迷信か。されば古來壽を南斗北斗に祈るの事あり。又北斗僧人壽の帖符を管し、南斗星記入の事に任じ、時々相集會して相談することありとの俗説もあり。現に某書に京城の南山にも時に兩星相會することありて、俗説者天機を看破して之を天折すべき運命者に漏し、彼をして南山に登りて僧服したる兩星に嘆願せしめ、終に壽更に十年を延はさしめたるといふ

如き俚話も傳れり。

### 癩疥病童知雨

今は昔、都に名高き長者ありけり。男の子はなくて娘唯一人あり。容色宛ら春花の朝風に笑ひ。秋月の雲間を出る如く。まさに絶世といふの外なし。されは彼は如何にかして天下の名士を得て婿とし、天晴れ家の名をも擧げさせたとしと思ひて、雨より繁き媒婆の口入も皆謝絶して。只管自ら婿を探しけり。され共此の人ならばと眼鏡に叶ひし男はなく、追々娘も年頃になり行くものから、漫ろに心も急ぎ出しけり。

腰辨當にて婿探し。如何なる田舎人にもあれ、此人とふもふ男を見付出したしと毎日歩きまはるに、一日某寒村にて數多の百姓共畠を耕し居たるが内に難りし鼻垂しの鬘童が、青天白日滿空一片の雲もなき秋晴の日に、何思ひてか、舌打鳴し、チヨツ又明日は雨降りかと喧をき。さても不思議なる

ことをいふ童かなと思ひて歸りしに、果して翌日は一天曇りて大雨霈然として降注く。彼は讚嘆やまず、扱ては彼の童は神人なりけり。我を始め無数の成人達誰一人として思ひも懸けざりしことを、己一人先見したる聰明さよ。我女の婿にすべき男は三國中にこの童の外なしとて、急き童の家を尋ね行き、數々の禮物共出して身許を明して婿にと望めば、父母は何事かと打驚さぬれども、正眞の眞面目なれば、年中貧乏の水呑百姓の子を捨てる數さへあらばと思ふほどなれば、直ちに承知し、彼は又も親心の變らぬ内と其の座よりして乗物に乗せて京の家へと伴ひ來にけり。

怪む妻を氣にも掛けず、獨合點し獨感心して、即日婿よと披露を濟まし、愛娘と夫婦の大禮を行はせたり。四五日經て彼は婿を呼寄せて聲密めて、汝我が相を觀よ。我相は如何にぞやと顔を突付くるに。婿は吃驚仰天し、父よ相とは何の相ぞ、我は相といふことを初めて聞きしといふ。父は押返して謙遜するな、隱立するな。親子の間に遠慮は入らぬものぞ、人相を見てよといふなりといふ。婿はいよ／＼困じ果て、我は田舎に生長したれば、芋大根の

事なれば父君よりは明かれ、其の他は何も知らず耻しながら目に一丁字さへなきものをと泣かん許りに云ひ出すにぞ、父は餘りのことに呆れ果て、果して左様か、汝も唯の凡人か。さらば如何して先きつ日青天白日の秋晴に明日の雨をば預言しつると問ふに。婿は耻し相にはにかみ乍ら、父よ我には永年の癖疥の固疾あり。雨降る前には必ず痒し。彼の日も丁度むづ痒く堪へかたくなりたれば、搔きながら明日の雨を罵りたるなりと答へたりとぞ。

### 双童十度

今は昔、ある村に富めるにはあらねども家柄賤しからぬ兩班の若息子ありけり。一日漫歩マンボきして旅の僧に行逢ひしに、其僧しげ／＼と彼の相を觀てありしが、さても不思議の子福者かな、さりとも双童十度生みては嘸ぞ生計に骨の折れることならんと獨言して行過ぎぬ。彼れを聽きておもしるき言をいふ僧かな。世に双子十度も生む人あるべきかと深く氣にも留めずに年月を



やがて十六の春を迎へたれば、縁ありて近隣の兩班の娘を迎ひて夫婦の仲も睦しく暮し居けるに、ほどなく妻は身重となりて、生みおとしたるは双子の男兒なり。初めての男子のしかも双子なれば彼夫婦いと悦びて、掌中の珠と嘯みける。其の内に又妻は身重となりて生落したるを見ればこれも双子の男兒なり。さては訝し、或は先きつ年の旅僧の觀相が當りやせんと聊か心安からざりしが、二度の双子もサ迄とは思はず、之を愛育したりしに又幾程もなく第三回の妊娠に生落したるも同じく双童。第四回第五回もおなじく双童にてもはや男兒十人を擧げたるに、何れもく丈夫な逞しき男兒共にて、無難息災に太り行く。されども子供の太り行くにつれて彼の身代は細り行き、固より富めるにあらぬ家の、今はほとく暮しかぬる有様とぞなれりける。彼は一日、熱打案じて、我々夫婦かくてあれば、此の末猶五度の双童を生出すべし。さては愈々世過ぎ苦し。もはや十人の男兒あれば先祖に對しても務は果せり。之より先きは子供よりも生活の苦勞を除くが第一なり。さるにても

我がかく家に在りては徒らに子供の數を殖さん許なりとて、妻にも打明けて終に何處とも定めぬ旅行に上れり。

目的ある旅にあらねば、身に持てる程の藝もて口を糊して、或時は食客となり、或時は村夫子となり。東より西、南より北へと旅行して、もはや三年も過ぎにけり、或日縁あつて一村の長者許に身を寄せたるに、不思議にも其の主人と心いとよく合ひて遂に相見るの遲きを恨み、云はく長者の御相手に何不自由なく幾月かを送りけり。或春雨しめくと降り籠むる日、殊に二人は打解けて色々身の上語り合ひたる序、彼は熟々と嘆息して世の中に予の如き果なき運命に囚はれたるは稀なるべし。家には貞淑なる妻あり、健かなる男兒十人もありて、しかも家庭の樂を享くるを得ず、かく世間に漂浪して他人の家に雨露を凌ぐとはとて鼻打ちかめば。長者は始めてさゝたる彼の身の上話しに興動きて、更に深く其の事情を問ひければ彼は何も彼も打明けて物語れるに、長者は驚嘆の眼を見開き、君の身上をさげば轉た此世の不公平なるを嘆せざる能はず。見らるゝ通り、我は齡既に五十に餘りて衣食とは

不足なけれど、子としては娘の子供ある許り、男兒とても一人もなし。かくては祖先に對する不孝となるので、妻とも相談して妻をおき又妾をおき、今は四人の妾をおけ共、庶腹の子も矢張り女兒許り、今ははや男兒を得むの望み絶えて他人の男兒に羨殺されるのみなりとて、互に嘆息したりけり。漸く月日も重なりはや一年餘の長滞在となりたれば、彼も追々故郷の事共氣に懸りて長者に暇乞して立去らんとすれば、長者は頻りに引留めて立たせず。彼も不思議に思ひ、長者は何思ひてかくも我を強く留むるかと思ひたれども、家に歸へるも貧しき生計のあすの米料さへ心配すべき苦しさはよく知れば、易きに就くを好む人情とて、引留めらるゝ儘に過しけり。或日長者は一間に彼を呼寄せて、障子など堅く締切り、決心したる面持にて膝突合して聲低く彼に頼む様、我も愈々男兒得むの望絶えたり、君は未だ双童五度の祥福を持たれたり。いかて我が爲に其の祥福を盡されてんやとて驚く彼に猶聲低く、明夜より續いて五夜、我と一所に女共の内房に入りて我なる如く装ひて妻妾共に種を植えさせ玉へといふ。熱々さゝりて世にもおかしき頼みなれども、相

方の事情を照合して考ふればおかしからぬ道理あり。我が持てる猶五度の双童は我にとりては一家凍饑の大不祥、長者に取りては家系を繋ぐ大吉祥、溢り不足に賑はすは相方の利益なりと考へ定まりて承引すれば。長者の喜悅譬ふるにもなく、明夜より續いて五夜、女共には少しも怪まれず、思ひ通りに行ひけり。

他人の代りにしたることとは云へとも、後の結果を知りたく足を留むるに、養由が弓ならね共一發として無駄矢なく、妻妾五人揃ひも揃ひて其月より見るものを見ず、愈々妊娠と定まりたり。長者は計畧果して成就せりとて大に喜べば、彼は又何が生るか女生るか男生るか双胎なるか單胎なるか知らまほしくなりて、更に足を留めたり。漸々月満ちて五人の女が順々に生みおとしたるを見れば、何れもく双童なり。餘りの事に長者も彼も感嘆して暫しは言葉も出ざりけり。

十人の男兒何れもく岩丈作りにて肥立殊によるしければ。もはや生長疑ひなし、且つ我もはや双童十度の運命も果したればとて長者に暇乞して我家

へと立去りぬ。別るゝ時に長者數限りなき數多の物品餞別して幾多の僕に送らせて無事に其村迄着かせたり。

如何に長年家出したりとて我家を忘るゝ筈なれば、前の家に行着けるに家としては影もなく野草離々として麥漸々たり。彼は驚き一方ならず、狐狸に魅せられしにあらざやと自疑へながら、通り懸りの里人を捉へて某の家はこゝときしに何處に移りしかと尋ねれば、其人實にもく三年前迄はこゝに佗しき生活してあられしが、三年前より旅にある主人がいたく發祥せりとて、數多の黄金を送り來り、其より年に四五度宛送り來る黄金の夥しければ、先きつ年こゝの家を賣拂ひて、かしの楊柳門に垂るゝ所に新に廣き邸を買取りて、今では近在切りての富める兩班なりと告ぐるに、さては彼の長者の謀ひなりけるとて今更其思を感しつゝ、新らしき我家へと尋ね往けば、實に内富めば外に現はるゝ裕けさは廣大なる邸の何處から何處迄整然として調へて住み心地好げに見られたり。大門を入れば大廣間の廣き椽に、何れもくよく似たる丈夫相なる男兒十人机を並べて先生に就きて讀書を習へり。これが

皆我子と思へば夢にあらじかと嬉しさに我を忘るゝ許りなり。され共童兒は父そと知るべき譯なれば、見知らぬ何處の人が來れるとて氣にも止めず勉強す。彼は打笑みて半眞面目に我こそは汝等の父よと云ふにそ、彼等は訝しげに見上げたりしが、やがて一番年尚なるがつと立ちて内房へと入り、母にこの由告げたるらしく、母は窓を開きて見るに、別れて年經し我夫なるにぞ、驚喜手の舞ひ足の踏む所を知らず、涙くみつゝ出て來て、この方こそ常に汝等に物語りたる父上よとて、夫婦親子の再會に永き日も短かりき。

やうく我家に落着きて、可愛の我子の無邪氣なる舉動と、父よくと四方より取着くを見ては世界の中に子に増す寶はあらじ、既に衣食足りてはかゝる寶は多きほどよし、惜しきは彼の長者が許に置き來たりし猶十人の童兒なり。十人總てを取戻すは出來ぬ相談なるべけれど、半分なる五人を取戻さんに長者もいやとは云ふまじとて、一日細々と文認めて密かに使ひの者をやりたるに。程經て使の者手持無沙汰に歸來て、かの家は既に何處へか移轉して近所の人誰も行衛を知るものなしと復命したりけりとぞ。

## 韓様松山鏡

今は昔、この國にまだ鏡(一)の作られず、漢土よりも輸入多からざりし時の事なり。片田舎の一平民、京に出てし序に面鏡一つ買ひ取りて返りにけり。打向ひて我が面を映すに、一顰一笑その儘に映りておもしろさ譬ふべくもあらず。されば時折取出しては獨り覗きては打笑ふ。かくて又密に藏し、まだ何人にも示さざりけり。妻なる婦は我が夫が何の面白くてか、折々異様なる圓き平きもの覗きては嬉々と打笑ひを訝しく思ひ、或日夫の藏ひおく所を見極めて、其の在らぬ時を窺ひ、そと取り出して眺めたるに、こは如何に、其内に我と年輩似寄りたる一婦人の面ありくと見えれば、心火起りて堪ゆべからず。淫性なる我が夫や、都に往きて妾一人求め來れり。もはや我には秋風立ちたりと見ゆ。情無の男心やとて暗涙を呑み、其儘鏡片手に姑の許に行きて怨しつゝ物語れば、姑はいとも怪しみ、其妾我に見せよやとて、面鏡覗

き見たるに。女は女なれ共我と似寄りの鏡老婆、とても悴の相手にすべくもあらぬ代物なり。呵々と大笑し、嫁殿何を見たる、かゝる年寄りをは、如何に悴が物好きなればとて、態々京都より妾にとて求め來るべきぞ。何れ已むなき事情ありて、何處かの老婆を預かりて來りしものならん。我子に限りて、そんな浮氣の起るべき等なし、女の廻し氣ぞやと云ひきかせたり。處に舅入來り、嫁の涙ぐみ姑の打笑ひを不審かり、譯を尋ねていざとて我も覗き見たるに、をんなの映らばこそ、我に似たる老翁を現はれたる。さては汝ら何を勘違ひしてやある、隣の祖父の居るものをとて姑嫁の理由なきを舉げ笑ふ。

されども事實は言葉よりも有力なり。嫁が覗けば若き女見え、姑が覗けば老婆現はるゝに、猶彼等は一團の疑心氷釋せざりけり。

或日主人の長男十に足らぬ悪戯盛りが、鏡を見付出しをかしき物よとて覗き見たり。其の時恰も珠を片手に握り持ち居たるに、鏡の中にもおなじく悪戯盛りの腕白が珠を振擧げて見ゆるに、あはれ彼の兒我が珠をば奪ひ取りた

りとして聲を擧げて泣き出したり。傍にありたる隣りの若者、何故に泣くかと尋ねて、どれ何處に、何奴が汝の珠を奪へると覗き見れば、血氣盛りの若者映れり。あのれ此奴えい年をしながら小さい者苛めるとは極道者奴とて、拳を擧げて鏡を痛打したれば、鏡は落ちて烈しく温突床に當り、終に碎けて了ひたりとぞ。

(一) 鏡は元と日本にも無かりしものにて、支那より渡りしものなり。されば、上代は昔人水鏡にて、盆か鉢の如き平たき器に水を容れ、屈みて之を覗きて我が姿を映したるなり。今猶かみと屈むと同語なること之を明證す。朝鮮も矢張同様にて、上世は鏡なるものまだ有らず、之ありしは漢土より傳へしに始まる。されば、昔は人民皆屈みて水鏡に映せること我が日本と同じかりしならむ。其は今の韓語の鏡は「コウル」と云ひ、屈むの「コウル」と全く同語にして、日本語と全然相符合することを見て之を斷言すべし。かゝる日韓兩語の趣味多き契合は、兩國の文明及風俗を推究するに於て甚だ貴重なる材料なるを信ず。

### 仙女の羽衣

今は昔、江原道金剛山の麓に一人の樵者ありけり。日々の生活は聊かの薪柴の賣代なれば、いぶせき伏屋に起臥して、未だ妻さへ娶る能はず。同年輩の人々の結婚の式を見る毎に、我はいつかと思息したり。され共心固より素直にして、己がなりはひには優れていそしみ、風の吹かぬ日こそあれ、彼が斧の響の聞えぬ日はあらずと村人の噂さに上りけり。

或日例の如く伐木丁々と幽山に趣きを添へつゝありしに獵師に追はれしと見ゆる一匹の獐、慌て畏れて走り來つ、息も忙しく暫し匿くまへ玉へと乞へり。彼もいとど憐みて、伐りて積みたる薪の下に這ひ忍ばせ、知らぬ風情に鼻歌をかしく木を伐り居るに。やがて獵矢手に持ちたる屈強の一獵夫、木の根岩が根打ちふみて、實に山も見えずはやり立て、言葉急しく只今此處に一匹の獐を追ひやりたるに、汝は見ざりしやと尋ねれば、彼さなり、遂先程此

處を過ぎてかの谷を越えて走り去れり。方向は正に南と見届けたりと答ふれば。然るか、忝なしと更に宙を飛んで馳往けり。稍ありて樟積木の下より出来て再生の恩を謝して曰はく、君に報ゆるに絶代美婦を以てすべし。明日午後何時金剛山上の某池に到り玉へ、天女三人降り來りて浴すべし。其羽衣一襲を取りて之を隠せ。さらば天女昇天の能を失ひ終に君と同棲するを肯すべし。同棲數年男子を生まん。二男子産るとも猶羽衣を返し玉ふな。三男子生れて始めて之を返し與へ玉へ。さらば再び逃去るの憂なけんと言終りて林叢中に没し去れり。喜びある翌日をまつ一夜は、一時千秋の待遠しさ。例日より一層早く起き出で、流石に猶も職業は休まんとはせず。斧を荷ひて金剛山へと分登る。金剛山はこの國の靈山なり。峯巒峨々として青空にそより立ち。樹木鬱蒼として綠苔滑かなり。水は山嶺の靈泉より湧き流れて淙々として長へに妙音を絶たず。仙禽飛び鳴きて宛らに法を説くに似たり。されば、いつの頃よりか佛者は此に伽藍を建てしが、靈地靈僧を出して寺運愈々昌に、百五十房の院々峯を隔て谷を對して連綿として相續き。二六時中磬音梵唄雲霄

に亮響し。この岩窟彼處の洞に靜坐鍊眞の僧侶蹤を絶たず。實に朝鮮第一の靈場にして又東國一の絶景なり、金剛山を見ずして山水を説く勿れとは此國の俚諺なり。天女もこのをよしと見てか、山頂の靈池を相して浴場となし、日を定めて降り來て玉身を浸し香膚を洗ふ。樵夫は時刻前より藪裡に身を藏して窺ふに、果して翩遷たる羽衣を纏して三人の天女池畔に舞ひ降り、相顧みて曠然微笑し、羽衣を脱して樹梢に懸け、惜氣もなく香雪の膚を現はして、ざんぶと計り靈池に入り、嬉々として笑語して綾羅の手巾を以て玉身を磨す。神秀なる山頂の玲玉泉に、絶麗の三美女飽く迄香身を曝して浴する景色の美しきに、樵夫は暫し我を忘れて恍惚として打眺め、我も宛ら天國の一人となりし思ひをなせり。やがて思出して靜かに這出て、羽衣一襲を卸して之を抱いて叢裡に隠る。やがて浴みも果てたりとよぼしく、三人共に池を出て全身を風に晒らし、如何にも心地よげに嘯々笑語す。時刻過ぎたりとて樹梢に來りて羽衣を取り身に着けむとすれば一襲足らず。如何にかしつる確かに此處に同しく脱ぎて掛けつるものと、三人慌て、草の中梢の上を尋ぬれ共終

に見えず。あはれ我等が浴みせる中に風出て吹き去りしか、將た又白鶴啄みに去りしか。今は、や時刻も迫り來て歸るべくなりぬ。若し晚れば玉皇上帝に咎めを受けむ。羽衣を着けたる二人の天女は、君の悲みもさることなれ共我等の咎めを受けむも幸し。今迄探してなきものを今夜一夜探したりとて得らるゝへきかも測り難し。我等は一先づ先きに昇天して、この由上帝にさこえ上げ、又善き智恵を借り申さんとて、耻し氣なる一人をおきて羽衣を翻して昇り走りぬ。

残りし一人の天女は、耻しき悲しさに身を悶え、紅涙潜々として手巾も滴る斗りなり。やがて時分はよしと樵夫は徐々に叢を出て天女に近寄れば、天女は身も世もあらず打駭き、地にひれ伏して願くばこの儘見ずに過ぎ給へと手を擦り合せ願ふ。彼はされ共温乎として打笑み、天女と雖定まれる運命には従はずてはあるべからまし。君と我とは現し身に人天の差こそあれ。天の許せし妹脊の仲なるべし。今日測らずも君の羽衣我手に歸して君が通力を失ひしは、下界に在りて我に身を任せよとの天命ならん。いざ來ませ、幸ひ夕

方の人目暗く、君の姿も怪まれじ、君また人間の情を知り玉はさるべけれとも、世に人間許優しきはあらじとや。我は貧しくはあれども、母なく兄弟なく、君來まさらば一床を分ちて布き、一皿を分けて食ふ心安き境遇なり。やがて情愛も出て來なばその儘二人は友白髮。それとも猶も否み玉はば我はこの羽衣を家に持ち返へり、永久君には渡すまじ。天人の掟は知らねども、身に着る衣を失ひては、上帝其の儘に許さむや。早く心を定め玉へと、手を取らん許りに糊むれば、天女も仕方なきさの小舟の、曳く人のあるに任せてとほくと彼の家にぞ従ひ行きける。

天人なれとも女の道は知りたりけり。漸々馴れ行く儘に、厨の仕事より裁縫の業迄いそしめば、これや三國一の嫁女ぞと羨まぬ人はなかりけり。夫婦の仲も睦しく、其月よりはや身籠りて、生みおとしたるはかゞやく許りの玉童なり。天女を妻にしてより家の生業も都合よく、今はまづ小樂なる境涯となりたれば、夫婦も掌裡の珠と愛しみ育てたるに、幾年ならずして又ひとり童子をそ擧げたりける。天人も我が兒の愛は同じと見えて、兄よ弟よと日

夜に撫育し、兒も亦母よくと馴れ陸めば、日を経るに従ひ樵夫も安堵して、今はや再天國に返り去らん心も絶えしと見えたり。なまじ秘め藏せばこそ奥齒に物の狭まりしこちせらるれ。かの羽衣を出しやりて妻の心に任せ、或は破り棄てもし焼きもして、親しき夫婦母子の間を更に打ち解けさせばやと。かの獐の誠を破りて、一日羽衣を取り出し見せたるに、妻は手早く身にまとひ、兄を左の腋に、弟を右の腋に挟み、翩遷として昇天し了りぬ。取殘されし樵夫は、蹉跎して悔み悲み、さては妻は猶夫より天國を慕ひしか、かゝればこそ獐が童兒三人産む迄出しやるなど誠めしなれ。三人の童兒は腋に挟めず、何れをさき行くべくもあらざれば、母子の愛に牽れて昇天の心も絶たんなりけん。人間の淺ましき早まりたりけりな。明日より誰と共にか活き、誰と共にか語らんと。金剛山も見るにもうく、馴れし手斧も觸れたくもなく、幾月か流涙悲傷に暮らしたれとも、かくてあるべきにあらねば、又斧を何ひて山に登るに、寂寥たる山今日は更に寂寥、潺湲たる水も弔歌を奏するに似たり。茫然として草に坐して生別の哀苦を思ひ居たるに。一匹の獐走り

來つ、慰め顔に靡り寄りて、忘れ玉ひしか我は先年君に救はれし獐なり。此度君我が誠めを破りて天女を逃し玉ひしとき。されとも思慮の淺きは人間の常なり。今度丈は又助けまゐらせん、重ねては又手段あらじとて教ふる様。天女達は君に浴み場を知られたるよりは再びかの靈泉に降り來らず、それからは天國よりいと大なる釣瓶を下してかの靈泉を汲み上げ、天國にて浴場をしつらひて彼處にて浴みをなす。されば君明日幾時頃かしこに往き玉ひて釣瓶の下り來るを待ち、手早くその水を明けて其の中に坐し、引かれて天國に昇り玉へ、妻たりし天女も流石に永年の契り忘れたるにあらず。況して二童は日夜父戀しくと探すめるを君往かば何てつれなかるべきと。樵夫は之を聞きて日蝕了りて陽光泉々たるを見しが如く、歡天喜地し、獐に深謝し、翌日朝早く結束して山巔に登り往き、時分を待てるに、果して數斗を容るべき大釣瓶スルくと青天より卸り來て池心にザンブと沈み。滿々と水を斟み又上らんとす。用意したる彼は池中に飛入り、手早く水を捨て、釣瓶の中に坐したれば、天人と雖知るべき理なく、徐々と引揚げ今はや青空を貫いて



天門に入り、此に首尾よく夫婦親子の再會を遂げ、終に樵夫も天人の群に入りしとぞ。

(一)日本に天女の羽衣を奪はれし傳説は、三保の松原と天の橋立に傳はれり。朝鮮も金剛山以外に又他處にも傳はれるか如し。され共、兩者を比較するに。日本のは何れも海邊にして海を以て光景の主となし。朝鮮のは山中にして山を以て背景となせり。この特徴は大に注意すべき點にして、日本が如何に上古以來海に親しめる國なるか、朝鮮が大陸續きにして海よりも寧ろ山を以て靈地となし好風景となしたるかを證據立つべき一資料なり。且又日本の傳説何れも皆淡泊にして閑雅、濃味に乏しく、天女を妻とし天女を追ひて昇天したるの如きを傳へず。是亦朝鮮人と日本人との國民性の相違をも窺ふを得べきか。

富貴有命、榮達有運

今は昔、此の國の近代の聖君と云はれたる成宗王、一夜微服して京城々内を巡視し玉ひけり。巡りくつて夜も既に深更に及ひぬる頃、南山々下に來玉へるに、萬籟寂として夜氣陰森たる中に、數間の茅屋より朗々として讀書の聲聞こえたり。王は訝しみ玉ひて、この夜深きに誰家の讀書子か猶呶呶の聲をやめざるかとて、從者と共に近き玉ひて扉ほとくと叩き玉へば、讀書子駭然として卷を置きて、忙しく門を開き、誰なれば何用ありてかく深夜に訪れ玉ふかと問ふに。王温顔に怪しみ玉ふな、我今宵ゆくりなく此處を過ぎたるにかゝる深夜に猶朗々たる讀書の聲をきき、いたくゆかしくもひ敢て高面を拜して貴名を知りたしとて驚かしたりと云ひ。ひかれて房に通じ、相對坐して其人を見るに、五十に近き半白の老儒なり。何を讀み玉ふかと問へば周易なり。我も長くこの書を見て淺學まだ解し難き節々あり、今宵拜顔したるを好き折に問ひまつらばやとて、王は其の中の難義を問ひ試むるに、應對流るゝが如く、幽玄を抉剔して、精妙を發揮し、實にも大儒と云ふの外なし。王頻りに感嘆し、老儒の學問誠に高遠、よく我が年來の疑義を氷釋せしめ玉

へり。猶文稿もあらば拜見したしとて老儒の出す十數篇を讀むに、字々皆金玉の聲あり、光炎白虹の如し。王頻りに膝を打ちて感嘆の聲をたゞず。かゝる名家は當代我國に幾人と指を屈するに足らざらん。さるにても老儒は何故に科擧に應し給はざると問へば、老儒は赧然として生何故か薄運にして二十歳より應試したれ共、常に屈して未だ上榜の榮を得ず。齡積みて今年正に五十、餘命幾くもあらざれば終に及第せずして没するかも知らず。されども研學は學者の務めなれば猶かくも研勵するなりと云ふ。王は我この國に君臨して科擧を行て人材を探らんとし、二十年未だこの人を抜き得ず。薄徳なりき。不明なりきとて心密に悲しみつゝ。さあらぬ體にて、され共明後日又科擧ありといふこと既にきかれしやといふに、老儒は不審の眉を顰め、明後日科擧ありとはいまだきかず。果してあらは某も應ぜんと云ふ。王は十數篇の文稿中殊に心行きたる一篇を熟覽して其の題を記憶し、丁寧に挨拶して出行けり。出行きて、從者に命じて、一升の米と一斤の肉とを壻を越えて投げ入らしめらる。

還宮後、俄に明日臨時科擧を施行すと出令し、文題は先夜老儒の文稿の最秀篇の題を取り、王は只管かの老儒の答案をまつ。やがて答案山の如く積りたる中より試官はかの文を擇り出して王に奉る。王讀み玉ふに疑ひもなく先夜の文なれば御批して第一壯元と定め。即日揭榜し、文の主を呼入れたるに、こはいかに、似ても付かぬ少年なり。王大に駭かれ、汝の答案は汝の作かと問ひたるに、少年は否我が老師の文稿中より抜いて書き取れるなりと答ふれば、さらば老師は何故に親ら出場せざるやと又問はれしに、老師は昨夜意外に良米良肉を多食し腹痛を起し、今日は遺憾ながら出場出來ず、已ひなく小臣をして代りて其の私草を懷にして入場せしめたるなりと答へたり。王も之を聞きて、默然たりしが、兎も角少年を退かしめ、一面人を走らして老儒の起居を探らしめしに、哀れ老儒は飢腸に滋味を過食し下痢を起し、其日果なくなりたりとぞ。

これも成宗の事なり。一夜々深きに徹行して某街を過ぎたるに一女子柴門

押開きて出来れば、南面の一樹上に、鶺鴒の聲きこゆ。彼の女子あたりを見まはして人氣なきを見定め、同じく鶺鴒の聲をまねて木枝一本を口に含みて樹に上るに、樹上にも鶺鴒ありて頻りに啼きつゝ、かの枝を受取りたり。成王頗る怪しみ玉ひて、この夜深きに何の物好きぞ仔細ぞあらんと打ちしはふきつと柴門に近き玉ふに。かの女子人ありと知りて、狼狽てふためき下り來り、飛ぶが如くに門内に逃げ込み、續いて一人の男子も忙はしく樹上より滑りおりて手早く柴門を閉ぢなんとす。成王靜に門に近き言葉穩かにかの主人に何事をかなし玉へると尋ねれば。主人は夜目にも知るく恥ぢて答ふらく。某少年より科擧に應ずること數を知らず。今年既に五十に達して猶及第せず。俗諺に鶺鴒家の南に巢へば吉事ありといふことあれば、十數年前に正南に當りて一樹を植え、鶺鴒や來居るを待つ程に樹は成長して蔭茂れども今猶鶺鴒來り巢はず。今日も老妻と熟々身の寒運を物語りつゝ、今宵夜更けて人定まりたる後、二人して鶺鴒の爲ねして南樹に巢を作りて戯れむと談合し、今まさに始めたるに恥しくも客に見られたるなり。これも拙運の老夫妻の果なき憾事と思ひ玉ひて他

人にな告げ玉ひそとていと恥し氣に物語れり。王は熟々聴き終はりて我は通り客。何てう人に告げやすべき。又人の運は一刻の間にも轉ずるものなり。けふ迄寒運なりしとも明日は忽ち發祥せぬとも限らじ。世の中は正直なる人こそ終に天恵も下るべけれ。先生も猶怠らず勉學し給へとて還宮し玉ひ。翌日臨時科擧を仰せ出され、人鶺鴒の題を出す。されば數多の應試秀才も經史百家の書中に未だ見ざりし奇題なれば、皆々呆然として想を着くべき所なし。獨りかの老秀才のみは密かに思ひ中ることあり。咄嗟の間に答ひを草して一天に試官に呈す。王之を御覽してこれこそ題意に適中せり、古今の才子なりとて即時御批して壯元及第となしたりとぞ。

(一)科擧……科擧は即ち文官試験にして、この國の甲午以前迄繼續して尙も青雲の志を懐ける青年は、必ず一度これを通過すべき關門なり。今其の狀況を畧説せん。

科擧には初試、進士、及び及第の三種あり。初試は即ち第一試問にして豫備試験といふを得べし。進士は文官たる資格は得らるれども猶低く、

及第試験に合格せる者こそ始めて龍門に登るを得るなれ。科擧を行ふは定期なしと雖、子、午、卯、酉の四年は之を式年と稱して、必ず朝鮮八道に於て初試の科擧を行ふを法とす。監試即ち是れなり。この時八道中三南即慶尙全羅忠清道には特に京城より試験官を派して考試せしむ。何となれば三南は文化の地と稱せられ、特に慶尙は大に開け、半國の人才此に在りと云はるればなり。初試にも豫め及第者の人員を各道に就き定めおきて、其の數に超ゆる能はず。式年の翌年を會試と稱し、初試の合格者を集めて京城に於て考試し、其の合格者を進士と呼稱す。會試の合格者數は常に二百人とす。二百人の進士は其の内の幸運者は直ちに官職を得るあれ共、多くは京城の大學校たる成均館に入學するの資格を與へられて、笈を負ふて入京し、更に成均館教授に就きて勉學す。勉學中に更に及第試験に應試して之に合格して官吏たるを常とす。成均館は定學年なし、幾年ともなく此に在學し食は皆官給なれば、所謂書生若くは處士として、肆に横議し、國王も亦之を布衣宰相として優遇し屢々臨駕し

て酒饌を賜ふことあり。

子、午、卯、酉、式年の考試は、四年毎に一度ある計算なるが、其外國王の都合にて臨時行ふ科擧も頗る多し。即ち庭試あり、謁聖あり、應製あり、増廣あり、皆國王が親しく考試せしむるものにして、就中謁聖は國王孔聖廟に謁したる時行ふ所の科擧なり。以上庭試、謁聖、應製、増廣、四科擧は初試、進士、及第、三試共皆ありて一回に及第迄應試するを得るなり。され共何れも合格者數を豫定して之を超ゆること能はざらしめ、豫め一般に今回の考試は初試何人、進士何人、及第何人を探ると揭示す。初試進士の數は必ずしも少數に非るも、及第に至りては實に極少にして、或は三人或は二人、或は單一人なることあり。されば科擧及第の榮を得んことは至難中の難事にして、大抵の讀書人は進士迄を以て満足し、冷官を得て終身す。殊に邊鄙に至りては、初試に合格せる者すら稀に、初試と云へば嚴然たる田舎學者たりき。

次に科擧の實況を記述せんに、東海禮儀國、東海文明國と自負する朝鮮

の事なれば、都鄙を擧げて少し家計の裕なる家は子弟に讀書を課し必ず科擧に應せしむ。されば挽近京城に科擧ある時は、八道の續書子湖水の如く押寄來り、其の數幾萬人といふことを知らず。之を廣場に容れて。其の前面には柵を施し、一段高處に考試官は座し、下に役丁ありて答案を拾ひ集むる役をなす、答案成れば我先にと之れを柵を超えて試官前の卓を望みて投ず。使役之を拾ひて試官の前の卓上に紙を延べ重ぬれば、試官は之に其の接手の順序に依て一天二天三天と十迄、壹地二地三地と十迄、一玄二玄三玄と十迄、一黄二黄三黄と十迄、以下千字文の順序に符號を書く。一天の答案は假令其の文少しく劣れりとも寛待して及第せしむ。されば數萬の受験者潮の如く我勝に位置の善き處を占領せんとして、相競争すれば、使丁は棒を手にして之を防ぐ。雜踏は愈々烈しく、毎科擧死者數名を出すを常とすとぞ。され共此にこの國の古昔の人心敦厚なりしを偲ぶべきあり。斯くの如く數萬の受験者の答案なれば、少數の試官は三面六臂なりとも各々答案を一々精査すること能はざるは

自然の勢にして、受験者に運不運の生すべきは勿論なり。然るに、初め朝鮮に科擧なる制度を始めし時の記録によれば、當時受験者は僅かに三十人なりしとぞ。蓋し人心猶敦厚にして普通の讀書子は猶應試の資格なしと自謙し、非常に自信ある學者にして始めて應試したるなり。其後人心漸く澆漓に赴き、終に近代に至りては都鄙擧げて科擧熱に浮かされ、猫も杓子も一度は之に應ずる弊風を生じ、甚しきは科擧受負人なるものを生じて他人の科擧を受負ひ、同伴入場して題に應じて文章を製し、受験者本人の名にして之を投ず、されば年十五にして既に科擧に應ずるものあり。幸運にして及第するも他人の力なれば珍らしとせず。此に數萬人入場の奇觀を見るに至れるなり。人心の澆漓は勿論試官にも傳染し、彼等に眞に秀才を擇取せんの誠意なく、無意識に山の如き堆案中より十葉二十葉大凡豫定及第者數を標準として拔出し、之を査閲し、少しく意に叶へば之を合格となす。漸く末世に降りては京城の有勢なる兩班は科擧の正直に應すべきに非るを悟れる結果、相通議して組合ひを組織し。各

自順次に我が子弟を及第者に選定し、之を試官にも通知し、殆んど唯形式的に應試せしめ即時合格せしむ。是れ人心の腐敗と法の罪なりと云はざるべからず。

予の知れる老學者は曰く、我が及第せる科擧は數萬人應試者中に唯一人の及第者を出せるのみなりきと、され共、彼も亦少論の大兩班にして殆ど少論黨の牛耳を執れる家柄の子なれば、豫め組合の決議を以て合格者に豫定されしに非るを知らんや。且つ又彼は由來詩文の速製を以て合格者、一度應試して及第せる後、屢々他人の囑に應じて替玉となりて入塲し、或は一時に四五人の爲に答案を草せし事ありきとぞ。代製は勿論報酬あり。報酬に定額なけれ共、要するに門閥卑しき者程報酬多かる理なり。常漢にして初試進士の稱號欲しさに替玉を以て受験せんとすれば勢ひ數百圓の報酬を出さざるべからずとぞ、國王は其の意の動く儘に臨時科擧を行ふを得る權利あり。臨時科擧の頻繁なること、甚しきは數月に一回なることもあり。殊に先帝は何故か特に科擧を好まれ毎月殆んど

科擧なきことなかりしとぞ。科擧は京城の大利にして地方の大損なり。科擧ありと聞けば、地方の讀書子は實に千里を遠しとせず驢に鞭ち一僕を隨ひ入京し、東小門の附近を中心として京城各部に投宿す。其の數毎回數萬人あり。彼等は必ず多少の腰絡を齎し來るべければ、爲に京城の濕ふと豈に數萬圓のみならむや。京城の商人のこれを得意として生計するもの數百戸、殊に東小門附近即成均館近傍の人家は盡く應擧者の客舎にして、東京の本郷神田と彷彿たりきとぞ。然るに、廢科擧の後この附近の人家皆生業を失ひ、擧家他に移轉し、今は東小門一帶は松林の空翠と點在せる貧家の寒烟とを見るのみとなれり。先皇帝或は京城を豊潤ならしむるの經論ありて斯く科擧を屢々せるや、若くは多人數群集の壯觀を喜びてしかせるや、之を研究するに實は陛下の眞意は敵本主義にして科擧の度毎に初試、進士、及第を賣りたるなり。されば正直なる田舎の讀書子等は百里笈を負うて功名を夢みて入京し、頭腦を絞りて應試すれ共、本當の合格者は既に早く手を内官其他の科擧仲買者の手を通して既

に契約済となり。是等無数の正直者の差出す答案は試官の手にだに觸れられず、集め來りて官中内官承旨等の私用の布古紙となり了る。中には又この答案を市人に賣る宮奴さへあり。紙質厚く強ければ一葉何厘に買ふものありて、温突紙の下張壁襖の心に張る。實に三級波高魚化龍、癡人猶野塘水なり。是等科擧の相場は時に依り高低あれ共、要するに門閥ある兩班買はんとすれば廉に、平民には太貴なり。さらば是を買ひたる者に何の收益があると云へば、皆無なり。昔とは違ひ及第なりとて之を任官せしむることなく、進士初試固より然り。たゞ得る所は及第、進士、初試の稱號のみ。之を門戸を得ると稱す。されば久しき前より既に科擧の無用を論じて之を廢止せよと主張する人ありしが、日本支那の干涉漸々烈しきに及びて、終に廢止せられたり。科擧廢止されたれ共實官益盛なれば官場の腐敗は依然たり。

以上は文科の科擧なるが、武科の科擧も其の弊全く之に同じ。武科擧には初めには劍、棒、射、御、兵書等の科目ありしが、近代に至りては唯

射一科のみを試むるととなり。國王親臨して試むるに、射場は距離三百歩とし、太抵の武者の射中て得べきにあらず。兩班の子弟は如何にして之に合格するかと云ふに、預め射先生を備ひて愈々我が射るべき番となれば代りて射に當らしむ。之を代射といふ。國王は遠きに坐すれば誰か果して射るか、顔容を辨すべきにあらず。代射せしめて中り、此に及第し恬として武職に就く。射先生の名匠は京城に多きものにあざれば、一人にして數多兩班の代射を勤めて平然たれ共、流石に武科に賣買といふを聞かず。蓋し射は目に直接見ゆるものなれば、中らざるを中れりとは欺くべからざる爲ならん。

兎に角、かく幾人かの及第者を出す時は、試験後三日或は二日或は即日之を掲榜して發表す。第一位を壯元といふ支那の狀元に當る。及第者は之に紅牌を授け又國王より親しく延見して之に花を賜ふ。花は細竹に紅花を點貼せるものにして、冠後に挿して垂れて冠前に到り、歩に従て柔かに上下動す。賜花を挿して恩を謝すれば、更に樂工を賜ひ、樂工等及

第者を前後に擁して雅樂を吹奏して而して街衢に出て、三日間其知人親族中を廻る、之を游街といふ。游街終りて宮内府に出頭して辭令を受け、直に清官に任ぜらる。官に堂上堂下あり。日本の上達部殿上人に似たり。堂上は正三品より以上を云ひ。堂下は從三品より九品迄を云ふ。堂上諸官中及第生の即時叙任せらるゝは參議。承旨、太司成、吏議等あり。堂下官には注書、待教、翰林、校理、直圖等あり。特に壯元及第者は屢々暗行御史に叙せらる。暗行御史とは國王直派の視政官にして、馬牌を賜はり微服して地方政治を視察し、監司及郡守の治績を暗察するなり。即時郡守を免官する權利あり、蓋し重官なり。

### 人虎の争ひ

今は昔、人心猶素朴にして、人獸の區別も今の如く揭焉ならず、互に言語を通し合ひし時の事なり。一人の人間野原を行けるに、陷窀に落ちたる一疋

の虎を見ぬ。虎はもし〜と呼止めて我測らずも陷窀に落ちて身躰自在を失ひ命且夕に追まれり。あはれ一生の願ひなれば拯ひ上げ玉はれと云ひたれば、人も流石に憐みて、生を惜み死を避けんと欲するは生物の情なりとて、辛苦して彼を救ひ出しぬ。然るに虎は救ひ上げらるゝや否や獸王の眼光爛々として輝かし、朱を盛る盆の如き巨口を開き、あはや恩人をば一嚙に食ひ殺さんとす。人は神魂身を離れ、如何なれば命の親なるこの我を却りて食はんとするかと反問すれば、虎は呵々哄笑し、恩は恩、食は食なり。我陷窀に落ちてより早や二日、餓腹暈時も堪ゆべからず。今汝好餌として我が前に在り、いかて饕餮を禁ぜらるべき。かくても言葉ありやと云ふ。其時人間は我等二人の争ひは我等二人にては決するを得じ。彼處に見ゆる松の木に何れが正しきか裁判を仰かんとて、即ち松公を呼ひて二者の曲直を問ふに。松公曰く、狡猾なり汝人間。汝の爲す所を人の爲すをは何とて反對するぞ。見よ、人間の我等松に對する所を。我等は尺に足らぬ小さき時より汝等に取りては恩こそあれ害とは一つもなさず。風に散る葉や雨に折れたる小枝は汝等の温燠の



焚き料なり。

一四

まして漸く生長して松露松茸を生ずるに至れば、食膳の珍味として賞玩するにあらずや。然るに我等が幾十年の風露に堪へて終に享々たる大木となれば、忽ち斧を揮ふて伐り倒して我等の生命を奪ふなり。かくても汝は恩に報するに仇を以てせずといふか。虎君のいふ所は誠に至當の理なり。實に恩は恩なり、食は食なり。餓えたらば何の遠慮の入るべきといふ。虎は百萬の味方より嬉しく、言葉はあるまじいさ食はむとす。時に遇々通り懸りし黄牛あり。人間思ふやう、牛は流石に家畜と云はるれば、人間に同情厚かるべしとて、やよやと呼止め、云々の言ひ争ひなり。君は如何に裁判するかと問ひたるに。牛も呵々と大笑し。問ふ迄のとなしてなし。人間の我等を遇することを思ひ見よ。抑々母の乳を離れざるより使ひまはし、堪へらるゝ丈の重荷を負はせ、剩さへ鞭さへ當て、春は耕し、夏は耘らせ、秋は取入を荷はせ、冬も薪に鞍擦れ痛く、年中隙なくこき使ひ、鬪も積り力も盡きんとすれば、情もあら太刀にて咽喉掻き斬りて殺して肉を食ふにあらすや。人間の爲す所は皆斯くの如し。虎公の仰せは至極の妙理なり。汝に出てたるも

のは汝に返るものなるぞといと痛切に裁判したり。人間もはや絶體絶命あはや虎腹を肥さんかとせし時、たま／＼一匹の白狐過きんとす、狐に何の同情あらんと思ひながら、呼止めて公平なる裁判を乞ひたるに、白狐は眉打擧め。其は近頃訝しき話なり。一體如何なる事の成行なりしか、始めを知らねば裁判も出来ず。我が眼前にて再び元の如く虎公は奔に、人間は其の上に立ちて見玉へと云へば。虎は勿論我が勝利と信すれば、言葉の儘に再び奔に下りて身を屈め、人は奔上に立ちて奔中を見下したり。その時狐快然として曰はく、かゝれば別に苦状は起るまじ、なまじ虎を拯上げたればこそ六かしき裁判も生じたれ、須らく太平なる其の始めに返るべし。いざ人間君早や往き過ぎ玉はずやと促し立て、去りにけり。

(一) 朝鮮は流石に虎の本場丈ありて、虎の話の多きこと百を以て數ふべし。是等は皆如何に虎の恐ろしきかを表はせるものなり。特に俗説によれば、朝鮮の森林の伐盡されたるは一原因は虎害に在りとか、即ち森林茂れば自然に虎來りて此に出没し、人畜を殺傷す。されば官令を以て可成森林

を伐り拂ふことを獎勵し、虎をして其の巢窟を失はしめたりといふなり、或は又曰く、否らず、人民森林の蔚茂たるを私有すれば、國王は之を聞きて其は屈強の墓所なり、功臣某兩班某の墓所に取上げんとて無理に献上せしめらる。この馬鹿くしさに人民は逸早く伐り盡したるものにして、所謂苛政虎より猛なるの原因にて伐拂はれたるなりといふ説もあり。兎に角今より數年前迄は、京城の東門外は年に二三回猛虎の吼聲をきき、今なほ地方の虎害なるもの、新聞に掲げらるること一冬に四五回に下らず、されば熟々この國の虎に關する話を研究するに、始は唯單に禽獸として、終に虎を人格化し、更に進みて靈格化し神格化して、神變不思議の靈能を有して勿論人語は自在にし、唯だ恐ろしきのみならず、又崇拜すへき神物なりとなすに至れるが如し。其實證は更に以下に記す物語數則に就て見るべし。

この對虎觀念の發展は頗る日本の對蛇觀念と類似したる點あり。 腦氣作

ら太古の昔、この國には虎害實に甚しく、日本には蛇害頗る劇しかりしを告ぐるものなりと推測し得べきが如し。

## 神虎

徐花潭先生敬徳は、仁宗朝の大儒にして、經史百家は勿論、老佛陰陽占卜の末に至る迄究通せずといふことなし。花潭に隱居して帷を下して書生を教ふ、花潭の號ある所以なり。一日例の如く書生に講義してありけるに、忽ち形容枯稿せる一老僧入り來りて、深々として、先生を拜して行けり。先生之を見送りて獨語の如く、憫むべし怜むべしといふに、弟子共皆不審がりて何をか憐と宣ふかと問へば、先生曰ふ様、先刻の老僧はこれ某山の神虎なり。明日婿を迎へんとする某村の某女を喰はんとて、今日態々來りて我に告ぐるなり。さるにても定まれる運とは云へ憐むべしと長太息をなす。時に坐中の一青年、精悍の氣眉宇に漲れるか進み出て、云ひけるは、先生既に未然に災

殃を知り玉へば、又之を避くるの法も知り玉ふべし、いかて救はせ玉はぬと。先生莞爾として曰ふ、さればなり、之を救ふの法誠に在り。され共尋常の人々に任ずべからずと。弟子更にいふ様、如何なることにも一度仰せ見玉へと云へば、實は一卷の佛經を誦すれば足れり。如何なる恐しき事を見るときも心に少しも恐怖を懐かず一字も誤らず讀み了りたらばこの害必ず避くべし。但し若し讀誤りても讀經者には決して害なしとて、傍の書架より一卷の經文を取出したり。弟子憤然として誓ひいふ様、不肖なれども某こそ敢てこの任に膺り申さん、たとひ霹靂碎け、大山崩るゝことありとも、必ず無事に一卷を讀み了らんとて先生の許しを得、快馬に鞭ちて某村某氏の許に走りけり。某村の富民某氏許にては、今宵を秘藏娘の婿入りとて、婿の家より送り來る數々の贈物臺を運ねて送り込み出入の人数夥し。某生は之にも構はず馬を乗り進めて大門に至り、吃緊大急の用事あればとて強いて主人に面會しつ、今宵は君が家に大厄あり、預防せずは愛娘必ず非命に死せん。之を防ぐ法は我獨り知れり。いかて欺かるゝと思ひて我がいふ如くなし玉はずやと云ひ出

したるに、主人は青天の霹靂よりも打驚き、始は瘋癲者のたわ言なりとて取合はんとせざりしが。某生が誠心表に現はして頑として言ひ張るに根負けして、遂に濫々ながら承引せり。某生は主人に教へて、娘を一室に監禁して戸に錠を下し、傍に屈強の婢四五人附添はせ、如何なることあるも今夜一夜は娘を室外に出さしむなと命じ、己は明燭燈々たる大廣間に端坐してかの經を讀む。半夜に至り忽然萬雷一時に落來りし如き音して、一大老虎牆を躍超えて庭上に飛下り、あはや娘の室を狙うて躍入せんとして、かの讀經の聲をさいて力抜けて庭前に踞蹠す。されは家中皆々色を失ひ氣を落し聲を出すものなし。獨り某生は泰然として朗々と誦經す。須臾にして復た老虎は猛吼一番して躍入らんとするに、室内なる娘はムックと立上り支へる婢共を押し倒して室を破りて走り出て、虎の許に往かんとす。婢共は死力を出して之を止む。暫くにして復た虎は勇氣を奮つて躍進せんとし、誦經を聞いて能はず、娘も其の度毎に狂氣の如く躍り騒きて虎に近かんとす。其の内に虎は大號一番躍りて娘の室の窓の木に噛付きぬ。され共終に破り入ること能はず。斯かるこ

と三度。其の内佛經一卷讀み了らんとし、夜も既に東方白みたれば、虎は忽如として消えて行くへを知らず。娘は氣を失ひて倒れて息奄々たり。急き水を吹き懸けて甦らすれば、宛ら夢の覺めたる如し。主人を始め一家の者共は某生の前に來り額付きて神とも佛とも云ひ様なき大恩人なりとて數百金を出して謝意を表せるに、某生は手をだに觸れず、人命をさへ救へば任終れりと復た馬に鞭ちて還去れり。

歸來れば先生は莞爾として能くこそ大任を果しつる大出來なりき。され共、汝は先夜三處讀誤りしよなと云へば、某生は否決してさることなしといふを、いな／＼先刻又彼の老僧來りて我に活人の恩を謝して往けるに、昨夜は三處誤讀ありしかば、室の窓木を三度噛みて讎したりと語れりと云はれしかば、然らばとて經文取出して見たるに果して三ヶ處讀み誤れりしとぞ。

### 長花紅蓮傳

今は昔、平安道鐵山郡に、土班妻無用なるものありけり。妻は同じく兩班の家柄なる姜氏とて、才貌兼備の良夫人にて、充麗いと睦しくして二人の娘さへ擧けたり姉を長花と名け妹を紅蓮と名く共に母に似て容貌才操も既に穂に出て行末の美しさ賢しさ思ひやられたり。されば夫婦も掌中の珠と愛しみて、いかて行く／＼は門閥正しく才藻秀てたる人に嫁せしめて祖父祖母と云はれたしと、心を籠めて教養したりけり。

人世の無常なる楳花の朝に開いて夕に凋むにも似たり。妻なる姜氏は假初の病やう／＼重り行きて、長花の六ッ紅蓮の四ッの春を迎へたる年悲傷する夫娘を後にして歸らぬ旅に上りぬ。されば姜氏もまだ此世に残る思ひ多くして、臨終の際にも熟々と夫無用に遺言して、我が亡き後は二人の娘を二倍に愛して母亡き娘の愛きを見せ給ふな。親心なるべけれ共、二人とも才貌共に人には劣らず生れしが如し。願くば香草をして秋霜に枯れしむるの慘を見せしめ玉ふ勿れ。人間の生は死の初なれば死に行く我は露惜しからねど、何となく二人の身の上氣遣はしく、冥途の障りになるが如し。くれ／＼も我が夫

に托し參らせたるぞと紅淚蒼顔に瀧りて其の儘命根絶えたり。

されは妻無用も十年同棲の妻を失ひしより、殘る齒を其人とも見て、日夜舊にいやまし愛育するに、二人とも孝心天性に出で、亡き母を慕ふと共に在ます父に孝事して、心根の優しきには無用も人知れず涙を絞り居たり。され共主婦なき家は屋根破れしか如し、如何に柱礎のみ堅固なりとも風雨の漏るを防ぐべからず。蜜なき花の如し、如何に色のみ麗しかりとも蜂蝶は寄り來らず。無用も二年三年は娘の愛らしさに忍ひたれ共。不便は殆んど堪ゆべからず。又未だ男兒は一人も在らざれば祖宗の祀を斷つての虞もあり。此に長花十の春良媒ありておなじく兩班の家より許氏を迎へて後妻となしたり。

許氏は容貌既に甚しく姜氏に劣り、才操も亦下り、心頗る奸邪なりき。されど、流石に初の中は爪を藏せる鶯鷹の、長花紅蓮の二女を我子の如く慈しみて娘よくと養育せしかば、二女も固より幼兒の人の心の表裏を知らねば、母よくと馴れ睦みて再びこの家に春ぞ歸り來りける。然るに、程なく許氏は身重りて一男を擧げ、緘いて又一男、又一男と三男兒を擧げたるに及び。

やうく心根荒々しくなり行き、時折は眼に角立て、さ迄にあらぬ事に呵り責め、物指さへも舞ふことあり。されば二女も心の中にやうく一團の雲霧生じ、お人よしの無用も溜息つくことありけり。され共、無用は誠に無用の人間にて、許氏に全く壓倒され、櫛下の老鷲の如く家權盡く妻に歸し、徒らに胸に萬石の愁を湛えて一言も妻に不足を云はず。あはれ漸々春風秋風に變りて、香草將に吹き凋まされんとす。さるにても二女は踏まれし麥が却りて秀つるが如く、容顏の益々麗しうなること宛ら春花秋月の如く、其の名さへもいつか遠近に隠れなく、はや姉は二八の春を迎へたれば、傳手を求めて嫁に迎へまほしと申込むもの前後相望む有様なり。許氏は愈々嫉ましく、殊に我が生める長男長劍といふは、生來心鈍く、親の目にも人並外れの阿呆なれば、一層繼兒の怜しきが悪きなりけり。されば是上なき良縁と思はるゝものをも皆かにかくと断らしめつ。この國にての女の盛りもはや過ぎて二十の春を迎ふるに至らしめたり。

一日無用外より歸り來れるに、許氏は憤れる顔色凄まじく、あはれ我夫よ、

日頃長花の行ひ怪しと思ひつるに、結婚の延ぶるに堪へ兼ねてや、仇し男を拵えて、これ見玉へ、竊かに墮胎ぞしつる。今彼女の寢床より胎兒を見付け出したりとて、それらしきものを示すに、見れば實にも然るが如し。お人よしの無用は忽ち怒り罵りて己れ鬼兒奴、兩班の家名を傷けたりな、さるにても如何なる悪魔が魅入りしかと、無念の形相烈しきを見て。許氏は涙を流しつゝ、既に獸行を敢てしたるものは子にして子にあらず怒し憐みては愈家の名を墜すことゝならん。この事世間に知れぬ内密かに亡くするの外あるまじとて、強言すれば。無用は心弱くも終に之を許しぬ。其夜許氏は長剣を呼びて事細々と云ひ含めつ。夜既に深きに俄かに長花に長剣と共に先母の家に往き來れと嚴命して馬をばはや牽き入れさせたり。長花は時ならぬ外出を命せられ訝かしさ限りなけれど、父母の命は拒む能はず。轟く胸を押鎮め、必ず凶事あらんと信じつゝ、妹紅蓮に其となく永別の言葉を陳べ、女としては婦徳を守り父母に孝養を盡せ、殊に父君は此頃は年も漸く老いさせて頼り少く見ゆれば坏物語り、手を握りて涙を墜し、やがて馬に跨りて長剣に導かれて

何處とも知らず牽かれ行く。固より門外一步を知らぬ身の、長剣一人を頼みにせるに、道は既に一二里を來て道傍に漫々たる池あり。長剣は馬を留めて長花を下ろし、冷かなる言葉以て、今宵汝を此處に連れ出したるは外家へ往かむ爲にあらず。我が母汝の生存へるを嫌ひ玉ひ、今日大けき鼠の皮を剥いて布に包み、之を汝の寢具中におきて汝が墮胎せしと作り、父を欺きて汝を今夜此處に殺すに決せるなり。是迄の命と諦らめて自らこの深き池中に投して死せよと云ひたれば。長花は今更ながら留潰れて、熱淚滂沱として瀧り下ち。さては我が母は何故にかくも我をば悪み玉ふや。我は實母に別れ參らせて此に十四年、まだ一度も不孝の行ありしを覺えず。又兩班の家に生れし身の婦徳を以て女子第一となすは胎教を受けて之を生知せり。殺すは親の命なりと云へば自ら火にも投せむ水にも入らん。されどあらぬ悪名を負せられて父を欺きまつらんこと死すよりも猶苦し。され共父母の命と云へば我は死ぬべし。され共長剣よ。汝も兄弟の情はあらん。願ふは明日一日丈延ばしてくれ。我明日外家に往きて従兄弟に面會して其となく妹紅蓮の身上を托し、

又母の墓に詣て切めて靈魂になりともこの事を訴へて不孝の兒たる罪を謝せん。やよや長剣、汝はこの儘歸へりて長花は既に死せりと母君に告げくれずや。我は決して死を逃れんとの意にあらず。我死を逃るれば母君の悪名を世に表はし、又父君の命に背く不孝の兒となる。必ず明日一口を限りにて我はこの水に投して死すべきにと草に伏して哀願す。實に無情の草木だにも感動すべきに、性來鈍なる長剣は頑として動かず。何てう明日一口を延すべき。我が母は今夜死せと云はれたり、早や投ぜよと促すのみなれば。長花は今力なく、晏天に號泣し、妹を泣き、父を泣き、裳を褰げて面を蔽ひ、一步一步池の中深く歩み行く。哭聲凄冷夜氣陰森、鬼神も爲に泣かんとす。やがて水愈々深くなりてはや姿は没し了れり。忽ち青空怪風起りて何處からともなく猛虎風を負ひて走り來り、冷然として眺め居たる長剣を大喝して、己れ人非人、天道を知らぬか、人理を知らぬかとて忽ち之を倒して其の片耳と片脚を噛み切りて、又復た忽然として姿を没せり。長剣は其の儘人事不省に横はり、長花を騎せ來りたる馬は猛虎に駭いて逸走して我が家に向て去れり。

其の夜許氏は流石に心騒ぎて寝られず。鈍き我が子がよくしつるかと思ふ程に、夜既に深きにまだ歸來らず、苦待するに、馬蹄憂々として來り門に立ちて嘶くをき、急ぎ燭を持ちて出見れば、我家の馬にて全身汗流れて瀧の如し。而かも長剣は在らず。さては我が兒の上に變事ぞ起れるとて、僕等を呼起し、馬蹄の迹を辿り行けば、森漫たる池邊に出て、此に長剣は片耳片脚を失うて倒れ、又池心よりは悲哀なる聲聞え宛ら萬斛の悲冤を訴ふるが如し。許氏は畧ぼ事情を推察し、虎出て、我が兒を噛みしとほし、急ぎ携へて歸り治療せんとして、僕に負せ連れ歸り、藥を塗り藥を服せしむるに、翌日はやうく人氣付きありしこと共もの語りたり、

無用は一夜不意に長花の亡くなりしよりさては妻が殺ししものと思ひ、熟々考ふるに、かの娘に汚徳の事あるべき苦なし。或は妻の毒計かと疑ひ出し、さるにても不幸なりし娘かな。幼くして母に分れ青春に及びて婚期を失ひ、終に非命に終りたる。我も後妻を娶るまじと思ひたれども、家系の爲に迎へたれ、思へば娘に養子したりしこそ中々に得策なりけれど、日夜鬱々と樂し

まず。夫婦の間自ら疏隔して家中の空氣も陰鬱なり。されば妹紅蓮はかの夜以來姉君見え給はず、又彼の日以來何となく父母の顔色も物思はしく母との間も隔てある様に覺えければ小さき胸に秘めかねて、一日母に尋ねたるに、母は甚だ邪慳に姉は虎に衝み去られ、弟も亦傷つきたりと許りにて細かに教へんとせず。紅蓮は猶も不審の晴れやらす我が室内に淨座して熟々來し方を思ひやるに、愈々姉君のなつかしく、さるにても姉君は何故に予をおきて彼の夜一人出行き玉ひしかと怨し思ひつゝ不知不識まどろみたるに、夢非夢の間に姉長花森漫たる水中より仙女の如き装ひして黃龍に跨り上り出て、我を一瞥して其の儘過行かんとす。紅蓮は駭きて姉君姉君と呼ぶに振り返りて、今日是我玉皇上帝の命を受けて薬を三神山に採りに行かんとし、甚だ忙匆なれば妹と物語りも儘ならず、我を無情とな思ひぞ。御身も久しからずして我が許に來るべき人なりとて往き過ぐれば、妹は愈々心亂れやよ暫待ち玉へと姉君を追はんとするに、黃龍大喝一聲するに驚き覺れば南柯の一夢なりけり。紅蓮は愈々訝しく思ひて、一日父母の居並ひ玉ひたる折夢の事共語り出て如

何なる事ならんかと尋ねたるに、父は長太息して涙數行下るのみ。母は眉を逆立て、子供に何の夢あらん、夢ありとて何の意味ある夢を見るべき、詮なき事云ひ立て、親の心を騒かすものにあらずと叱る。紅蓮は母は何故にかくも邪慳に坐すやらん。父も語らず、母は怒れば尋ねんことも難しとて打ち案じたる末、かの愚なる弟長剣を欺くこそ善方便なれとて、一日母の外出せし際に猶病床に臥せる長剣を甘言を以て誘ひ騙かり、終に盡く事情をさし出し餘りの事に曾潰れ、我が室に歸りて堅く戸を鎖し身を投げて啼泣す、あゝ哀れなり我姉君、不幸なるかな姉上、人並優れて美しく怜しく生れ玉ひつゝも、二八青春を空しく過して女の務めを盡さず。人は天命に死しても不足に思ふなるを非命に死し、死して猶あらぬ悪名を雪ぐこと能はず。あはれ婦徳を失ひし女は既に死せるに同じきは我が國の教へなり。汚名を負はせて又非命に死せしむるは人を殺して又其の肉を剝るが如し。恐ろしき繼母の心かな。我も行末は必ず姉君の迹を追はしめらるべき身の生きて何かあらん。一日生くれば一日憂、二日生くるは二日の憂ひなり。直ちに死して魂魄姉君の傍に往



さ末長く兄弟相離れざらん。いつぞやの夢の今ぞ思ひ當れるとて輾轉して哀泣すさるにても姉君何處の水に身を投げ玉へる。門前一步の外を知らぬ處女の、何をしるべに尋ね行かんこと難し、何か方便あるまじきかと打案じ居たるに、庭前の花樹に異鳥の聲頻りなり、窓を開けば見馴れぬ青鳥、花樹を往來して頻りに鳴く。其の音悲涼にして憂愁を訴ふるが如く久しくして去らず、紅蓮は熟々打守りたるが、不圖さても見狎れぬ青鳥かな、或はこの鳥姉君の幽魂なりしか、姉君の暗に我を誘ひ玉ふにあらぬかと心付き。若しこの鳥明日も猶來りて呼びたれば必ず姉君の召し玉ふに違ひなし、我この鳥に導かれ何處へなりとも赴かん、され共我も亦家出したりと知りまさは、我父の心や如何にもわさび。双玉一顆既に碎けて櫛の實のひとつの慰めなるに。切めて遺書を認めて不孝の罪を謝しまつらんとて、雲箋を延べて。哀い哉。我が生みの母早逝し玉ひ、我が兄弟相扶け來りたるに、一夜姉上は悪名を負ひて非命に没し玉ふ。我が兄弟は父の許を離れず事へまつりしこと廿年。かゝらんことは夢にも思ひかけさや、父に先ちて兄弟一時に死するは大罪なり。さ

れ共今後再び父の聲音を聞かず父の形を見ざるべし。父は今日限り不幸の子我紅蓮を忘れ玉ひて永遠に思ひ出し玉ふな。我は今はの際にも父君の萬壽無疆を祈りまゐらす。不孝の子紅蓮泣書と認め。密に封じて父上様と上書し壁に貼り付け、更に身仕舞したるに日既に暮れて明月東天に皎々たり。時に青鳥猶花樹を去らず頻りに鳴いて我を呼ぶが如し。さては愈々姉君の靈魂なめりと思ひて、青鳥く、汝は我を姉君の身を投げ玉ひし池に導くかと問ひたるに、青鳥は應諾するが如く首を下く。いてや我汝に従ひ往かん。あゝ十八年起臥したるこの室も、今日が永別なるかとて我家を振り返りく、とほくと女の足の覺束なく青鳥の後を追うて出て往く。道は村を離れて山に傍ふ、山寂々水重々。櫻桃の花咲いて黄鳥悲鳴す。數時歩み來れば青鳥止まりて進まず。路傍を見れば池あり水陰森たり。こゝぞ姉君の終焉の處か、我も争て後れんと裳をかゝげて入らんとす。時に水中妖氛立昇り青空の中聲あり曰く、あゝ紅蓮汝何故此に來れる。人間一度死すれば再生き難し。青春の身を以て餘りに命を輕するな。早く早く家に歸れと。紅蓮は姉の聲と思ひてやよ姉君

よ、何故我を捨て、獨りこの世を去り玉ひつる。我等兄弟は同日に生れずとも同時にせんと祈りつるものを。我もこの世に居るべき身にあらず。早く姉君の許に往きまつらんと云へば、空中に啼泣の聲きこえ、池心の妖氛頻りに動揺す。紅蓮は泣いて晏天に姉の悪名を雪ぎ玉へと祈り、裳をかへげて面を掩ひ決然として深きに進めば、はや姿は没して水陰沈として静なり。

二女没してより靈魂九天に達して鬼神となり。かの池中毎夜冤を訴ふるの哭を聴き、終に往來する人絶え。又深更冤鬼郡守の夢を駭かすに、郡守皆駭死し三四更迭したれ共終に赴任する者なく、郡守缺くるに至りぬ。されば國王も頗る憂慮まし／＼たるに、時に全東浩なる人物あり、剛直にして高明なり。自薦して鐵原郡守たることを乞ふ。國王即ち許可ありて赴任の時に更に細かに注意する所あり。

東浩登任するや郡吏を呼び、前任の諸郡守鬼に襲はれて駭死せるの事ありしと聞く果して然りしやと問ふに、實にもさる事打續きて今は郡政も荒廢するに至りたりと答ふ。東浩聽き了りてさるか今夜は郡吏皆火を消さず静に坐

して徹宵せよ。我も寝ねずに明さんと、客廳に燭を點じて靜に坐して周易を讀む。夜三更に至れるに綠衣紅裳の一美人跣踏として現はれ來り、東浩の前に伏拜して動かず。東浩靜かに汝何故なれば深夜郡廳に入來れると云ふに。かの美人顔を上げ、涙珊々として蒼頬におちつゝ、妾は郡邑兩班妻無用の二女紅蓮なり、母は我が四歳の時早逝し玉ひて我姉長花は時に六歳なりき。父も家政の不便に堪へかねて、後妻許氏を迎へたるに、始めは善く我等姉妹を愛育せしが、未久に其の腹に長劍以下三男兒を擧ぐるに及び、漸々心邪まとなりて我等を虐待し、終に姉二八青春の婚期を失はしめ、我も同じく長して二八の歳となりぬ。一日繼母は鼠の皮を剝いて之を以て墮胎の兒と偽はり、父を欺きて終に姉をして悪名を負ひて某池に投して死せしめぬ。我も之を探知りて到底命の長からぬを覺りて同じく其池に投して死せり。元來我父は心弱く又家も貧しかりつるに、繼母は富家の女にして、僕婢十人米千石を持ちて嫁し來たり、されば父は常に繼母に制せられ、又繼母は妾等を嫁せしむればこの家産を分ち與へらるべからず、實子に與ふる財産減せんとて終に害せ

んの心起りしなり。天帝妾等の冤を憐み鬼神となりて之を訴ふるを許し玉へば之を郡守に訴へて姉の冤を解かんと思へとも、歴代の郡守皆臆病にて終に妾等の意を達せず。今幸に賢尹の來ませるに逢ひたり。願くば早く天に替りて姉君の悪名を雪ぎ玉へと言々哀絶なり。言ひ訖りて搔消す如くにして在らず。翌朝全東浩書記を呼び、郡邑に妻無用なる兩班ありや、其の家族何人、其の男女在りや否や、詳かに述へよと云へば。書記は知れる限りを演述して、かの二女の靈魂猶彼の池に留まり、毎夜冤を訴ふる聲池心に聴え、夜は彼處を往來する人もなしと語れり。即ち東浩は司令に命じて妻無用妻許氏男長劍及其の弟二人を招喚せしめ、此に法廳を開き。まつ妻無用に向ひて、汝が二女は非命に死したりとさく、如何にして、誰の爲めに命を落せるか詳かに述よと云ふに、無用は顔色焦瘁して、涙徒らに流り、我の不徳かの二女をして非命に死せしめたるものにして、其原は詳かに知らずと答ふ。其の時許氏は我から進み出て、辯舌滑かに、郡守は新來にましますば世評をのみき、玉にて迷ひ玉ひにけむ。長花は二八に餘りてまだ婚姻せざるに堪へかねて、不義

を行ひ墮胎の極惡を犯し、我等夫婦のみ之を探知りて家名を思ひ兒を愛し、世間に知らせざらんとせし中に、自ら耻ぢてか家を出奔し終に何處にてか死せりとか。妹も姉を摸して不貞の兇行をなし、一夜家出して歸り來らず、生死まだ分明ならずと云ふ。其の時郡守は然らば其墮胎せしものは確かに胎兒なりしか何の證據があると詰れば、許氏は從容として、實に妾もなさぬ中なれば後日何の疑の起らんも知れじと思ひ、墮胎の胎兒は密かに藏しおき今日も持ち來りて此處に在りとして、懷より取出すをよく見れば、實にも二三月の胎兒に似たり。郡守も默然として打案じて未だ裁斷する能はず。我猶よく證議すべければ今日は此の儘歸り重ねて喚出すを待てと退廳せしめ、室に退いて打案じ居たるに、其夜また前夜の美人現れ來て怨し顔に、名郡守と頼みしも徒なるか。繼母の罪は天地鬼神も皆知るものを、何故かの胎兒と云ふものゝ中を割き見玉はざるや。又我が父は人物誠に好善にて何事も知り玉はざるなれば、必ずその罪を問ひ玉ふな、かの長劍は繼母の惡を援けしものなれば法の如く處し玉へとて再拜して又消え失せたり。郡守は此に益々靈異を感じ

翌日又法廷を開いて無用夫婦長剣兄弟を召喚し儼然として云ふ様、昨日の胎兒今一度改め見るべし差出せとて、と見かう見て傍の司令に命ずる様、この物の中には果して何かある割き改めよとて割かし見れば鼠の糞腸管に満ちたりけり。此に郡守は眼を怒らしてハッタと俾倪まへ。おのれ奸獍邪知の毒婦、かく明らかなる證據を見ては辯する詭りもなかるべし。全く汝が繼娘の悪さに、あらぬ汚名を負はせて非命に死せしめたるものなり。察する所胎兒と云ふは鼠の皮を剥ぎたるものならん。猶白状せぬか、痛き目見せむかと聲高く詰責すれば。父なる無用は恐入り、予も世評に知らざるに非るも、今眼前證據を見ては今更ながら我身の思慮の足らざりしを恥ぢて已まず、夫として婦が悪を制する能はず、この極悪に至らしめしは責め誠に逃るゝ所あらず。願くば某も妻と同じく處刑させ玉ひて早く二女の許に行きて過を謝せしめ玉へとて、潔く服罪す。妻なる許氏は恐入りながらも猶辯陳すらく、妾が長花を死せしめしは彼女の心の如何にも倨慢にして妾を母とも思はぬ爲なり。長花が二十歳の一日、密かに紅蓮との密談を聞きたるに、妾が悪聲を擧言ふこと

言語に絶せり。かゝる不順の娘等は其儘家に生長せしめては後に如何なる事をか爲さんも知れずと、妾か身の危険を感じ、終に哀れなれ共奮の花を散らしたるなり。され共妾は固より處刑は覺悟なり。長男長剣は其性愚鈍にして惡意なし、唯々妾の命の儘に動きしのみ、其も天罰にてか生れも付かぬ不具者となりたれば、願くば赦して罪を問ひ玉ふなど。極悪の婦も子には弱く切に哀願したり、長剣及二弟は父母の處刑されんとするを見、皆涙を流して身を以て代らんと願ひを立つ。聽き了りたる郡守は曰はく。この場に臨みて尙強辯するは毒婦の本性愈々現はると云ふべし。され共、汝の罪惡は古來未曾有の極非道なり。我れ一人の裁判には餘れり。巡察使に上申して其の決裁を仰ぎて後に宣告せん、もの共彼等を獄に送れよと命じてこの日の法廷は果てたり。

鐵山郡守の上申を受取りたる平安道巡察使も餘りの極非道なる罪案に打驚き、鐵山郡守の意見をも具して國王の親裁を乞へり。國王大臣も古來まだ聞かざる大罪なりとあつて、庶人の戒めの爲許氏は引廻はしの上磔。長剣は絞

罪に處せよ。妻無用は御叱りの上後來を戒めて放免せよ。罰すべきものなれ共兩娘在天の靈魂の所願なれば特に赦すなり。他の二男は構ひなし。長花紅蓮の爲には雲冤の儀式を行ひて碑を立て永遠に傳へよと決裁あり。上裁やがて郡守に達すれば、畏みて法の如く取り行ひつ。一面又彼の池水を探りて二女の屍を揚げたるに、面色宛ら生けるが如く、衣裳端然として誠に良家の淑女なり。郡守を始め見る人感嘆せざるはなく、丁寧に之を棺に納めて名山に葬り、三尺の碑を立て、之に海東有名朝鮮國平安道鐵山郡妻無用女子長花與紅蓮不忘碑と刻せり。建碑の夜二女又來りて郡守に深謝し、久しからずして君官位陞進せん、是れ聊か妾等の謝恩なりと知り玉へと云へり。果して全東浩は其後統制使に進めりとぞ。

## 再生縁

今は昔、慶尙道安東郡の兩班李相坤の獨り息子に宣根なる風流貴公子あり

けり。容貌秀て、玉樹の皎月に對するが如く、才藻も亦相如揚雄の流を斟めり。齡既に青春二八に達して漸く物心付きたる頃となれば、漫ろに好心も動き、あはれ蘇小姐の如き相手もがなと思はざるにしもあらず。され共家風中々に堅ければ未だ折柳攀花の味も知らず。日夜圖書推裡に端座して攻學にいそしみ。やがては科擧に應じて家の風をも揚げんと志せり。

一日書に倦み机に倚りてまともみたるに、夢非夢の間に絶麗の天女雲裳麗遷として現はれ來り、曠然として一笑し、妾は上界の天女なれども玉皇上帝の結び玉へる奇縁にて、郎君の箕箒を奉ずべき身の上なり。され共猶未だ天機至らざれば幾年かを待つべし、郎君も心得玉ひて日夜身を堅固に保ち、決して仇し女に心動かし玉ふなと、紅潮頬を染め、さらば妾はもはや歸りなんとて、深々と禮をなし恍惚たる彼を顧みつゝはや雲間遠く昇り去りぬ。彼は驚き覺むれば、是れ現に似て現にあらず、夢にして夢にあらず、眼を閉づれば眼前に麗容現はれ、靜かに聽けば耳裡に嬌音きこゆ。立ちて窓を開けば日猶午にして香草上に飛々たる蝶蜂長閑かなり。これより秀才思慕の情胸に爵

し、晝は精神雲間に飛び、夜は夢圓かならず。形容漸く枯稿し神氣も亦た衰へたり。思に餘りては涙潸然として墮ち聲を擧げて青天に天女を呼ひぬ。

一日復たもかの天女現はれ來り、郎君妾が爲に日夜思ひを苦め玉ふこと天上にも通ひて、妾も同じく思ひに堪はず。され共天分未了玉皇上帝妾が下界に降るを許し玉はず。實に桃栗を植ゆとも實を結ばしむるには三年を辛乏すべし。我等の縁も猶幾年かを待たてはあるべからず。思ひ玉はるなどにはあらね共、思ひて身を損じ玉ふな。され共忘れ玉ふは嬉しからじ。こは妾が姿を天上の畫工に頼みて描かしめしものなり。妾と思ひて楣間に掛けて眺め玉へ。又これは金製童子なり。君が筆架に机上におきて妾が志を賞て玉へとて、二品を渡せば、秀才は涙迸らして彼女の手を握り、天人とは何故かく心強きものなるか。この世の一年は天國の一日なりと云へばなるか。桃栗は實らずとも我には何かあらん、君と逢ふこと一年晩まりなば我はこの世に長らうべくも思はじ。君にも情あらばこの儘この世に留まり玉へと離さんとせず、天女も情に迫まれども流石に振り解きて、天分未了は如何ともすべからず。君が

家に召使はる、梅月といふ侍女は容姿中々美しく、心立も賢しげなり。妾と逢ひ玉ふ迄の慰めに彼女を近け玉へとて、又も雲上に昇りたり。秀才は涕泣して目を開けば、夢中のかの二品はまさしく机上におかれたり。軸を披き見れば真に名手の作と見え、天女直ちに其處に立てるが如し。之を楣間に掛けて眺むれば、妾はおなじけれとも思ひは遂ぐべくもあらず。畫ける餅を與へて餓を愈せよといふ天女の心強さのいと覺ゆるなり。され共天女の教へしが如く之を眺め暮し、金童を机上に置き、梅月を近け、辭々として月日を送りけり。やがて家人かの肖像と金童を見付け、來歴を聞き驚き、之を口より口に傳へたれば、近隣の人々も李氏は古今未聞の寶物を天より授かりたりとて我もくくと見物に來り、中には品物を齎して見せてもらふもありて、李氏は思はぬ得つきたり。

され共秀才は思病愈々烈しく今は、や、父母の目に付きてかく衰へては長かるまじと心を惱ます許りなり。又一夜の夢に天女現はれ、繪姿見玉ふ許りにてはまだ心治まり玉はずとや。なまじひ妾が天縁の結了を待てばこそ君に

もかゝる憂ひを見せしむるなれ。妾も今は心決しぬ。遠からず君に逢ひまつらん。され共此處は俗地なれば下ること難し。妾は玉蓮洞に君を待たむとて、又昇天し去りぬ。秀才は暗夜燈火を得しが如く思ひて、父母の許に往きて我も近頃氣分いと勝れず、日夜心地苦し。人の言葉に烟霞に親めば辭心解くとか、今日より幾月かの暇を賜はりて旅行に上らしめ玉へと願ふに。父母もかよわき我が兒が旅行するに堪へべきや、猶少し病愈りて出發せよと止められた共、聽かざればさらばとて従者一人添はしめて立たしやりぬ。玉蓮洞とのみきつれ、何道何郡といふことを知らざれば、唯だ到る處の名山勝景を尋ねて、其處か此處かと歴巡れ共終に玉蓮洞を得ず。され共處換れば氣も換はり、鬱鬱漸く開きて健康回復し、旅用豊かなる儘に猶東西南北を歩きまはれり。一日風光極めて勝れたる山中に尋ね入り、あはれこの世にもかゝる景色のあるものかとて賞玩し、猶一逕を辿りて奥深く進み往けるに、山に倚り溪流に枕して一軒の風流樓閣峙ち、牌して玉蓮洞と云へり。秀才手を拍ちて踴躍し、此處なりけり、實に我が天女の棲むらん處なりとて、足を早めて閣中に

進み入れば、風鈴靜かに鳴りて青簾輕く動き、中に人ありとさぼしく翠聲妙に響けり。案内を乞へば簾を捲いて絶代の美人顔を現はせり。其の容顏を眺むれば夢寐忘れやらぬかの人に彷彿たり。この人なりきとて更に進み入らんとすれば、美人は佛然としてこゝは仙境なり、何處の俗士か妄りに侵入り玉ふ、早々歸り玉へと云ふにぞ。秀才は案に相違して、縁ありて來れる我なり、何とて情なく待遇し玉ふとて去らんとはせず、され共美人は更に言葉強く必ず立去り玉へ、入り玉ふなと拒めば、秀才も詮方なく、悄然として一僕を隨へ元來し道へ戻りかゝれば、かの美人何思ひけむ急に笑ひ崩れて喃郎君歸り玉ふな、君來るやと待ち居たりしものを入り玉へと喚ひ返し、曠然として打笑み、如何に君と因縁深かりとて、初より許しまゐらすべき、一度は拒むが女の常なりとて、いそぐと足をすゝがせ、手を取り中に入れ、我が室へと案内しぬ。實に調度の美しさ物として目を驚かさぬはなし。まして彼女の容顏の麗しさ、夢ならぬ今の現に近づき觀れば、例へば秋水より出てたる玉蓮に似たり。なべて世間の婦女子は之に向ひては婦女子とは云ふべからず。

二人打解けて心行く迄物語りし、酒出て肴出て、折からの明月に彼女は琴かき鳴らすに松籟溪聲通ひ響きて、秀才の魂は天外に飛揚せり。され共彼女は打笑みながら、君が已み難き願ひに暫く此處に降り來りたれ共、まだ天縁結了の時期にあらねば、夫婦の契りは許されじ、之を犯せば天譴免れじ、たかくて君と二人、夫婦にあらず、兄弟にあらず。朋友にもあらず、樂しく幾月を送りまつらむ。君もこれを聞分け玉へと云ふに。秀才は又心平かならず、やがて酒二人の頬を染めたる頃、男心の剛きは女を打負して、天時まだ到らぬを人力を以て到らしめたり。

秀麗なる玉蓮洞には玉蓮の如き婦と住める秀才は、月日の立つの早きに打困じつれ共、もはや家を出て、月數も積りたれば、親君の如何に我が爲に愛ひ玉ふらんとて、或日女にも相談して乗物仕立て我家に向ひぬ。父母は獨り子の秀才が數月杳然として消息なければ日夜憂愁したりしに、忽然絶世の美女を伴ひて歸り來りたれば、甦り歸りし如く打喜び、始終の話共よく聽きて願の如く夫婦となし、別に一棟を邸内に起して、新夫婦を住まはせたり。女

は天人なれども諸藝に達し、この世の主婦のする業は總てなさる所なければ、父母も喜譽ふるにものなく、嫁女くと愛しけり。まして秀才は揚貴妃を得たる玄宗ならねど、彼女と共にあらざればこの世の何物も樂しからず、日夜彼女と相添ひて、共に笑ひ、共に喜ぶにぞ、口善惡なき村人は鴛鴦どと惡口もしけり。

やうく年月も経行きて、はや彼女は一男一女を擧げ、琴瑟益相和し、秀才は蝶、彼女は花、瞬時も離れず、家名を揚げんの念も打忘れ居たるに、不日都にて科擧ありとの報きこえられたれば、父は彼を招き汝も年頃になりたれば今番科擧に應じて登龍門の道を開けといふに、彼は少しも心進まず、身に不足あればこそ旅もし勉強もして科擧も應せぬ。我が如き願ひ既に盡く足れるものは何の爲に更に苦路に就かんといふに、父もほとく困じたり。其夜彼は妻に今日の話をすれば、妻は端然と形を正し、其は我が夫の言とも覺えず。大凡男子と生れては龍門に登りて高官を得、我が名を輝かし家風を揚ぐるを以て面目とす。家に心惹かれてこの儘鄙に埋れ了らんとし玉ふは、男子の中



の男子と常に誇る妻が所天にも似ませぬ事なり。必ず決心して明日早く都に立ち玉ひて首尾よく科擧に及第し玉へ。若し度落第し玉ふことあらば、妻は再び君を見むとせずと強諫するにぞ、被は力なく然らばとて旅立の用意して一僕を伴ひ驢に騎して京に向ひぬ。

され共幾年間須臾も離れざりし我が妻と幾月が別るゝといふなれば、涙闌干として手綱を濕し、一步進みては止まり、二歩進みては顧み、終に堪へえ得ず。私かに驢を引出して一鞭を加へて我屋に戻り、土墻を越えて妻の房に忍び入りたり。妻は驚きて拒め共力なし、今宵限りぞ明日よりは足を早めて都に上り玉へと戒めつ。彼は翌朝味爽人知れず復た客舎に歸り、此に始めて眠に就き、日三竿にして起き出て緩々として朝食し、昨日の如く慢行すれば、二里にして日暮れたり。此の夜も亦驢に鞭ちて妻を驚かし、翌日も亦かくて連夜三度妻を訪ひ、流石に路の遠ざかるにぞ、四日目よりは思を断ち始めて足を早めて都に着きぬ。

科擧ある時の都大路の有様こそ賑はしけれ。各道より上り來れる數萬の秀才共肩摩殺撃し、あはれこの中誰か果して龍門に登りて昇天するか。されば李宣根は元來賢しき秀才なれば、我こそ必ず壯元を占めめと發奮して攻學したれば、應製の文章雲錦の五彩を放ち、數萬の秀才顔色なく、此に目出度く壯元第一に及第し、京鄙に風采を想望せらる。及弟となれば色々の儀式共あり、又任官の命を待つべければ、心は常に故郷の天愛妻の傍に通へ共、一日くと數月間京都に滞在しけり。

李宣根の家にて宣根出發せし其の夜、老父は流石に家長の心配りて我子の留守宅を巡視したるに、何かはしらず、ひそくと我が嫁は男と物語り居るにいと訝しみ、貞操蓮の如き嫁女の誰を引入れて語らふかと足止めたれ共、無下に戸を開けて見るべきにあらねば、其儘歸りぬ。その翌夜も翌々夜も巡視するに男の聲の洩れきこゆるに愈々疑心は晴れやらず。此にかの秀才の侍女梅月女は、初め天女の取持ちにて秀才に近けられしを此上なき幸と喜び、願くば終生妾となりても此君に仕へむと思ひしに、程なく秀才は天女を伴ひ

來て本夫人となし、己は忽ち秋の扇と打棄てられ、それよりは梅月居るかとの言葉もあらず、眼前に鴛鴦にも優る夫婦の濃かさを見せしめらるゝに、心火燃えて炎々たり。され共固より身分の違へば、ちつと堪へて笑つて過せども、秀才の應試に京に旅立ちながら、連夜三度數里の遠きを馳せ還りて、一刻の逢ふを喜ぶを見ては、餘りのことに嫉ましく、終に一番計を案じ、翌日村裡の一破落戸に錢多く與へて頼み、晩に若夫人の室前の階下に蹲ませ。老父を欺き、この頃連夜若夫人の室に男の忍ひ入るを見たるに、今夜も確かに其のものらしきもの若夫人の階下に在りと告ぐるに、老父はいざとて棍棒を提げて窺ひ寄れば、實にもそれらしきものあり。己と走り寄り打たんとすれば、若者は飛鳥の如く土墻を躍り越えて亡げ去れり。老父は即ち怒心頭に激發し、ふのれ氏も素狀も知れざる賊賤婦、終に清き我家に汚染を與へぬと、足音荒く内房に躍り上り、嫁の襟髪攫みて死ねよと許り打据えつゝ、涙を迸して毎夜知らぬ男を引入れて不義を行ふ賊婦奴と打罵る、彼女はさては彼の事知れしと覺ゆ。され共明ら様に由を説けば我が夫の非行を許くに似たり。

照して打るゝに殆ど息も絶えむとす。この時彼女は挿せる玉釵を抜いて誓ひて曰く、我若し實に不義を犯したらば玉釵下りて我胸を刺せ、若し清白ならば降りて階石に刺されと仰いて天に向て投げるに、落ち來て階石を貫き釵頭を没す。此に至りて老父は奇蹟に恐駭し、さては我の誤ちなりしか。老人の短氣を赦せよとて我が室に退き、母は一層嫁女に同情し、汝の貞操は天地皆知れり、老父の誤りは氣に止むるなど丁寧に慰めたり。され共嫁は女として一旦不貞の名を受け、まだ明ら様に證據の立たぬ内はこの儘恬と生存らへ難し。戀しき夫の顔一度見たけれ共此も亦定まる運と諦め、小劍を抜いて咽喉を突かんとするに、側に遊び居たる九歳になる長女は、驚きて母君危し、何とてさ様のもの咽喉に突立てむとし玉ふ。止め玉へと手に絶れば、母は力萎えて打笑み、實に可愛ゆき其方等のあるものを忘れたりき、明日は母が伴ひて近くの山に花見に往かむ。この新らしき衣着て見よやとて、仕立てし許りの赤き衣取出て姉と弟とに着せ、もはや夜も晩くなりぬ。早く寝ねて明朝早く起きよと賺し、眠りたるを窺ひ、心靜かに咽喉を貫き香魂空しく天に歸

しりぬ。

一七

翌朝兄弟は朝より目覺し、母の有様に驚きて泣號し。やがて父母婢僕迄き、付け走り來り、殊に老夫は我が輕卒なる疑より貞節正しき嫁を殺し了りたり、この事京なる忤知りなば彼も到底生きてはあるまじ、忤を失ひて我が餘生何の樂みかあらむ。實に誤れり短慮なりきとて面を仰いて長太息す。母は其處に泣伏して三國一の嫁を非命に死せしめたりとて、専ら老父を打怨す。されどかくてあるべきにあらねば、葬儀の準備もせてはとて、かの刃を取り去らむとするに、堅く握りて離れむとせず。さらば其儘に死體を移さむと力を合せて持ち擧げむとするに、例へば磐石の地より根生ひし如く動かすべからず。さては貞女の一念此に上まりて忤の來る迄は動かじとてなるか。恐るべし畏むべしとて、流れし血潮を奇麗に拭ひ、室の裝飾杯清淨にし、一家神に事ふるが如く敬へ畏しみたり。

都に滞在せる秀才は、彼此と事多き儘に思はずも客舎に月日を過し居る内、一夜夢に最愛の妻咽喉より血淋漓として迸らし、顔色蒼然として枕邊に現は

れ、詳かにありし事共物語り、我か念ひは未だ殘骸に残り留まりて君を待つとて消え失せぬ。秀才は夢の如くなれ共覺めて猶動悸烈しく、冷汗背に洩かれば、心中々落付かず。用事も無理に片付けて夜を日に繼ぎて故郷へと向ひぬ。

父は我が兒壯元に及第せし通知に接し家門の名譽是上なし、これより李氏昌へむと。親族へも其々知らせやう、限りなく悦へども、嫁の一件を思ひ出せば、忽ち冷水を潑かるゝが如し。忤の奮發も半は嫁の勸めに困り、歸る彼も妻や如何に悦ばむと勇み來るべきを、我か誤りにて死に致しきと知りなば定めて失望もし怨みもせむ。困りたり如何にかせんと日夜老妻と額を鳩めて疑議し、終に漸々これならばと思はるゝ一計を案出した。火を救ふには火を用ふべし。水を救ふに水を以てすべし。婦人故の憂なれば又婦人を用ひなば解けむぞとて、慶尙道中美人第一の聞えある大兩班の秘藏娘に縁談を申込めるに、壯元及第の秀才よりの縁談なれば、二ツ返事に承諾し。これも老父の考案にて、忤が一旦我家に歸り着きて、妻の慘狀子等の哀れを視ては中々

再婚の念起るべからず、悴を半途に擯して可然云ひ賺し、無理に婚姻を承引せしめ、其の場に直ちに儀式を擧げむ。さすれば新婦も慶尙第一の美人なり、やはか之に心の移らざるべき、かくて道中幾夜の旅寢を重ねて家に歸り着かば、悲しからめども亦慰樂する所もあらむとて、此由詳かに先方にも知らしやり、乗物美しく仕立て、老父も自ら之に附添へ、富めるに任せ幾人かの従者僕をも従ひ、悴の出立の日取を問ひ合せて、之を中途に待ち受けたり。

秀才は彼の悪夢以來、食味を覺えず、目に好色なく、耳に好音なく、走馬に更に鞭を加へて、道を倍して急ぎ來れば、中途の一驛にて老父の出迎ひを受け、不審に堪えねど、流石に禮儀正しく忝きを聞え上げなどするに。老父は云ひ濫りながら嫁女の非命に斃れし事の顛末物語り、誠に我の粗忽なりしかども、疑心生ずるは神ならぬ身の免れぬ所、我も決して惡意ありての爲にはあらず。汝もいろ／＼の苦勞して添ひ遂げたる妻の頓死は悲しからむも、是迄の縁と誦らめくれずや。其の代り我も汝への罪滅しに某郡某氏の女、慶尙道第一の美人を汝の後妻にと擇び、縁談既に調へて汝の承諾を待ち居れり。

我も一度彼女を見しに、太液の芙蓉か、春雨の梨花か、天人は人間ならねば先妻とは較ぶべからざるも、人間中にはか許り美しきは又あるまじと思ひたり。まして才調優れて貞淑の聞え亦高し。逝者は水の如し、復た追ふべからず。思ふべからざるを忘るゝは賢者の業なり。汝も先妻を悲みて傷せず。更にかの淑女を迎へて老父の老懷を安ませくれずやと言葉巧みに説くに、秀才は胃潰れ容を正して父に向ひ、妻の悪名は雪がれたるに似たれ共未だ明し立たざれば我も恥を忍ひて聞え上くべしとて、京へ旅立ちの夜より三晩忍ひて妻を訪ひたることを打明け、全く妻の死は我か情に流れて淫に至れる罪なり。我が爲に疑を受けて我に立つる貞節の爲に彼女は自決せり。彼女の墳墓も未だ定めざる今日、何の耳ありてか再婚の話を聴く。今の我か眼には三千世界の女は見えず。あはれ父君母君と殘る餓の二人の兒さへなくば、我はこの儘妻の後を追はましく思ふものを。父上も憂きに心暗み玉へるか、常にもあらず人情を斟まぬとを宣ふもの哉。重ねては決してこの事云ひ出し玉ふなとて、押へんとして押へ切れぬ怒りの景色さへも現はれたれば、父も案に相違し、